
私八君ノモノニナル

雑草生産者

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私八君ノモノニナル

【Nコード】

N4766E

【作者名】

雑草生産者

【あらすじ】

貧血から始まるまあまあ穏やかかもしれない「僕」と「彼女」の恋の物語。コメディ風純愛ストーリーなんですよ。「女子供が見るもんじゃねえ」と思います。えっちなのはダメだと思えますな人は読まない方が宜しいです。

貧血とお姫様抱っこ（前書き）

タイトル見て分かるとおり「君八私ノモノデアル」の関連作です。
でも、そっち読んでなくてもなーんの問題もありません。

貧血とお姫様抱っこ

僕は貧血持ちだ。

どーにも体温が低いのか、血が少ないのか分からないが、僕はよく貧血を起こす。

朝礼、集会、体育などなど。あらゆる場所で僕は、長時間起立していたり、少し激しい運動をしたりすると、血の気を失い、ふらつと倒れるという自他共に認める迷惑極まりない習性を持っている。その度に周囲の人々には迷惑をかけてしまっているので、大変心苦しい。

そんなわけで、僕が卒倒する度に、僕を保健室に輸送している保健委員の鈴木君とはすっかり親友の仲だ。貧血から始まる友情つか！。

よく運び込まれる関係で保健室の先生とも仲良しだ。

仲良しとは言っても、よくエロ漫画とかであるような大人な関係ではない。

「先生が気持ちいいこと教えて、あ・げ・る」

「せ、先生……あぁっ！」

「ほーら、気持ちいいでしょ？ さあ、いっちゃんなさい」

「あ、あ、ああ、だめ！ だめだよ！ 先生えっ！」

とかいうことはないのだ。

実際は、

「かっぱえびせんて本当に止まらない止められないよねー。ぽりぽり」

「そーですねー。ぽりぽり」

「もしかしたら何か中毒成分とか混入されてる？ ぽりぽり」

「かもしれませんかあ。ぽりぽり」

「えびせんは何となく分かるけど、かっぱって何？ ぽりぽり」

「さあ？ ぼりぼり」

とかいう会話を頬杖ついてテレビ見ながら、だらだら怠惰にしているような仲だ。色気もエロ気も全く感じられない間柄だ。

かつぱの意味が気になる人は自分で調べて欲しい。僕は別にどーでもいいので調べない。

さて、その日も、僕は朝礼で貧血に見舞われた。校長が30分も益体もないことを延々とくっちゃべったのが原因だ。

つまり、要点は教頭が朝礼の冒頭に言った「最近、市内でインフルエンザが流行っているから気をつけるように」ってことだけだろうに。何でそれだけのことを、校長が話すと30分にもなるんだろう？ これはもう魔術としか思えない。

そもそも、病は気からとかそんなありふれたっていうか使い古されてぼろぼろになりきってしまったている説教は言われなくても知っているし、分かっているし、嗽うがいとか手洗いとかをすれってそんな小学生じゃねーんだから分かってるってばー。と、こんなことを考えつつ、心の中で校長を罵倒したり、校長の演説の中で出てくる「えー」とか「あー」とかという言葉を数えてみたりしていた。50回を軽く超えた。

そんなふうに着を潰しながら、突っ立っていると、だんだんと頭のとっぺんからすうっと血の気が引いていく感じになってきた。あーあー。頭から血が抜けてるー。どんどん血が下に落ちていくーって感覚がする。体温がひゅえーって下がっていくのも分かる。これが僕の貧血だ。頭のとっぺんから血がどんどん落ちていって、意識が朦朧もうろうとし、くらくらしてくるんだ。

「ああー。駄目だー」

僕はぼそりと呟き、卒倒した。

「おい！ 大丈夫か！？」

危うく体育館の傷だらけのフロアリングに頭を打ちつけ、お脳おうちゅうに宜しくないことになりそうだったが（最悪、そこら中に脳漿のうじょうと血潮

をブチマケルところだった。まあ、そこまで床は固くないし、僕の頭骨も弱くはないと思うんだけどね）、運良く、後ろに並んでいた柔道部の吉田君が僕の体を支えてくれた。まあ、何度も卒倒している貧弱者が目の前でふらふらし始めたら咄嗟に受け止めるくらい誰でもするか。

「ああ、ありがとう。吉田君。もう大丈夫だ」

吉田君の胸の中で僕は弱々しく礼を言い、彼から離れる。我が身を救ってくれた恩人とはいえ、いつまでも男子の胸の中にいるのは愉快とは言い難いし、相手にも悪いからね。それに、吉田君。言っちゃあ悪いが、少し汗臭いよ。

吉田君から離れ、くらくらする頭をゆらゆら揺らしながら床に座り込み、僕は前方に呼びかける。

「おおい。鈴木くん。保健委員或いは僕の保護・輸送係の鈴木くん。また貧血だ。申し訳ないが、保健室に連れて行ってくれなにかーい？」

控え目ながらも鈴木君の並び位置くらいまでならば聞こえる程度の声で言った。まあ、言わなくても、彼は来てくれるはずだ。つまらない校長の演説の最中に、人が倒れば、大したことがなくとも、暇を持て余した級友たちが勝手に騒ぎ出し、いつかは保健委員に呼び出しがかかるはずだ。

しかし、周りの級友たちは騒ぐものの、待てど暮らせど愛しの……ごめん。そんなに愛しくは思っていない鈴木君はやって来ない。一体、どーしたというのか？

僕が頭のくらくらを我慢しつつ、お尻をフローリングで冷やしていると、突然、手を引かれた。

驚いて顔を上げた先にいたのは、少しだけ見慣れた美少女だった。眼鏡をかけているせいか、いつも表情が薄いせいか、知的でクールな顔立ちで、すらりと背が高く、僕よりも頭1つ分くらい身長が上だ。まあ、僕が小柄なせいもあるんだけど。ええ、そうですとも。

僕はチビですとも。だから、何か？ チビは悪いことですか？ チ

ビは悪ですか？ そうではないでしょう！

彼女と僕はあまり接点はなく、ただ、クラスが同じなだけだ。会話したこともあまりない。全然、ないわけではないけれどもね。

彼女はいつもの冷ややかにも見える表情の読めない顔で僕を見下ろしている。

「何か用かな？ 見てのとおり、今、僕は少し非常事態の状況にあるんだ。申し訳ないけど、急がないなら後にして欲しいな」

早く横になって、安静にしたいけど、体育館の冷たい床の上に転がるわけにもいかない。とっとと保健室の薬品の臭いが染み込んだ白いシーツの上にダイブしたいよ。そして、惰眠を貪りたい。

「それだ」

「は？」

彼女はぼそりと呟き、僕は首を傾げる。あ、頭を動かすと、余計にくらくらする。

「君は、今、非常事態だ」

「あ、うん、さっき言った」

「だからだ」

「……………」

駄目だ。話を通じない。伝聞によると彼女は結構まともっていうか秀才といってもいいくらいの成績を修めているはずなだけけれど、人格はなんと天然だったというのだろうか？

「理解していないな？」

彼女は呟きながら、もう意識がどこか遠くへ飛びそうになっている僕の手を握る。

「保健委員の鈴木は今日は休みなんだ。インフルエンザでな」

あ。そーだったんだ。親友といっておきながら、出欠状況も確認していない僕ってばお茶目さんだね。

しかし、今、まさに、校長が喋っていることで、こんな身近なところに被害が出ていたのか。インフルエンザ気をつけようって。てか、校長。生徒1人貧血で倒れてもまだ平然と演説を続けるのか。

「しかし、案ずるな」

何にも案じていないのに、彼女は一人で勝手に続けた。

「私がいる」

どゆことさ？ 別に、仲間が全滅して途方にくれているわけじゃあないけど。

「クラスには保健委員は2人いる。そのうちのもう1人が私だ」

彼女がそう言ったとき、僕は全てを理解した。彼女がここにいる理由。彼女がこれからしようとしていること。

「やだ！」

咄嗟に叫んだ。

「やだと言われても困る。もうこれは春のホームルームで定められたものであって、今更、委員を変更することなど……」

「そーいう意味じゃない！」

あ。叫ぶと、頭から更に血が……。脳味噌の中を血液が通らなくなつて、酸素不足に陥つてるよー。

それでも、僕は主張する。これは譲れないね。

「だって、君、僕を保健室に輸送する気だろう？」

「ああ。その為の保健委員であり、その為に私はここへやってきた。何だかちよつと格好いい台詞だな。そーやって仁王立ちして堂々と言つと、尚更だね。」

しかし、そんな格好いい台詞に騙されるわけにはいかない。

「いやだよ。いやだいやだ。だって、君はインフルの餌食になつた鈴木君の代わりをするというのだろう？」

「そうだが。私ではいけないのかね？」

そりゃそうだ。

「だって、鈴木君は僕を背負つて輸送してくれてたんだよ？ 僕は、この通り、歩けない」

現状を説明する僕の後ろでクラスメイトが話す。

「何か口だけは妙に元気じゃねーか？」

「こいつは、いっつもこーだろ」

「死ぬ直前までべらべら喋ってそうだな」

口だけ達者で悪かったね。まあ、事実で反論のしようがないから、無視。

「つまり、僕を保健室に輸送するには背負ってもらわないといけない」

頭がくらくらして支えてもらって歩くのも不可能に近いのだ。だからといって、女の子に背負ってもらうなんて僕のプライドが許さないのさ。器ちっさいとか言っつな。

「だから、私が君を背負って保健室まで輸送する」

「いや、だから、いやだつて」

「我俣わがままを言っつな」

彼女はそう言っつが、僕は承服できない。高校生にまでなつて女の子におんぶしてもらうなんて恥以外のなにものでもない。僕はぐずぐずとゴネて、彼女の背中に乗背するのを頑なに拒否した。

「じゃあ、しょうがない」

彼女はいくらか呆れの含まれた冷やかな表情で僕を見下ろす。

諦めてくれたか。さて、誰か鈴木君の代わりに僕を運んでくれる心優しい男子はいないかな？

「お姫様抱っつこでいくしかないな」

「ええっ！？ それはもつと嫌だよっ！」

思わず、僕は叫んだ。お姫様抱っつこつてあれだろう？ お姫様がされる抱っつこだろう？ そんな恥ずかしい方法で輸送されるくらいなら、床を引き摺られた方がマシだよ。

「そんなことを言われても、しょうがないだろう。背負うのが嫌ならばお姫様抱っつこしかない。幸いにも君は軽そうだ」

「チビのガリで悪かったね！」

「別に悪いとは誰も言っつていない。悪いどころか、私は……、その、良い……と思っつ」

彼女は眼鏡をくいっつと動かしながら照れくさそうに言っつた。君が良かったつて、僕は良くないの。

「とにかく、お姫様抱っこは拒否するよ」

「じゃあ、おんぶだ」

「おんぶも嫌だよ。誰か他の人に運んでもらうから」

「いや、それはいけない」

彼女は強い視線で僕を睨んで言った。

「病人を他の者に運ばせたとなれば、保健委員の沽券こけんに関わる」

彼女はそんなにも保健委員というクラス内職務に誇りを持っているんだらうか？ まあ、真面目な印象はある子だけだね。

「どーしても抗弁するとなれば、無理にでも輸送せねばなるまい」

「わあっ！ やめぶっ！」

結局、僕はお姫様抱っこで保健室に輸送されてしまうのだった。

私ハ君ノモノニナル

貧血とお姫様抱っこ（後書き）

ご覧の通り、「僕」と「彼女」のお話です。

つまみ食い

僕は昔からよくよく貧血で倒れる虚弱体質だから、保育園の頃から今までの10年以上も人に輸送されてきた経験がある。自慢することじゃないけどね。

でも、お姫様だつこで運ばれたのは初めてだなー。

「滅茶苦茶恥ずいっす」

「君がおんぶは嫌だつていうからだろう」

「いや、おんぶが嫌なんじゃなくて、君に運んでもらうのが嫌なんだつてば」

「何故だ？」

彼女は微かに眉根を寄せ、首を傾けて言った。

「何故だつて……。そりゃあねえ、君、よくよく考えてもみてよ」
だつて、お姫様だつこですよ？ 普通の女の子でも恥ずかしがるあのバカツプルの所業ですよ？ 結婚式くらいでしか見たことがないあのお姫様だつこだよ？ しかも、それを僕がしてんじゃなくてされてるんだからその恥辱といつたらもう筆舌にし難いよ。その上、お姫様だつこをしているのが女子だつていうんだから、恥ずかしさマックスさ。

幸運だったのは僕のクラスの列が講堂の出入口近くだったから、クラスの半分くらいの人にしかこの様子を見られていなかったということだ。もっと大勢の人に見られていたら、僕はビルから身投げするね。勿論、下に人がいないときを見計らつてやるよ。

てなことを僕は懇切丁寧に得々と説明してあげた。

そんなこと言ってる元気があつたら、自分で歩けつて思うかもしれないけど、これが不思議なことに、僕はどんなに体の調子が悪くても口だけは達者に動くようにできているんだ。たぶん、死ぬ直前まで益体もないことをべらべらべらべら言い続けるだろうね。煩く

てしょうがない。

「しかし、君はかわいいな」

なんか、いきなり、全然、筋とは違うこと言われた。

「は？」

「君はかわいいなと言ったんだ」

「いや、繰り返さないでいい」

そんなこと言われるのも恥ずかしいからね。女の子が「かーわーいーいー」って言われて「やーだー。恥ずかーしいー」って恥ずかしがるのとは全然違う。どちらかというと、「やーいやーいー！ チービー！ チービー！」って馬鹿にされるときの恥辱に似ている。チビで悪かったね！

「しかし、君がかわいいのは事実だ」

「事実ならば尚のこと嫌だよ」

僕は不機嫌に答える。

しかし、彼女は僕の機嫌や反応など意に介さず、ずっと僕の顔を覗き込んでいる。前を見て歩いてよ。僕ごと一緒にコケたら嫌だからね。

「お願いがある」

「奇遇だね。僕もあるよ」

「ん。じゃあ、どーぞ」

ここは、いやいや、君こそお先にどーぞという場面じゃなからうか。そーやって、いやいや君が、いえいえ君が、と質問者を押し付けあうのが日本人の特性だ。日本的遠慮謙虚な精神というものだね。「じゃあ、僕のお願いなんだけど」

でも、僕はその過程が面倒くさいので相手の言葉に甘える。

「お姫様だつこ止めてくれない？ 今更だけどおんぶで」

いくらなんでもお姫様だつこは恥ずかしいこと極まりないんだ。

おんぶならばまだマシだと思う。ただ、ここで降ろされると、僕は保健室まで這って行かないといけないから、それは勘弁だ。制服が埃まみれになっちゃうからね。というわけで、おんぶに変更して欲

しいわけさ。

「いや、それは駄目だ」

僕のお願いを彼女は即座に却下した。

「何でさ？」

「そーすると私のお願いができなくなる」

お姫様だつこされてないと叶えてあげられないお願いなんてのが僕にとつていいことであるとは思えない。

「それで私のお願いなんだが……」

「残念で恐縮なんだけど断らせてもらつよ」

「な、何故だ……。せめて内容だけでも聞いてくれ」

彼女はちよつと困つたような顔で言った。

そーいうふうに限られると、参っちゃうな！。僕の心の中である感情がみるみる大きくなっていく。

自分で言うのも、何だけど僕は性格が悪い。どんなふうが悪いかっていうと、例えば、こんな場面で、彼女が困っているのを見ると、更に困らせたくなくなっちゃうのだ。だから、僕は彼女のお願いを聞くわけにはいかないんだ。

「拒否します」

「なっ！」

そこでピヨコンとある言い回しが思いついた。僕は、いや、僕に限らず人にはふとピヨコンと思ひ浮かぶ言い回しがあるはずだ。そして、それを口に出さずにはいられないという衝動に襲われることもあるはずだ。大抵の人はそれを我慢する。でも、僕は我慢しない。僕は基本的にあまり我慢をしないタイプの人間なんだ。

だから、ちよろつと言つてみた。

「団子拒否します」

分かるよね？ これ。断固と団子をかけた駄洒落。あ。引かないで引かないで。こんなもんで引いてたら社会に出られないよ？ 社会（特に職場）は駄洒落の巣窟なんだから！ 社会では上司が言った駄洒落を華麗にスルーする技術が必要になるんだよ。これくらい

の駄洒落で一々引いてたら仕事にならないんだぞ？

「……………」

僕の素晴らしい駄洒落に彼女は声もないらしい。

「それをお願いなんだが」

「あれ？ スルー？」

「キスしてもいいか？」

「駄洒落スルーされたー。きつついわー」

僕は彼女の言葉を無視して、スルーされた駄洒落を悼む。一つの笑いどころか反応も得られなかったともなれば駄洒落も浮かばれないつてもんだよ。せめて、せめて「つまんない」の一言くらいあってもいいじゃないか。

あれ？ ちょっと待って。さっき、彼女、ちょっと変なこと言っ
てなかった？

「ごめん。僕、ちょっと耳の調子が悪いみたいなんだ。故障して雑音が混じってる感じがするね」

「む。そうか。じゃあ、耳元で」

「言わなくていい！」

「いや、もう一度言う。言わせてくれ」

「いやいや、いいから。言わなくていいから。口チャックしなさい！
口チャックッ！」

僕が言うと彼女はむっつりと不満そうな顔で黙り込んだ。黙り込んだことは結構だけれども、なるべく前を向いて歩いて欲しいな。転ばれたら大変だ。

「まったく、あんまり僕を混乱させるようなことを言わないで欲しいな。僕は今、貧血でお脳がちよっと困った状態にあるんだ。そんな状況であれこれ混乱させるようなことされちゃあお脳の状態が余計に悪いことになっちゃうじゃないか。いいかい？ こんだけベラベラ喋ってるからって大丈夫ってなことじゃないんだからね？ 僕の喋りは体調や気力と比例しないんだから。さあ、さっさと僕を保健室に運んで行ってくれると助かるな。そろそろもう本当にベッド

の中でぬくぬくしないと意識を保つことも困難に」

「ちゅ」

ん？ あれ？ ちょっと待って。ちょい待ち。さつき、視覚器官と感触器官から持ち込まれた情報で僕の脳内が混乱状態にある。脳の血管で血液が沸き立ってる。温度上昇中。だから、一旦、落ち着こう。

よし。ちょっと落ち着いた。じゃあ、さつき持ち込まれた情報を分析してみようか。何事も情報を正確に分析することが重要だからね。この情報の解析を誤り大失敗を犯してしまったということが世の中には色々と前例があるからね。例えば、第一次世界大戦の勃発なんかはその典型だと思うな。相手の起こした行動や発言を正しく理解や分析をできなかった結果、誰もが望んではいなかった開戦という最悪の結果へと帰結してしまっただけだ。詳しくは自分で調べて欲しいね。

僕はそんなふうな歴史が示す失敗を犯さないように慎重に正確にきっちりと情報を解析しようじゃあないか。

さて、まず、先ほどの出来事を冷静に振り返ってみようか。

まず、僕がべらべらと無駄なことをほざいていると、彼女がおもむろに顔を近づけてきて、桃色の柔らかい唇を僕の額に押し付けた。それだけ。それだけ。それだけだよ！ そう！ 額に人の唇がちょんつとくっ付いただけだよ。気にする必要はない。ない。全くない。そうなのだ。そうなんだよ。だから、なーんにも気にしないでいいんだよ。あれ？ 僕、さつきから同じこと繰り返し言ってる？ まだ落ち着けてないみたいだ。

でも、高校生なんていう青春鉞まさかり(真つ盛りの意)の身分にとってはでこちゅーなんて行為は一大事だ。

何言ってるんの所詮おでこでしょ？ おでこ。なーんて思う人は、明日、学校か職場に行つて隣の人に「おでこにちゅーしてもいいですか？」って聞くなり実行するなりしてみなさい。恥ずかしいから。照れるから。照れないあなたは外国人に違いないね。

とにかく、ただのクラスメイトがする行為としては少々度が過ぎているというのが一般常識だろうな。少なくとも、僕は今までクラスメイトからでこちゅーされたことなかったし、されてる人を見たこともなかったからね。

そんなふうには僕を混乱に陥らせた彼女は何事もなかったような顔をして、相変わらず僕をお姫様抱っこで保健室までの搬送を続ける。

「君さ」

「何だ？」

彼女はいつものクールフェイスで僕をちらっと見る。微かに、ほんの微かに、顔が赤い。

「やってくれたね」

彼女はもう少し顔を赤くしながらも無表情を崩さずてけてけ進み続ける。

全く、この僕を混乱させるとは困った娘だなあ。なんて考えつつ、僕は目を閉じた。お脳が更にてーへんなことになりそうだ。

保健室へよーこそ

「保健室へ、よーこそー。学年ナンバー1利用者君。今回でちょうど20回目の来訪よーん」

保健室に入ると、保険室の先生にハイだかローだかイマイチ分かりかねるテンションのお出迎えを受けた。

先生は、お歳は20代後半〜30代前半とお見受けする妙齢の女性であるが、実際のところの年齢は不明である。紳士な僕はそーいった不躰な質問を避けているのだ。

以前、

「そーいえば、先生って、何さ……」

と、まで言いかけた時、先生に物凄い目で睨まれ、

「なんさ、ざんでしたか?」

「難産? 難産じゃあなかったなー。ぼろっと産まれたって母さんは言ってた」

「へー」

てな、会話をして以来、年齢のことをタブーにしていることは内緒だ。ちなみに独身女貴族。

その先生に軽く挨拶をしながら、僕は尋ねる。

「どーもどーも。何か記念品は?」

日本国では節目節目には記念に何か貰えるものだ。以前、うちの学校が創立40周年を迎えた記念式典のときも紅白饅頭貰ったし。甘党な僕は紅白饅頭が大好きさ。紅の方を妹に食われたのにはがっかりしてしまっただなあ。

「ほい」

そう言っつて、先生が僕の口に放り込んだのは、カリカリ梅だったよ。しょぼいな。ぼりぼり。

「50回目にはもつと豪華なもんが宜しいです」

「じゃあ、ハグしてやんよ」

「それは結構」

僕は先生と軽い会話を交わしながら、ベッドまで輸送されていく。しかし、君、今日の乗り物は上物だねー。鈴木君はクビかい？」「いえいえ、彼が休みなので、代車です」

代車さんにベッドに降ろされ、僕はずるとベッドに敷かれた毛布に潜り込む。

「また貧血？」

「ええ、いつもどおりの」

「まあ、少し寝てけば治るだろ」

「そーでしょうね」

先生といつもと変わり映えのない会話をしてから、僕は目を閉じた。血よ。頭に昇れー。と、念じる為だ。こうやって念じることによって治癒能力が向上し、僕の血液は天を目指すスペースシャトルのように頭へと登っていく。かもしれない。だったらいいなあ。

「あなた、女の子なのに、男の子運ぶなんて力持ちねー」

ベッドの横で、先生が保健委員に話しかけた。

「いえ、彼、軽いですから」

「軽い言っつな」

「君、寝ていなさいよ」

「寝てますよ」

「黙って寝ていなさいよ」

こう言われちゃあ黙って寝るしかない。他ならぬ保健室の先生様の言葉ですからね。

僕は大人しく目を閉じて黙り込み、眠りの世界へと旅立つことにした。

「先生っ！」

けど、タイミングよくそれを邪魔された。僕の安眠への夢切符を返して！

僕の安眠駅行き夢切符を奪い去ったのは、誰だか知らない女子生

徒だった。見たことはあるような気がしなくもないけど、街中でそれ違っても声を掛け合うどころか振り返りもしないだろうくらいに顔に覚えがない。当然、名前も知らないから、腹立ち紛れに呪いをかけてやることもできないよ。でも、僕、学校では白魔術を専攻しているから呪いは専門外なんだよねえ。って僕はホ　ワーツにでも通っているのか？　それにホグ　ーツには白魔術とか黒魔術とかっていう科目はない。

さて、どーでもいい冗談はこれくらいにしておこう。こんなことばかり言ったり考えたりしているから僕は家族や友人から年がら年中ふざけた奴だなんていうような印象を与えてしまっているんだ。実際の僕は真面目な堅物野郎だっというのにね。勿論、これも冗談。まったく懲りない奴だねえ。

さてさて、かなり回り道というか寄り道というか行かなくてもいい道というか全く方向が違う道に入ってしまったって逆戻りしてきた感じ。意味分かる？　分からない？　まあ、いいや。本題に戻ろう。
「先生！　てーへんだあつ！　てーへんだあつ！　てーへんなんでさあつ！」

いきなり保健室に駆け込んできた女子生徒はちよつと江戸っ子風に叫んだ。

「あにー？」

先生。nを省略しては「何」が「兄」になつてしまいますよ？

「貧血でまた軟弱者が倒れたの？」

「すいませんねー。軟弱で。と軟弱者一号はベッドの中で呟く。

「昨日、飲み過ぎた近藤先生がゲロっっちゃって、それにつられて二日酔い仲間だった原先生と中村先生もゲロっっちゃって、その臭いが長い間、密閉された人口過密な体育館に充満した結果、具合が悪くなる人ゲロっっちゃう人倒れちゃう人続出の阿鼻叫喚状態になつてますっ！　介抱した人が吐き、それをまた介抱した人が吐くという負のゲロ連鎖が止まりませんっ！」

そりゃ地獄だ。てか、君ねえ。女の子がそう軽々しくゲロゲロ言

わないの。

「そこに私が行ってどーにかできるとは思わないんだけどなあ」

「でも、一応、先生。保健室の先生じゃないですか！ 生徒の健康管理を管轄してるじゃないですかあっ！」

「まあ、そーなんよねー。仕方ない、行くかー」

保健室の先生はどっころらせつとおばさん臭い掛け声と共に席を立ち、両手を高々と上げて背伸びした。ぼきぼきぼきぼきやくちやくちきゅ。と、彼女の肩から酷い音がする。先生、人を診る前に自分の肩を診た方が宜しいのでは？ なーんて言ったら何されるか分からないから黙つとく。雄弁は銀。沈黙は金つてね。じゃあ、僕はずうつと銀本位制度だねえ。意味不。

「じゃ、私は阿鼻叫喚の地獄に行くってくるから、あんたは大人しくここで寝てなさいね」

「Yes, sir.」

僕は軍隊式返事で答えておく。ついでにメリークリスマス（地獄で会おうぜ）とでも言っておこうかな。

「ああ、君はどーしよっかな。これから体育館に行っても不快な思いするだけだろうからねー。そうだな。教室にでも戻ってなさいね」
先生は保健委員の彼女にそう言つとさっさと保健室を出て行つてしまった。

残されたのは僕と彼女の2人だけ。一つの部屋に2人だけ。しかも、ベッドまで用意されてやがる。こんな状況じゃあ年がら年中恋に恋して恋焦がれ、毎日自家発電しちゃうような、もうそれこそジョニーの休む間もないような性欲ギトギトな思春期少年は、大変なことになってしまいますよ？ 勿論、ジョークだよ。てか、下ネタ自重汁。

「えーと」

僕が1人貧血中の脳内でアホなことを考えていると、彼女は眼鏡をきらりと輝かせながら咳くように仰つた。

「じゃあ、何しようか？」

私ハ君ノモノニナル

「何もしないうつてば」

僕と彼女の一問一答

僕と彼女は保健室に2人つきりとなつてしまった。その上、ベッドまでありやがる状況だ。

だからといって、僕が何かをする気はない。

厳密に言えば嘘。僕は呼吸はするし、心臓は動かすし、朝食は消化するしてこんなひねた糞生意気な小学生の言うようなことをわざわざ述べる必要もないね。必要ないなら書くなって話でもある。

とにかく、僕は何もせず安静にゆっくりと消毒液臭の染み付いたベッドの中でお休みすることが第一なのさ。

しかし、それを阻む存在がある。

「何か用かな？」

一旦は目を閉じて安眠モードに移行した僕は、少しして目を開いてベッド脇を見て尋ねた。

そりゃそうだよ。これから寝よつかないって目を閉じて夢の世界へレッツラゴーってな気分にいるのに、手を伸ばせば届くような距離に他人がいて、じいっとこれから眠りの国に向かう僕を見ているなんていう場面じゃあ全く落ち着かないし寝るに寝れないじゃあないか。こんな状況でも寝れるのは高木さんくらいしか僕は知らないよ。

「いや、特に用事があるわけではないが」

彼女は相変わらずの無表情で意味もなく眼鏡を上げたり下げたりしながら言った。

「うーん。じゃあ、申し訳ないんだけど、じいっと見ているのは止してくれないかなあ。ちよっと寝難いからさ」

僕は頭の中で言葉を選ぼうとしても結局さして上手い言い回しを思いつかないままに発言した。つまり、大体、思ったとおりのことを言ってみた。これでも、彼女に結構配慮したんだよ？ 本音中の本音は「寝るからどっか行ってる」だから、それと比べれば格段

に人道的に配慮された言葉だと僕は自己満足。

「君は眠たいのか？」

僕の意味が伝わったのか伝わっていないのかはさておき。彼女はそんなことを尋ねてきた。

「ん？ いや、眠たいわけじゃあないけど、安静にしていないといけないからねえ」

「安静にしていなければならぬっていうのは、寝なければいけないということと同義か？」

のんびりと答えると彼女は早口で若干捲くし立てるような口調で言い重なる。

「つまり、君は絶対に寝ていなければいけないのか？ 確実に睡眠を取らなければいけない状態にあるのか？」

「んー。必ずしもそういうわけではないかな。とりあえず、ゆつくりと落ち着いた心持で行動せずベッドの上に横たわっていればいいだけかな」

そんな状態にあれば人は妄想するか寝るかしかやることはないってもんだ。僕は今特段妄想すべき事柄もなかったから、少しばかり昼寝と洒落込もうと思っただけさ。

「では、じゃあ、私がここにいて、君と、君と、少しばかり、会話を持ったとしても問題はないんじゃないか？」

彼女は今までじいっと僕の顔にぶっ刺していた視線をぎこちなく明後日の方角へと飛ばしながら言った。

「まあ、会話するくらいは安静のうちに入るから僕の体調面においては何ら問題はないと僕は考えるけどね」

てか、僕らはどうしてこんなにも地雷原を歩くみたいな慎重な会話をしているんだろうか。別に「寝ないといけないの？」「いや、別に」でいいじゃん。

「そ、それじゃあ、ちょっとここにいて君と話をしてもいいだろうか？」

彼女は意味なく眼鏡を外したりかけたりを繰り返しながら言った。

ただし、表情はいつもどおりのクールフェイスなので、眼鏡を外したりかけたりを繰り返している理由とか真意は分からない。

僕はうんともすんとも、ぬんともむんとも言わなかったけれども、彼女は勝手に近くにあつた丸椅子を引き摺ってきて、僕のベッド脇に陣取つてしまった。椅子まで用意して座り込んでしまった彼女に今更「どっか行け」とも言い難く、それに、別に、僕だつて横になつている間やることがないから寝ようとしていただけであつて、特別眠いわけではないし、彼女と会話するのも嫌だなんてことは微塵もなかったし、何よりかにより何だかんだ言い合つのが面倒くさかつたので、彼女の行動に任せることにした。

「ところで、いくつか聞いてもいいだろうか？」

「うん？ 質問？」

彼女が僕に聞きたいことは一体何だろうか？ イージス艦の機密情報とかなあ？ 或いは原子力機関の重要な機械の設計とか？ 若しくは公安さんがマークしてる危ない人リストとか？ 生憎とどれも知らないなあ。まあ、知つてたら、それこそ、公安さんに嗅ぎ回られる側に回つてしまうことになるだろうけどね。

「えーつと、ご、ご、ご趣味は？」

「うーん。読書と昼寝かなー」

趣味つてほど大層な数の本を読んでいるわけでも、大層な時間寝ているわけじゃあないけどねー。つていうか、何で僕のご趣味なんか聞かれてるんだらうね？ なんかお見合いつぽいな。

「じゃ、じゃあ、好きなものは？」

「好きなものつて？」

そんなふう曖昧に言われても困っちゃう。例えば、好きな戦闘機だつたらスーパーマリンスピットファイアだし、好きな花だつたらチューリップだし。好きな恐竜はティノニクスだし。好きな哲学者はニーチェだし。

ちなみに、それぞれの好きな理由はひどくテキトーだ。僕は軍事マニアでも、植物愛好家でも、恐竜オタクでも、哲学者でもないの

で、それらについて熱く語られると困ってしまう程度のもんさ。僕の知識は広く浅くが基本なんだ。ニーチェにいたっては言葉が好きだけで、彼の思想さえあまり理解していない。そもそも、哲学自体はあまり好きじゃないんだ。毒にも薬にもならんことをだーらだら考えてくつちゃべつてるだけにしか思えないからね。あれ？　なんか、僕の生活スタイルと似てる？

「そ、それじゃあ、す、好きな食べ物とか」
「蕎麦かな」

後日、僕はこのテキストな返答に後悔することになるんだけど、それはまあ置いておく。

その後も、彼女は僕に色々質問をぶつけてきた。例えば、好きな教科（歴史）とか、嫌いな教科（体育）、特技（益体もないことを延々と喋れる）、最近読んだ本（近親交配や同種食（つまり共食い）がもたらす病気（クールー、スクレイピー、狂牛病、致死性の不眠症）なんかの研究に関する本）、昨日見たテレビ（日々、絶望と戦う教師のドラマ）、尊敬する人（物理学者のR・P・ファインマン博士）、最近凝っていること（小銭を立たせること）とかそんな聞く意味も理由もない感じの質問ばかりだ。

しかも、彼女が尋ねて、僕が一言二言答えるってだけの本当に純粹なる一問一答状態だ。まあまあ、話したのは部活のことだった。

「以前から少し疑問に思っていたんだが、君は何故、その料理部に入っているんだ？」

「あー。それはたまに聞かれるねー」

何せ、料理部に男子は僕一人だし、創部以来（といっても10年しかないけど）初めての男子部員だっという話だからねえ。疑問に思われても仕方がないかな。

「んー。料理部に入ってる理由かー。誘われたからかなー」

「誘われたのか？」

「うん。先輩にねー。入学式の日、一番最初に誘われたのが料理部だったんだよ」

我ながらテキトー極まりない理由だねえ。

ついでに言っておくと、そのとき、誘ってくれた先輩に、この半年後、再び誘（拐）われてしまうなんてことを僕は思いもしていなかったのだった。まあ、誘拐されるかもなんて思わないのが、当たり前だよな。

とまあ、これくらいの会話をした。あとはやっぱり一問一答。

「ねえ、この質問ってなんか意味あるのかな？」

「あ、あるっ！」

常々疑問に思っていたことを口に出すと、彼女はズいっと身を乗り出しながら半ば叫ぶように断言した。

そのとき、僕ははっと気付いた。どんなにどーでもいいうようなことでも相手のことは何でもかんでも全部聞きたい理由なんて、ちょっと考えれば分かるっつもんさ。知っているかい？ 人を呪うには、その人の個人情報が必要だってことを。ずばり、僕は、呪いに使うための個人情報を集められている最中なのだ！

なーんてことを想像したりしてみた。いやー、全く必要のない記述だね。てか、この話は七割が無駄なものでできています。蛇足をとつたら本当に蛇みたいにスリム化できるだろうね。でも、足のある蛇の方が面白いとは思わない？ それじゃトカゲじゃん。というツッコミは置いといて。

僕が意味も価値もないことをぼんやり妄想している間、彼女はなんだかとっても険しい顔で僕をじいっと睨んでいた。

「私のような美少女と一緒にいるっていうのに、小洒落た会話の一つもできないなんてつまらない男」

だなんて思っているか思っていないかは不明だ。たぶん、嘘。

彼女は暫しの間、険しい顔でうんうん唸りつつ、2、3、他愛もない質問をして、僕が答えてから、彼女はきつと僕を睨みつけた。子供なら恐怖で心臓発作でも起こしそうなくらいの眼光だ。一瞬、僕は「殺される」と本気で思った。恐ろしいことに、これは嘘じゃない。

「き、き、き……」

Killerだったらどーしようかと思っていると、
「君のことが！ あ、いや、き、君は、今、現在、す、好きな人とかいるのか？」

何故だろう。彼女のことを一瞬ヘタレに見えた。

「うーん。好きな人ねー」

こーいう質問に対し、家族とか友人とかの名を挙げる人は日本語
力がないに違いない。だって、普通、好きな人って聞かれればそり
ゃああなたLOVEしてる相手に決まってるじゃあーりませんか
ー。

「いないねー」

そんなわけで、僕はこう答えるしかなかった。今、僕の前にいる
君さ。とかジョークを飛ばしてみようかと思っただけど、何故だか、
ジョークだとバレたとき、大変なことになりそうな気がしたから止
めた。

「いないのか。本当にいないのか？ 本当の本当にいないのか？」

「いないよ」

何故か、この質問の答えにだけ異様に食いつく彼女。何故だろう
？ 何故かしら？ ととぼけてみる。

「そうか。いない、のか。そうか。そうか」

彼女はしきりとふむふむと頷いた。

それから再び、僕を視線だけで殺そうとしているかのように強く
睨んで、5分くらい黙り込んでからぼそりと言った。

「実は、その、私は、君のことが、好き、なんだが、どうだろうか
？」

どうだろうか？って聞かれても僕は困るだけだよ。

本気で君を愛してる

今の状況を改めまして簡潔速やかに説明すると、つまり、保健室に貧血でばったんきゆうーな僕と保健委員の彼女が2人つきりつてなわけさ。

そして、何故だか、僕は彼女に告白されてしまったところ。

告白とは言っても、

「私はジョンと浮気しました」

とか、

「私がジョンを殺しました」

っていうような告白じゃあない。ジョンって誰さ？ ジョン。ジョン。ジョン・スミス？ この名前で某ラノベしか思いつかない人はちよつと勉強しなさい。ちなみに僕にとってジョンといえばジョン欠地王だよ。

本筋に戻るといっておきながら早速横道にそれてしまったよ。参ったね。

とにかく、僕は今、告白されてしまった。何の告白か。当然、愛の告白に相違ない。僕は教会の司祭ではないからね。

告白されたならば返事をするのが一般的だ。

それに彼女は僕の返事を期待してじいっと僕を見つめている。顔に穴が開きそうだよ。僕は彼女の真剣なる質問にどのように答えたものかと大真面目に考え込んでいるふりをしながら、その実、これっぽっちも真面目になんか考えてなかった。そのとき、僕が考えていたことといえば、なんだかややこしいことになってしまったなあ。という感慨とちよつと思いついてしまった台詞を今、言ったらどうなるんだろつか？ ってことだった。その台詞ってのは、

「悔い改めなさい。されば、救われん。アーメン」

てな愛の告白を教会での告白にかけた台詞なんだけど、これは言わない方がいい。言ったら確実に殺される。

しかし、もう遅い。言つた後だ。
首を絞められた。

「まあ、待て。話せば分かる」

と、犬養元首相が最期に語つた名台詞を言つてから（相手に待つて欲しいときは必ずこと名台詞を言わなければいけない。しかし、高確率で待つてもらえない羽目にならないといけない）、付け足した。

「とりあえず、話す前に、放して」

「誰が駄洒落を言えと言つた」

まあ、誰も言つてはいないね。言われなくても言うけど。駄洒落ほど閉じられた口を開かせる効果を持つものはないというのが僕の持論さ。あれ？ 僕だけ？

「とにもかくにも首を絞めるのは止めて欲しいかな。洒落にならないし笑えない」

「大丈夫」

僕のほぼ100パーセント真面目な要請に、彼女は真顔で答えた。

「洒落じゃないから」

それは確かに笑えないね。

「真面目な行為だとしても遠慮したいな。息苦しいし」

ちよつと力入れれば簡単に折れてしまいそうなほど貧弱な僕の首は、彼女の細長い綺麗な10本の指で押さえつけられており、その圧迫によつて気道は狭まり空気は自由に頭と肺の間を往復できなくなっている。つまり、窒息しそう。

「大丈夫」

彼女は再び真顔で言つた。

「殺しはしない」

表情、声、目、それらから見て判断するに彼女はジョークを言っているつもりではなさそうだ。ここは、ああ、殺されないで済むんだ良かった。と安堵すべきなのかな？

違う。断じて違う。そのことを僕は確信している。

「ちょっと君、何言ってるの？」

と、呆れ顔で言ってもいい場面だ。しかし、僕はそんなことを口にはしなかった。口にして面倒くさい結末を呼び込むようなことになつてしまつては嫌だからね。

さて、では、僕は何と言つべきなのか？

正義と道徳と倫理の観念から僕は彼女に注意した。

「女の子が殺すとかいう言葉を使うんじゃないやありません」

彼女は暫し沈黙した後、真面目な顔で言った。

「ごめん」

そう言う前に、僕の首を握り締めている手を放して欲しいね。

ちなみに、僕が言った台詞はジョークだよ。勿論。

僕の必死の説得と哀願と要請によつて、結局、彼女は僕の首を解放し、呼吸の自由を保障してくれた。一応、ありがとう。と礼は言つたけれども、これつて僕が感謝すべきことかな？

「答えを聞こうか」

「何の？」

と惚けたところ、彼女が首を絞めようと手を伸ばしてきたので、僕は慌てて先の質問を打ち消す羽目になつてしまった。

「うーん。そーだねー」

などと言いながら時間を稼ぐ。そーいえば、時間を稼ぐつていう言い方は何なんだろうね？ などと国語的な疑問をつらつら書いていたらまたヘンテコリンな横道に入つてしまうから疑問は放置。

「そもそも、なんだつて、君は僕のことなんかが好きだなんていう酔狂なことを言い出すんだい？」

人が人を好きになることに理由はないらしい。その理屈は何であれ、それには僕も同意できる。良い実例が僕の身近にあるからね。

その良い実例つてのは、僕の姉さんとその恋人の例だ。

さて、実は僕には姉さんがいる。僕は姉さんと妹に挟まれている

一姫二太郎三姫状態なんだ。お陰で姉キャラにも妹キャラにも萌えることができない体質になってしまったよ。無念。

さて、その姉さんはひきこもりだ。引きこもり姉さんだ。

元々、僕の姉さんは非常に頭の宜しい人だった。小中高とテストの成績は学年10位より下にいったことはなく、家でも学校でも生真面目に勉強に励んでらっしゃるとてもよくできた学生の鑑たる御仁でござった。そんな姉さんを生まれてより十数年ずうっと見続けてきた僕が何故にこれほどぐうたらになってしまったのかは永遠の謎だ。あれ？ 僕が永遠にぐうたらなのは決定事項？

しかし、姉さんはさる名門大学に推薦で早々に合格を決めてしまった後よりすっかりぐうたらになってしまわれた。

今まで十数年の人生を勉強一筋で生きていらっしゃったのが、突然、自由の身になり、時間を持って余してしまわれた姉さんはしょうがないので家で日がなひたすらごろごろしていらっしゃるうち、すっかり引きこもり癖がついてしまったらしい。今じゃあるくに大学に行かず家で一日中パジャマスタイルで惰眠を貪ったり本や漫画を読んだりネットサーフィンしたりネット掲示板荒らしたりして過ごしていらっしゃる。

こんなダメ姉だけでも、なんとびっくり驚くことに姉さんには恋人がいる。

その恋人は姉さんと同じ大学の方で、たまに我が家で来られるけれども、とても真面目そうで爽やかでカッコイイ御仁だ。その上、彼の父上は高級官僚（何チャラ参事官だったか審議官だったかをされているらしい）と、将来有望極まりない。まさに玉の輿を具現化したような人だよ。

そんな人が何故だか僕の姉さんに恋したらしい。姉さんの方は嫌いではないけど、まあ、それほど執着していらっしゃるわけではないらしく、彼氏がやってきてもパジャマで応対したり、デートに行こうと誘われても「面倒くさい」と言っただけで布団から出てこなかったりしている。

まったくもつて、何故、あの彼氏さんが姉さんのことが好きなのか理解しかねるものだね。

まあ、そんなふうには人の好き好みに理由などあつてないようなものなのさ。

それを理解していながら、何故、僕がそれを彼女に問うかといえ、それは純粹に嫌がらせ以外の何でもないと言つて全く過言ではないね。

彼女が僕が好きな理由を答えれば、その答えに対して重箱の隅を突つくかのようにイチヤモンを付けまくるつもりなのさ。イチヤモンってポ モン？ デ モン？

僕の質問に対し、彼女は即答した。

「それは分からない」

わかんないんだ。

その答えで重箱の隅を突つくためにせつせと磨き上げていた僕の箸はぼつきりと折れてしまった。

「今まで何度も君のことが好きな理由を私なりに考えたことがある。しかし、どうしても、私が君の事を愛している理由を適切に言葉という形にすることができないんだ。いくら考えても、何度考えても言葉にならないんだ」

彼女は真剣そのものの真顔で僕をまつすぐ見詰めながら語った。

「しかし、だからといって、君のことが好きだということは嘘じゃない。本気で君を愛しているんだ。目は自然と君を追つてしまふし、耳は君の声ばかり聞いてしまふし、君のことを考えると動悸が激しくなり、体温が上昇し……」

云々と彼女は僕が好きな理由ではなく、彼女が僕のことを好きである根拠を立て並べ始めた。「これこれが理由であるから好きである」ってという演繹的思考ではなく、「これこれの現象があるので好きである」ってな帰納的思考によつていているわけだね。あ、演繹と帰納はテキストに使つてただけだから、これこれが違つとか言われて

も僕困ってしまうから、言わなくて良いですよ。

しかし、そんな糞真面目な瞳で僕の目を見つめないで欲しいな。君の真面目な顔からは殺気が放たれる仕様になっているみたいだからね。さっき、絞殺されかけた身としては尚のこと殺気なんてものは遠慮したいものだよ。

あと、そんなふうには理由もなく、ただ純粹に好きだ愛してると真っ直ぐ率直に言われると中々恥ずかしいものがあるね。

おや、こんなところにストーカーが

僕が彼女の真剣な瞳に気圧されている間にも彼女はその言葉を遮るものが何もないことをいいことに、訥々と止むことなく僕に対する求愛の気持ちとそれに伴う数々の行動を、聞きもしないのに延々と語り続けた。

まあ、求愛の言葉つてのは、如何に彼女が僕のことを愛しているかというようなことを延々と言い続けてくれたわけで、それはまあ、聞き流して構わない為、割愛する。ここにだらだらと数千数万もそんなことを書き並べる意味などないし、そんなものは誰も聞きたくはないだろうからね。俺の彼女はこんなに俺のことを愛してくれてんだぜ！って自慢する習性は僕にはない。

一方的にこつぱずかしい台詞を聞かせ続けられる身としては恥ずかしさと照れを司る脳の機関がショートしそうだよ。どこが管轄していらっしやるか知らないけどさ。

「待つて待つて。ストップストップ」

僕はくらくらする頭を抑えながら言った。貧血はだいぶ治まった気がしてきたけれども、その代わりに、今度は恥ずかしさで血が集まりすぎて、頭の具合が宜しくない感じになってきた。

「君が、そのー、まあ、僕のこと、あー、す、好きってことは、まあ、分かったよ」

誰かが自分のことが好きってことを改めて自分から口に出して言うつてのは妙な気恥ずかしさがあるねえ。

「そ、そうか。分かってくれたか」

彼女は無表情に目をきらきらさせ、僕を見つめながらその身を乗り出す。

そんな彼女に僕は尋ねなければならないことがある。

先ほどまで彼女が延々と語り続けてきた話の中に無視できない事柄がいくつ含まれていた。彼女がその気持ちに突き動かされて取

った行動のいくつかの内容だ。少なくとも、僕にとっては無視し難い事柄だね。何せ、彼女は僕と殆ど会話もしたことがないくせに（少なくとも、僕の記憶に残る範囲ではさしたる会話はなかったと思う）僕の自宅の住所とか、家族構成（ただし、姉さんの存在は知らなかった。僕の姉さんは引きこもりだからね）、郵便番号、自宅の電話番号、うちの車の車種とナンバー、家の中でどこが僕の部屋なのかとか、そんなことを何故だか知っていることが会話から判明したのだ。何で、彼女はそんなこと知っているのか？ てか、車のナンバーなんか僕だって覚えていないこと、何故に暗記しているのか？ 彼女ってば物知りな上に記憶力いいな。と惚とほけて済ませるレベルを逸脱しているね。

「しかし、何で君そんなことを知ってるのさ？」
「何でって……」

当然の如く、僕がその疑問点について尋ねると、彼女はちよつと視線を外し、気恥ずかしそうに答えた。

「それは、あれだ。す、好きな人のことは何でも知りたいから……」
そんなことを言いながらぽつと頬を染める彼女。つられて僕も恥ずかしい気分に……なるわけがない。んな気分になりやしない。顔は赤くなるどころか青くなる。いや、青いのは貧血気味だからだけだ。

しかし、好きな人のことを何でも知りたいと思つてたら、何でも知れるほど世の中は摩訶不思議ではない。何かしらの手段を講じなければ人の個人情報を知ることができないのさ。愛があれば何でもできるというけれど、愛しいと想っているだけじゃあ何もできないし、知ることもできないのさ。愛を持って行動せねばね。

その行動っていうのは、例えば、何か超能力的か魔法的なパワーを発揮して、人の私生活を透視するとか（千里眼とかだったらできそうだね）、興信所にいくらかのお金を支払って身辺調査してもらうか、もっとお安く手っ取り早く済ませるなら、人に任せず自らを探偵に任じて調査活動に従事するかと。

さて、彼女はどのように僕の個人情報を手に入れたのか。

相手を油断させるようにやんわりのんびりと尋問すると、結構あっさりと彼女は白状した。あんまりにもあっさり和白状しちゃうんで、説得のし甲斐がない。

「下校中の君の後をつけて」

お安く手っ取り早くの方だった。まあ、一般的女子高生の身分ならばそれを選択するだろうね。その前に、一般的女子高生は普通そんなこととしてまで個人情報を手に入れようとは思わないかな。もしもそんなことが世間一般的に行われているのだとしたら、この国にプライバシーの観念はないのかと残念に思わざるを得ないね。学校教育においてもっとプライバシーの大事さを教えないといけないよ。

「それで、僕の身辺調査を？」

「っ、っい……」

つい、で済む問題かなあ。僕が「まあ、いいよ」って言えば済む程度ではあるか。僕はお巡りさんが嫌いではないけれども、それほど積極的に関わりたいとも思っていないから、「おや、こんなところにストーカーが。お巡りさん、ちょっとここにストーカーがいるんでちよっぴいて下さいませんか？」なんて言ったりせず、彼女のストーカー行為は僕の胸の中に潜めておいてあげよう。僕ってば優しいなあ。

そーいえば、ストーカーといえば、とはいっても、僕はストーカーをしたこともされたこともないから、ストーカーが何たるかってことは伝聞でしか知り得ないことなただけでも。あ、されてたのか。気付かないうちに。まあ、とにかく、僕はそれほどストーカーについての知識に精通しているわけじゃないんだ。

しかし、何で精通って二通りの意味があるのかねえ。よりにもよってあんまり日常会話では口にし難い意味を併せ持っているんだろうね。最初にこの言葉を生み出した人は嫌がらせでもしたかったのかな。「精通」でネット検索とかがしたら「男子が初めてするムニヤムニヤ」なことと「云々に精通したエンジニア」とか「ネットに精

通した云々」ってなホムペが混在するんだよ。

さて、そんな少年が初めて経験するアレなことなんかをだらだら述べている場合じゃあない。しかし、あれは何の知識もなく、偶然つつかたまたまなっちまうとすげー吃驚するよね。あ、下ネタやめる？ はい、止めます。と言って止めるのも、せいぜい数十行なもんだから、僕の言葉の信用性はどんどん落ちていくような気がしちやったりしなかったり。

さてさて、何か下らない話題に何字も無駄にした感じがあるけど、つまりは、何が言いたかったかというところ、僕はあんまりストーリーカーについて知らないってことさ。それでも、僕が持っているなけなしのストーリーカー情報によれば、そーいった人々は無闇に好きな人の身辺調査をするだけでなく、勝手にその人の部屋の中に進入してみたり、出されたゴミを漁ってみたり、ものを無断に拝借したりするらしいってなことをするらしい。

ともなれば、ほら、ここにストーリーカーがいるのだからそーいった行為をしているかいないかを確認してみる必要性が生じるとは思うのは自然なことじゃあないかな？

てな、ことを尋ねてみたところ、

「……………」

彼女は無言で視線を外し、曇っても汚れてもいない眼鏡を意味なく拭きはじめた。

「まさか、そんな本当にストーリーカー犯罪防止法だか何だか法に真正面から引っ掛かりにいつてしまうような行為をしているわけがないよねえ？」

改めて確認の意味を込めて尋ねても彼女は不気味な思わせぶりな無言を続ける。

いや、まあ、あれだよな。好きな人の後ついてって相手の家突き止めてしまっつてのは、まあ、青春の甘酸っぱい思い出の一つとして処理しても構わないとは思っけどさ。

それ以上のさっき述べたような色々な行為をやってしまっつての

「はどつなんだろつ？ どつなんだろつねえ？ どつまじつまねえよ。」

「おい」

「すまん」

おや、こんなところにストーカーが（後書き）

ちよつと彼女にヤバイ設定を付け過ぎているような気がします。大丈夫。愛ゆえにですから。愛ゆえに。愛とか何とか言ったら大抵のことは許されると思いませんか？

ストーリーカー対策のコベルニクスの転回

前話においてかなり本格的なストーリーカーだったことが判明した彼女だったけれども、具体的にどのような行為に及んでいたのか更に尋問したところ、彼女はなんとなく気まずそうな顔（基本、やっぱり無表情なので表情が読みにくいんだ）で供述を始めた。

「ものはそんなに持って行ったりはしていない……」

「そんなにして何だ。そんなにして。」

「いくつかは持って行っているんだろうか？」

「ゴミも漁ってはいない」

「ては？」

「……ちよつと、観察はした……」

「ゴミなんか観察してどーするのさ？」

僕が小首傾げながら尋ねると、彼女は眼鏡をくいつと上げながら懇切丁寧に答えてくれた。

「例えば、残飯とか野菜の皮とか、パッケージとか包装紙で、どーいうものを食べたり飲んだりしているのか調べたり、レシートを見て何を買ったのか調べたり……」

「もういい」

僕が言っていると、彼女は黙った。

「いやあ、僕は、あれだ。あのー、何だかんだ言って、結構、それほど、まあ、冗談で済む程度のストーリーカーさんだと思ってたんだけど、いや、もう、本当に冗談じゃ済まないレベルに突入しているよ。うな気がするよ。」

「他には？ まさか家の中に入ってきたりなんかはしてないよね？」

「家の中に不法侵入するようなことはしてない……まだ」

「まだって何だ。まだって。」

「いつかは入るつもりなんだろうか。」

「……に」
に？

「庭までだ……」

彼女は我が家の庭に入ったらしい。あんな狭い上に雑草しかない庭に入って何が楽しいんだろうね。

そして、までって何？ それ以上があるって前提だよな？ もしかして、放っておいたら家の中まで入ってた？

まあ、そーいうちょっと恐い疑問は置いておいて、庭に入って何をしてたのかを問い詰めると、彼女はいくらか渋った上で、白状した。

「君の入浴中に……」

覗きか。しかし、うら若い乙女が野郎の風呂を覗くなんてのはどんなもんかねえ。そんなことをしちゃうのが恋する乙女だっているのかな？ それが世間一般の恋する乙女の常識なのだとすれば、僕が今まで恋愛に関して持っていた知識のほぼ全てが幻想だったってことになりそうだ。

ん。ちよつと待って。よくよく考えてみると、おかしな点がある。いや、まあ、女子が野郎の風呂を覗くこと自体がおかしなことだけれども、その覗きを除き（勿論、計画的な駄洒落さ。別に無理して笑わないでもいいよ）、理解できないことが一つある。

「僕の家風呂、窓ないよ？」

「ああ、知ってる」

何で知ってるのかつてのは聞かない。そりゃあれだけ、僕の家に関する知識を持っていれば風呂に窓があるかないかくらいは分かるんだろうね。

「じゃあ、僕の入浴中に何してたのさ？」

僕が質問すると、彼女は言い辛そうに視線を明後日の方角に飛ばす。これは、かなり、言い辛い事柄らしい。君、一体、何やってたんだよ。本当に何をされていたのかいささか恐くなってきたので、更に問い詰めると、彼女は犯行を吐露した。

「……浴室の換気扇から出てくる水蒸気を……」

浴びたり飲んだりしていたと。その行動に何の意味があるの？

「君の肌に触れていたシャワーとか湯船のお湯や空気中に漂って君を包んでいた水蒸気かと思うと体が勝手に……」

排気口から出てくる水蒸気を一身に浴びようと或いは吸い込み自らの中に取り込もうと体が動いていたと。うーん。何というかかんとというか、君、それは変態の所業だよ。止めた方がいい。絶対に止めた方がいい。世間に君がそんな行動をしている映像が流出なんかしたら確実に危ない人、アレな人との認識を持たれてしまうよ？

世が世ならば、例えば、ナチスみたいな知的レベルの低い上に心の矮小な世の中であつたとしたら、強制収容所に隔離されかねないよ。ナチス時代にはユダヤ人の他に精神障害者や身体障害者、同性愛者なんかも強制収容所に入れられたらしいからね。彼らの低レベルに凝り固まつた思考回路によればそーいう人々は隔離すべき腐つたみかんつていう認識だつたんだろうねえ。

ま、なんか、よく分かんないけどね。僕、ナチス研究家じゃないし。そーいうのはギュンター・グラスとかに書いてもらった方がいいよ。ギュンター・グラスを知らない人はネットで調べよう！ 芥川賞とか直木賞とかが屑に見えるくらい凄い賞取ってる人だから、知って損はないはずだよ。てか、その人相手に、とかつて凄い失礼だよな。でも、許してくれそうなのがする。大物つてのは寛容な人のことを言うのさ。

さて、また話が明後日の方向に飛んだんで、ちよつと戻すよー。

僕はそーいう行動は色々な意味と色々な人にとって危険なので絶対に止めるよう彼女にしつかりと言い聞かせた。

「君がそう望むならばその通りにしよう」

彼女は物分かりよく頷いた。

「ただし、条件がある」

前言撤回。物分かりよかつたどうかは保留。

「私の前述の行動は、そもそも、私が、君のことを愛しすぎてしま

う故に、発作的、衝動的に取ってしまうものだ」

「う、うーん」

一瞬、うんと頷きそうになって、なんか、僕がここで肯定するのは意味不明だな。と思い直して、うとんの間にーを入れてみたけど、どうだろう？ どうだろう言うのはどうだろう？ どうだろう言うのはどうだろうと言うのはどうだろう？ 以下略。

いやはや、まったく、小説らしくない文章だね。これほんとに小説サイトに乗せていいの？

「それで？」

「だから、そのー、その、私の愛をもつと別の方向へー、発散？ することができれば、あー、そーいう行動を取らなくなると、思う」

君、きちんと喋ること決めてから喋りなさいよ。愛の告白なんて人生においては結構重要なイベントなんだからきちんと計画的にやらんと成功するもんも成功しないよ？ 告白される方が言うのも何だけどさ。

「つまり？」

「君が私と交際してくれたら何も問題は無いに違いない」

なるほど、ストーリーカーは、付き合ってしまうえば、ただちよつと愛が強過ぎる恋人になると。これはストーリーカー対策の新たな解決手段だね。まさにコペルニクスの転回。勿論、皮肉だよ。

息子よ、立ち上がれ！

某ヒーローものの歌じゃないよ？

こんなごく一部の人にしか分からないサブタイトルネタは置いておくとして、てか、このネタ分かる人いるのかな？ それでも使ってしまう自分がちょっと好きだったりする。そして、また下ネタかどこがどう下ネタに繋がるかっていうのは、まあ、後々分かることだけれども、ヒントは「息子」っかなー。え？ 丸分かり？

ちなみに、このサブタイトル案は前々々回からずっとこれだ。でも、更新する段になる度に、息子の件くだりまでいけないせいで、別のサブタイトルに取って代わられているのだ。てか、ストーカーネタ引っ張りすぎでしょう。そんなの書いて喜ぶ人いるの？ ストーカー好きな人なんかいないでしょうよ。

さてさて、本筋いくよ本筋ー。いつまでも横道それててもしょうがないからねー。

「だから、私と付き合おう。男女交際しよう。すぐしよう。今からしよう」

彼女は身を乗り出し、眼鏡をぎらぎらさせながら迫りつつ僕に言った。

いや、ちょっと待って、だからって何さ？ だからって。ストーカー対策の為に君と付き合ストーカーおうってこと？ それは何だが、もうコペルニクスの転回を通り越して本末転倒と言わざるを得ないような気がするよ。

それに、彼女の顔はどんどんこちらに近づいてきている。かなり真面目腐った表情をしているけども、真っ赤で硬直している。薄い唇は開いたり閉じたり、まるで、こーいうとき、どーいう口の形をしていれいいのか分からず戸惑うように。でも、迫り続ける。どうすればいいのか分からないのに、とりあえず当たっていけっ

う感じかな。

「ちよつと待って、待って、いや、待ってれば。いや、ちよ、さつきから、待ってって言うてるんだけど、だから、待ってれば！ねえ！」

いくら言っても迫り続ける彼女の顔を手で押しのけながら、珍しく僕は声を荒げてしまった。だって、いくら言っても聞かないんだもの。

「いや、待てない」

対して、彼女はきっぱりと言い放つ。

「もう、待てない」

「君がいつ待ったっていうのさ？ 君の今までの行動を聞くに、ほとんど、本能だけで行動しているようが気がするけど？」

「いや、待った」

僕が彼女の言葉に疑問を呈すると、彼女はきっぱりと否定した。

ほう、そこまではっきりと言うならば、聞こうじゃないかね。君の言い分とやらをさ。

「君を襲うのだけは自重した」

「……ねえ？ 君の頭の中はちよつと世の中の基準とズレちゃあいないかね？」

「分からない。自分の頭の中を他の人の頭の中と比較検証したことがないから」

別に、僕は君の脳味噌の色とか形とか重さ、臭い、味なんかが他の人と違うんじゃないか？ って言ったわけじゃないよ。それに、そもそも、僕は普通の脳味噌の色とか形とか重さ、臭い、味なんか知らない。テレビでCGな脳味噌を見たことがあるだけさ。主に医療番組とかレスキューナンチャラとかで。そーいや、あのレスキューものつてのは、つまりは、ある人が事件や事故に遭ってレスキューされるってな話しなわけなんだけれども、あれって、何故か舞台が外国な場合が多いよねえ。何でだろう？ 慎重で臆病な日本人はレスキューられることが少なくって、注意力散漫で無鉄砲な外国人（主に

アメリカ人)はレスキューられる機会が多いからかな？

まあ、脳味噌もレスキューも全く本筋と関係ないわけなんだけども。てか、レスキューるって何語？

「とにかく、私はもう待てない。我慢の限界だ」

彼女は真つ赤な色の怒ったような顔で言う。

「いや、いきなり、そんなこと言われてもねえ」

彼女が我慢していたことを僕は知らないのだ。僕は今までずうつと何事もないような顔してのんびんたらりと生きてきて、ストッキングじゃないストッキングされていることにも全く気付いていなかったのだから。

「もう待てない。私は十二分に待った。我慢した。私の理性はもう焼き切れる寸前だ。君の白い肌を見る度に触りたくなるのだ。君の細かい体を見る度に抱き締めたくなるのだ。君の唇を見る度にむしやぶりつきたくなるのだ」

君、それは高校生女子の衝動として正しいものなのか？ どっちかっていうと、青春男子の性的衝動じゃあないのかな？ これに、柔らかいおっぱいを揉みたいだの、桃尻を舐めたいだの、太もみに頬擦りしたいだのが加われば、完全に青春男子の性なる衝動だよ。ちよつとやりすぎ？ いや、まだ大丈夫。大丈夫なはずだ。

しかし、華の女子高生がそんな欲望に忠実でいいのか？ しかも、その欲望の種類を分類しようとしたら、食欲でも睡眠欲でも名誉欲でも権力欲でも顕示欲でもなく、性欲だっというんだから、女の子としては大変好ましくないことではなかるうか。これが野郎なら「あー。まあ、若いからねー」で済みそうなものだけど、若々しいガールがそんな性欲ギトギトじゃあいけないと思うんだけど、これって性差別？ 僕の思考回路保守的過ぎるかなあ？

「あ、僕が変なこと考えている間に、君、何で、ベッドの上に乗ってるのさ？」

僕が尋ねると、彼女はちよつと変な顔をして聞き返してきた。

「何でって……何で？」

「いや、ベッドの上に乗っているのは何故つてことが聞きたいんだよ。それを何でつて聞き返されるのは甚だ遺憾だなあ」

そんなことを言いながら、僕はちらりと彼女を見やる。自然と視線がそつちにいつてしまうというのは、やはり、僕にも付いてるもん付いてるつてことだね。何が付いてるの？なんていう馬鹿馬鹿しい質問は受け付けないよ。いや、馬鹿馬鹿しいのは僕だ。

とはいえ、ここはそんな僕の馬鹿馬鹿しい言い訳を書き連ねる必要はない。それよりは僕の視界に映るものを描写すべきだ。大きなお友達はそれを期待しているかどうかは知らないけど、嫌いではないはずだからね。あ、これは純愛小説ですよ？

さてさて、その描写すべき彼女はというと、いつの間にも彼女がベッドの上上がり込んでいた。まあ、誰もいないベッドの上には転がるのはご自由にいいと思うんだけど、生憎とベッドの上には僕という先客がいた。

ご存知のとおり、保健室にあるベッドはダブルとかキングとかのサイズではない。そんなサイズである必要性がないからね。基本、一人用にできていて、その一人が寝返り打つても転がり落ちない程度の面積しか有していない。当然、僕は一人用ベッドであるからして、他の人に配慮などせず堂々と臆することなく中央に寝そべっているわけなんだけれども、そこへもう一人が上がり込もうと思つたら、どこに居着くかといえば、端っこじゃあバランスが悪い上に狭苦しくて落ち着かない。では、何処か？

「というわけで、君の上に失礼しているのだが、重かつたら申し訳ない」

彼女はそんなふうになんか少し申し訳なさそうに言うのだ。

いや、いいんだよ？別に、重くはないからね。女子の体重一人支えることができるくらいは僕も弱くできていない。でもね、彼女の居座る位置が問題だ。問題は重さじゃない。さあ、これくらい言えばもう理解できるだろうね。さっさと言つてしまおう。僕の股間の上に彼女の股間と。これはヤバイ。

「君君、ちよつと位置を変えてくれないかな？」

「それはできない」

僕はできるだけ平成を装って昭和のつもりで、じゃない、平静を装って言うと、彼女はすぐにきつぱと拒絶しなすった。

「腹の上に座っては内臓器官に悪い影響を与えそうだ。脚の上も宜しくない。君の脚は細いから折れてしまいそうだ」

僕の体のダメージを考えてくれる彼女は優しいね。皮肉だよって言葉付け足す必要ある？

「いや、もう降りてくれない？」

「それは嫌だ」

僕の要請を彼女は再び拒絶した。

「これから、その、私の愛を受け止めて欲しい……」

それから顔を赤く染めてそんなことを言いながら、腰をもぞもぞ動かすのだから、これはわざとやっているに違いない。そんなことをしてはマイサン（邦訳：我が息子）が立ち上がってしまうよ。

「君、わざと？」

「勿論だ。どこに何があつてどうすればどうなるかくらいこの歳にもなれば知っている」

そりゃそうだよな。たまーにエロマンガとかラブコメの女の子がこーい場面でアレが大きくなって驚くとかあるけど、そりゃ、あなた、そんなところにそんなことすれば大きくもなりますわって話だよな。ってエロネタ多過ぎ？ 我慢して。これからもっと出るかもしれないんだから。

彼女は大真面目な顔（但し、赤くなりながら）で、僕の胸の上に手を置き、腰の上に乗せた腰をくいくいと動かす。そうしますと、当然、僕の息子と彼女のまあなんといいいますかあの部分が触れ合うわけです。いや、間には色々あるけどな。僕のパンツ、スラックス、タオルケット、掛け布団、彼女のパンツ。五段階の防壁によって互いの生殖器の接触は避けられているけれども、僕の上に彼女があるという意識と確かに伝わってくる衝撃といいいますか振動とかそ

「—というのが僕の息子を刺激して立ち上がれと号令しているんだ。ダメだダメだ。立ち上がってはいかん。戦士が立ち上がるのとは訳が違うのだから。」

息子よ、立ち上がれ！（後書き）

ここから先、こーいうネタが続く可能性があります。すいません。

強制脱皮

僕はただひたすら股間に与えられる刺激に耐えていた。いや、僕だつて、そーいう行為が嫌なわけじゃあないよ？ 男の子だしね。てか、大概の人間はそーいう行為が好きだからね。でもねえ、こんなところで、こんな場面で、まだ正式に男女交際することが取り決められてもない相手とつてのはどうかと思うんだよ。僕は。うん。「じゃあ、正式に男女交際してくれ」

「そうは言われてもねー」

僕はむちゃむちゃもごもごと結論を先送りする。まるで労働組合の賃上げ要求を先延ばししようとする経営者のように、或いは有権者からの要求をはぐらかす政治家のように？ まあ、どっちも似たようなものだね。まあ、ともかく、僕もそーいった経営者とか政治家みたいな何だかんだ難癖をつけて先延ばしする気満々だった。

何故つて聞かれると困る。何故なら、僕には彼女の要求を拒否する理由などないはずなのだからね。

僕は今現在交際している相手なんかはいないし、特に好きな異性もないし、勿論、好きな同性もないし、男女交際をできない理由なんかにも特には思い至らない。宗教上の理由なんてのは神の存在さえも疑っている僕には存在しないし、うちの父さんも母さんも「男女交際なんてけしからん！」なんてお堅いことを言う人ではなさそうだし、僕は聖職者か何かよく分からない胡散臭い職業を目指しているか何か頭の中が変なことになつて、男女交際などという汚らわしきことは一生しないなんて自分ルールを定めているわけでもないからね。僕が男女交際をしない理由は一つもないと言つても過言ではない。

そして、僕が彼女を拒絶する理由もないのだ。彼女は美人だし、頭いいし、性格だつて、多少表情が薄くて感情が分かり難いつていふ点があるけれども、僕にとってはさしてマイナス要素ではないし、

何より、彼女は僕を好きだと言ってくれるのだからね。ちょっとつていうかだいぶ愛が強過ぎる気がするけれども、まあ、僕にとつては許容範囲かな。さすがに風呂の水蒸気を浴びたり吸ったりつて行為はちと引くけど。

それでも、僕が彼女からの男女交際要請を拒絶とまではいかなくても返答を先延ばしにしようとする理由は、ただ一つさ。

彼女の方がだいぶ背が高いのがねー。

嘘です。

そんなガキ臭い理由で彼女からの告白を無碍にするほど、僕は阿呆じゃないつもり。こんな嘘を吐く方が阿呆かな？

と、ここで、さっきの阿呆な嘘を実際に口に出して言ってみたいという悪戯心が僕の中で沸々と湧きあがってきたけれども、さすがにそれは我慢した。それはあまりにも彼女に対して失礼だと思ったからね。てか、これを言った後「嘘嘘ジョークジョークアメリカンジョーク」なんて言ったら殺されかねない。

まあ、結局のところ、男女交際を断る理由なんて僕には特段思いつかなかった。でも、好きでもないどころか殆ど知り合ってもいない相手と男女交際するってのはどーいうもんかと僕は思ったりもした。

付き合い出してからお互いを知り合って好き合っていけばいいじゃないかって意見もあるだろう。なるほど、確かにその通りかもしれない。けど、付き合い始めても、結局、お互いを理解し合うことができず、好き合うこともできないかもしれないじゃあないか。結婚してからもそーいう理由で離婚する奴がどれだけいるか考えてもみてよ。

そんなふうになんか安易に付き合い出して、結局、あっさり別れるなんてこと、僕はまっぴら御免だった。なんだって、そんなふうにお互いにマイナスしかもたらさないような時間を過ごして、苦痛でしか

ない別れなんてことを経験しないといけないのさ。

つまり、僕はこーいう手のことにはヘタレというか慎重というか臆病だったわけだね。

そんなことを僕は彼女に説明してみた。

すると、彼女は無表情でじつと僕を見つめながら、か細い声で言った。

「……ダメ……なの？」

そう言った彼女の瞳もゆらゆらと頼りなく揺れていて、顔は緊張と羞恥で赤く染まっついていて、男からするとかなり庇護欲をそそられる。変化はそれほど目に見えて違うわけではない、細かな点でしかないけれども、普段、クールな彼女がこうほどまでに弱弱しく頼りないような感じでこんなことを聞いてくるなんてシチュエーションに萌えない男がいるものか？ いや、いない。当然、僕も萌える。いや、今、断言したけど、萌えない男もいるかもしれない。そこんとこ訂正しておくよ。わざわざ訂正する必要があるかどうかは甚だ不明だけど。

「確かに、君の言うとおりかもしれない」

彼女は少し悲しそうな顔で頷いてから、すぐに強い視線で僕を睨みつけた。

「でも、それでも、私は君と付き合いたいんだ。確かに、理解し合えないかもしれない。好き合えないかもしれない。でも、そんなことはやってみなければ分からないじゃないか」

彼女は真っ直ぐな視線で僕の目を突き刺しながら大真面目に言いなすった。まったくもって、彼女の言うとおりだから、僕はぐうの音も出ない。ただ黙って何事か考えているような風を装いながら、「ああ、これはだいたい形勢が不利だぞ」と弱気になっているだけだ。

「勿論、私を君に理解してもらえるように努力する。私を君に好いてもらえるように努力する。君は何もなくていい。君が何もしていなくても知ることはできるし、既に私は君のことを好いているから」

彼女は僕の手を握り締め、瞳に僕しか入らないくらいに迫りながら言うのだ。

「だから、私と付き合い合ってくれ。もしも、どうしても、私を理解できなければ、私を好きになれなければ、その時は、捨ててくれてもいいから」

彼女はそんなことまで言うのだ。こりやあ参っちゃうなあ。

「いくらなんでも、僕はそこまで酷いことはしないよ」

僕はあんまり本筋とは関係ないところを齧^{かじ}ってみたりした。

「じゃあ、君が私と付き合い合つのが嫌そうに見えたら、私は君の前から消えることにする。それなら大丈夫だろう？」

「いやいや、それだって、あんまりにも人道的にどうかと思うよ。

そもそも、付き合い始める前から、別れるときはどうするかなんて話をするのはどうかと思うよ」

結婚式で離婚したときの示談金はどうするか話し合つようなものだ。無料にも程があるってもんさ。

すると、彼女は顔の表面にちょっとだけイラつきを出して言った。

「誰のせいでこんな話をする事になっていていると思ってるんだ？」

まったく仰るとおりで。僕が「うん」か「いいえ」と言えば、済む話なんだよね。

いい加減、彼女も遅々として進まない話にイライラが募り始めたらしい。さすが、母親から「あんたと話しているとイライラする！」

って週に一度言われる僕だ。初めて言われたのは幼稚園の年長さんくらいの頃だったかな？

「うーん。この答えってまた後でつてのはダメなのかなあ？」

僕は懲りずに引き伸ばし工作を続ける。だって、恐いじゃないか。今まで男女交際の「だ」

もしてなかったのに、いきなり、こんな別嬪^{べっぴん}さんと付き合いことになるなんてねえ。まずは、ほら、委員会とか部活とかなんかで女の子と二人きりになる（勿論、なるだけ。軽い会話は可。それ以上は行き過ぎだ）とか、たまたま家の方角が一緒のクラスメイト（女子）

と一緒に登下校するとか、女友達を含めた数人で遊びに行くとか、女友達のお家に遊びに行くとかそーいうところから始めないと。

「私としては逸早い回答を希望する。さもなくてば」

「さもなくてば？」

「実力行使あるのみ」

そう言うなり、彼女は僕にかけられていた掛け布団とシーツを引っぺがし、僕が着ているシャツのボタンを外しにかかった。

「何してるの？」

「脱がす」

「何を？」

「君の服」

「何で？」

僕が聞くと、何故だか彼女は顔を赤らめるのだ。何でだろう？

何でもかんでももあるもんか。人間が服を脱ぐときなんてのは着替えるか風呂入るか怪我の手当するか相撲取るか助平なことをするときしかないじゃないか（他にもあると思うけど（例えばサウナとか）一々全部挙げていくのは大変だから割愛するよ。そんな細かいことを気にしたらダメだ）。助平ってのは別に人の名前（助兵衛って人は実際にいるんだよ）じゃなくて、具体的に述べると大変なことになるので、ボカして違う言葉で表現すると、つまりは、Hなことであり、エロいことであり、お子ちゃまは見たらダメよなことなんだ。明るい家族計画だ。彼女は何の計画をするつもりなのか？

当然、僕は抵抗する。僕とてエロいこと（湾曲に言うのはもうなんか面倒くさい）は嫌いじゃあないけど（嫌いな人なんかいるわけがない）、高校生男女が平日昼間から学校の保健室でエロに精を出す（色んな意味の精）なんてけしからんじゃあないか。そんなことしていいのはAVとエロマンガとアダルトゲームの中だけだ。

僕はそーいったことを懇切丁寧に説明しつつ、彼女の手を止めようと努力したけれども、生憎と僕の努力はいくらか不足していたようで、僕の言葉はほぼ無視され、僕の両手は大変美しく長い指を持

つ彼女の片手によつてまとめ拘束され、抵抗らしい抵抗をできず、
されるがままに、脱衣を強制された。

その間、彼女は無言で、恐いくらい大真面目な無表情フェイスを
維持しているっていうんだから、一体、何を考えて、何をやってい
るんだか、全く僕には理解のしようがない。いや、まあ、エロいこ
としようとしてるっていうことは何となく察することができるんだけど
ね。まさか、これから、解剖されるなんてことはないんじゃないか
な。ないと心の底から信じたい。

しかし、これってセクハラだよなあ。いや、もうセクハラに止ま
つてくれるかも疑わしい。このまんま放っておいたら、逆レ……。

……。ねえ、この先って言ってもいいと思う？ いや、まあ、
最近の小説にはヒロインがソーいうことになっちゃう奴とか多いけ
どさ。でも、僕の場合、ヒーローがヒロインにやられるってんだか
ら、こりゃどーいうことなんだろうっか？

無抵抗主義

別に、僕はそれほどガンジーをそれほど尊敬しているわけじゃないけど（勿論、嫌いなわけでもなんでもないよ）、今回ばかりは無抵抗主義を選択することとした。理由は簡単。抵抗することに疲れたのと面倒くさくなったのと、己の内なる欲望に屈しかけていからかな。所詮は僕も雄つてことかい。

しかし、まあ、初体験（性的な意味の）をこんなシチュエーションで迎えるとは、今まで想像したことなかったな。

まさか、平日昼間の保健室で、まだ付き合ってもいないどころか、あんまり見知ってもいない女の子から逆レイプまがいに初めてを奪われる（とはいっても、男の初めてなんてものにさしたる意味があるようにには思えないけれども）なんてことを誰が想像するもんか。想像はしなくても妄想はするかもしれないけど、あくまで、それは妄想の中のこととそれが実現するなんてことを大真面目に考えている奴なんかいるわけがない。いたしたら、相当おめでたい頭をしていることだろうね。

何はともあれさておいて、とにかく僕はこうして道程じゃない童貞を捨て去ることになりそうだ。さようならチェリーな僕。僕は大人になっちまうよ。

しかし、高村光太郎氏の詩集「道程」は童貞と同音異句な為、よく下ネタにされることで有名だよ。高村光太郎氏も天国で泣いているかもしれない。で、僕もこんなふうにならなければ、僕も高村光太郎氏に怒られてしまうね。まあ、一生、会うことないからご本人に怒られることはないだろうけども、こーいうことって、本人よりも周りの連中とかの方が、おーっと、危ない危ない。こーいう話題は凄いいりけりだからね。これ以上は何も言わない方がいいんだ。うんうん。

さーで、そんなことはどーでもいいんだ。それよりかは、さつき

から、僕をじつと見つめている彼女の方が、今の僕にとっては重要なことだ。

彼女は僕の上に跨っていて、彼女のスカートの中の大事な部分は布団越しに僕の腰の上にあって、互いの感触はさして鮮明に分かるわけではないけれども、刺激は十分で、僕の愚息は半ばぼ……立ちかかっている。ぼの続きが気になる人、てか、殆どの人は分かるでしょ？ 分からなくても、僕には聞かないでおくれよ。男の股に何があって、そこにあるものを刺激したらどーなるかなんてわざわざ調べなくても分かるでしょうよ！ 皆、保健とか好きでしょ！

しかも、そんな状況にあって、僕の上半身は強制脱衣されていて、中々の涼しさに少し鳥肌が立つ。でも、すぐに暑くなることするんでしょう？なんてツツコミは不要だよ。

その上、彼女の顔は僕の顔の正面間近にあって、互いの息を顔で感じられる程に、睫毛の本数を数えられる程に近い。

彼女の瞳はなんだか少し潤んで、ぼんやりと霞がかってうつとりしているような感じがする。その黒い瞳の中には僕しか映っていない、たぶん、彼女が見つめている僕の瞳の中には彼女しかいないんだろうな。

「キスしたい」

そう言った彼女の唇が微かに僕の唇に触れたような気がする。それくらいに互いの顔は間近にあって、あと数cm顔を進めるだけで互いの唇を密着させることができる。

「うーん。我慢できない？」

「できない」

僕が尋ねると彼女はきっぱりと答えた。

その言葉どおり、彼女はあんまり我慢できる状態にないらしい。顔は赤らんでいるし、目はうつとりしているし、腰はぐりぐりと動いて僕の愚息を刺激してくるし、胸もぐいぐい押し当ててくるしね。彼女の今の状況を卑猥な言葉で直接的に言うならば、発情中って感じかな？ 別に卑猥に直接的に言わなくてもいい？ 仰るとおり。

「うーん。じゃあ、しょーがないかなあ」

なんてことを言ってみたら、彼女はそれを承諾と受け取ったらしい。何も言わずに唇を僕の唇に合わせてきた。

「ちゅ、ちゅ、ん、ちゅぱ、んちゅ……」

彼女は僕の唇に一生懸命何度も何度も自身の唇を当ててきて、当てるだけでは飽き足らず、しきりと僕の唇とその周辺を舐め始めた。あつという間に僕らの口の周りは主に彼女の唾液でべちゃべちゃになっちゃった。

「ちゅ、んん、舌、出して」

ひとしきり僕の唇やその周辺を舐め回してから彼女は少しだけ唇を離して言った。

「何でんむう」

何でさ？ と疑問を呈しようとしたら、口を開いて3文字も言わないうちに彼女は再び唇を重ねてきて、今度は僕の口の中にまで彼女の舌が入り込んできた。君ねえ。人の話は最後まで聞きなさいってお母さんとか保育園の先生とかに教わらなかったのかい？ なんて質問をしたかったけれども、生憎と僕の舌には彼女の舌が絡み付いていて、僕の自由に動かせる状況になくて、質問できなかった。残念ってほど言いたかったわけでもないけど。

そんなどーでもいいことを考えている間にも彼女は僕の口の中で盛んに舌を動かして、僕の舌と絡ませあったり、歯茎を舐めたり、唾液を流して込んできたり、逆に唾液を吸い出したりしていた。彼女の唾液はまあ特に何かの味がしたってわけじゃあないけど、何だか異物感を感じた。いつも口の中には自分自身の唾液が充満しているっていうのに、他人のだと何故だか違和感を感じるっていうんだからお口は敏感だね。でも、嫌な感じはしなかった。

暫く僕らは互いの口の間で舌とか唾液とかを行ったり来たりさせていた。これがまあ不思議なものでやっているんだんだん頭の中がぼんやりしてくるし、何だかぼつぼつと体が熱くなってくる感じがする。ちよつと風邪のときの症状に似てるな。

一体、何秒、何分、若しかしたら何十分の間、ディープなキッスをしてから、どちらともなく、口と舌をゆつくりと離すと唾液がついっとならぬ間に細い橋を作った。少し顔を動かすとすぐに切れて消えた。

「……キスというのは中々いいものだな」

何ともなく見詰め合っていると、ぼそりと彼女が呟いた。

「初めてだったの？ キス」

尋ねると彼女は真つ赤な顔でこっくりと頷いた。中々初々しい反応で宜しい。でも、それにしてはさっきの彼女の舌は積極的だったような気がする。その旨を尋ねてみると、

「……見よう見まねだ」

彼女はそう答えてから少し沈黙した後、付け足した。

「あとは本能……」

本能か。なるほど。まあ、生物に男と女がいるのは何でかかっていうと、セックスするためなんだから、そういうことをするのは本能的なものかもしれないね。ん。でも、ちょっと待って。考えてみると、本能的なセックス、つまり、もっと生物学的な用語で言えば性交或いは交尾っていうのにディープキスは関係なくない？ ディープキスしなくても性交・交尾はできるし、殆どの生物はそうしてる。

キスして雰囲気作らないと交尾できない獣とか聞いたことないでしょ？ じゃあ、ディープキスは本能とは言えないんじゃないかな？

なんてことをつらつら考えながら言ってみると、彼女は顔の赤さを一段階濃くしてから白状した。

「君と、こーいうことになったとき、どーゆうふうな、その、キスをするかずっと考えてた。頭の中で思い描いてた。たまに、一人で舌の動きとか練習してみた……」

彼女の積極的な舌の動きは日々の鍛錬の賜物だったわけだね。なるほど。納得。

そんなことを日々しているのはどうかと思うけど。

こんなふうにならぬでもいいことを考えていると、彼女が僕の

手を取った。手に手を取ってさあ踊りましょ。ってわけではなく、彼女の手につかまれた僕の手は彼女の導くがままに彼女の胸へとごくごく自然にぼむにゆと当たった。というより押し付けられた。服越しとはいえ、また、普通の布よりも少し硬いブラ越しでも、彼女の胸の形とか柔らかさとか体温なんてのは微かに、でも、確かに感じられた。

「い、いきなり、何するのさ？」

普段、冷静沈着にいようとは別に思っただけでもないけど、ぼーっとのんびりぐうたらしているせいで落ち着いているようにも見える僕だけでも、さすがに、こんなふうにいきなり他人様のお胸を、しかも、女子の乳を揉、いやいや、揉んではいけないね。乳に手が当たると、なんて事態にはぼんやりとぼんやり落ち着いている場合じゃない。

「何って、私の体を触ってもらおう」

僕の問いかけに彼女はさも当然そうに答える。今更何言ってるのあんたみたいないない感じだ。

それでも、僕には納得できない。更に質問を重ねる。

「何で、僕が君の体を触ることになるのさ？」

すると、彼女は端的に速やかに返答なされた。

「キスの続き」

なるほど、ディーブなキスの後にすることたあ何かってのはガキでも分かるってことすか。いや、違う。ガキには分からないそんなこと知ってるガキは嫌だよ。そんなことを知ってしまったらガキは大人になるんだ。ガキの心は純真なままに！

「続きって、こんな……」

戸惑う僕の言葉に何を勘違いなさったのか。

「やっぱり生の方がいいか」

彼女はそんなことを呟きながら僕の手首を掴んだまま、片手で上手に上着のボタンを開き、ブラをずらし、そのできた空隙に僕の手を突っ込ませた。僕の手は平は熱くて柔らかい何かを誤魔化す必要も意味もないからさつきりいうけど乳を感じた。

「あふう」

僕の手の平が彼女の中々小さくはない、しかし、さほど大きいというほどでもない大きさの生乳に押し付けられた瞬間、彼女が熱い吐息を漏らした。その吐息がなんとも色っぽくて僕の息子はまたぞる元気になってきた。さっきのキスの間に完全に御起立なされたのを、どーでもいい会話の間になんとか宥めすかせて大人しくさせていたのに。

「もっと、揉んで……」

彼女は僕の手を上から押さえつけてぐりぐり動かしながら、腰もまたくいくいと円を描くように動かしながら僕の愚息を刺激しつつ、再び顔を僕に接近させて熱い吐息と共にそう言いなすった。

そんなことをそんなふうにしなから言われてしまつては、まあ、あれです。男なんてもんは、何だかんだと建前を押し並べてそーいうことはイケナイよ！なんて言つてたことなんかすっかり忘れてその気になつちやうんだから、単純なもんだよねえ。

「あ、ん、ん、君の手、気持ちいい」

そんなふうには喘ぐ彼女の口に再び口付けする。今度は僕から舌を入れてみる。

ぴちやぴちやぬちやぬちやくちゆくちゆと唾液が混ざり合つ音と、二人の吐息が響く保健室で、ふと別の声でした。

「あんたら何やってんのよ」

まあ、あれですな。喜劇的にはナイスタイミングってことかな。

無抵抗主義（後書き）

一ヶ月以上ぶりの更新です。

大変遅くなってしまう申し訳ないです。
そして、なんかエロくなりましたよ。

天使の笑み

「エロいことすんなとは言わないよ。世の中の若いもんがそこら中でバンバンやりまくってる現代にあつて、そんなこと言つたつて全く意味ないし。避妊さえしてくれりゃあまあ問題ないんじゃないか。つて私は思つてる。けどさあ。平日真昼間の保健室でつてのはどーよ？ まあ、シチュエーション的には燃えるかもしれないけどさ。エロマンガとかじゃあ放課後の教室とか体育倉庫とかと並ぶ校内エッチスポットだけどさ。でも、実際にやんのはアレよ。問題多いわよ。こんなのすぐにバレるに決まつてるじゃん。まあ、要するに場所考えてやりなさいよ。あと、私のいる場所でやんなや。何だ。三十過ぎて一人身のあたしに対する嫌味か？ あてつけか？ ああ？ ええ、ご無沙汰ですよ。ご無沙汰ですともよ。もう3年も彼氏いませんよ。やる相手いませんよ。だから、何ですか？ 何か問題でもありますか？ ねーだろーがっ！」

「先生。キャラが崩壊してます」

そんな僕の忠告も激昂する先生の耳には届かない。

「とにかくっ！ やるんなら俺の部屋でやんじゃねーっ！ よそんなとこでやっつけよっ！ ここでやるくらいなら外でやれっ！ 外でっ！ 我が保健室を汚すなっ！ このヤリンめっ！ バツカヤロ！っ！ 社会が悪いんだっ！ 社会があっ！」

そう叫ぶと先生は泣きながら猛烈な勢いで廊下を駆け去つていった。

一体、先生はどれだけ社会に痛めつけられてきたんだらうか。そして、どれだけ社会に恨みを持つているんだらうか。社会で何回赤点を取つて追試を受けさせられたんだらうか。あ、その社会じゃな。いと。知つてる知つてる。

僕と彼女は暫くの間、先生が駆け去つていった開けっ放しのドアを見つめた後、顔を合わせ、彼女が呟いた。

「続き、する？」

「するわけないでしょ」

「続きしたかった……」

「しないしない」

いつの間にか貧血も収まっていた（どころかかなり血が活性化していたと思う）僕は、最早、保健室で安静にしている理由もないし、いつ怒りに任せた三十路越えの独身が社会の怒りを僕にぶつけに戻ってくるとも分からなかったから、僕と彼女は保健室を出て廊下を教室に向けて歩いていった。

歩いてる間中、彼女は眉間に皺を寄せながらぶちぶちと「続き続き」と呟っていた。何の続きであり、その続きが何を意味しているかは言わなくても分かるだろうけど。フロイトの夢判断式比喩によつて説明するならば「林檎に突き刺さる剣」とか「海に潜る蛇」とかこんな感じかな。

「私は今からでも大丈夫なんだが」

彼女は僕の袖をくいくいつと引っ張りながらそんなことを言い出した。

「よし！ いつちよやつたるかー！ お父さん、頑張っちゃうぞ

ー！ 実際に頑張るのは息子だけだね！」

なーんて言うわけがない。言えるわけがない。

「大丈夫言われても僕はしないよ」

僕はなるべく素っ気無い風を装って言ってみた。さっきまで抱き合つて乳繰り合っていた相手との会話つてのは気まずいこと極まらないね。

「さっきはやる気だったのに……。舌入れてきたし……」

彼女の不満そうな台詞は華麗にスルー！。

「さつて次の授業は何だっけなー？」

午後一番にインフルエンザ流行によつて二年で一クラス学級閉鎖されたことに伴う全校集会をやつて、その最中に貧血でぶっ倒れて

から保健室で安静に休むという名目の元、彼女とエロいことをしていたら時刻は第5限が終わりかける時間になっていた。となると、次の授業は本日最後の第6限を受けることになる。

「世界史だ」

「おう。先生の嫌いな社会だ」

僕の言葉に彼女は？な顔をしていた。

教室に戻ったら何故だか蒼い顔の先生に「何してた？」って聞かれたので一瞬「エロいこと」と答えそうになったけど、何とか「保健室で休んでいました」っていう真実を述べることができた。やれやれ、あらぬ疑いを招かないで済んで良かった良かった。

しかしながら、5限目をサボった代償として特別に宿題が科されてしまったのは遺憾極まりない。だって、僕は貧血によって已む無く保健室での安静を余儀無くされていたわけであり、僕だってサボりたくてサボったわけじゃあないんだ。そりゃあ、数学は僕が体育と英語と並んで嫌いな授業科目ではあるけれどもね。全校集会の間中、今ここで倒れたら次の数学休めるぜ。とか頭の片隅で考えたりしたけどもね。

まあ、でも、宿題の内容ってのが、僕が保健室で安静にしていたっていうか、実際にはエロいことをしていた間にクラスメイトがやっていた自習用プリントだったんだけれども。

後に聞くに、数学の近藤先生は授業の終わり頃、僕らが参上するほんの数分前に教室に来たんだそうだ。僅かなタイミングの差で、僕は宿題を背負うことになってしまい悔やんでも悔やみきれない。近藤先生は心が狭すぎる。しかし、何だって、先生はあんなにも蒼い顔をしてたんだらうね？ 二日酔いで嘔吐しちゃった直後みたいな感じだったけど。

近藤先生の容態はともかくとして、この数学プリントをなんとかしなければならぬ。ま、なんとかするっていつても手段は確実に一つなだけだね。クラスメイトが既にやっているんだから、それ

を安直に写してもらえばいいだけさ。問題を解くことによって得られる知識？ 何それ？ 美味しいの？

6限目の世界史をぼんにやりと受けた後、さて、誰の数学プリントを写させてもらおうかとプリント睨みながら思案していると、ふと机の上に長い綺麗な指が5本転がっていたら怖いね。こりゃもう猟奇殺人かホラーかって描写なんだけど、幸運なことに転がってはなくて、置かれていることに気付いた。その指を視線で辿っていくと、当然、指から手へ腕へ肩へといくとその指の持ち主が判明した。まあ、予想通り彼女だった。

ついさっきまで密着して乳繰り合っていた彼女と普通に今まで通りに会話するなんて器用な芸当は僕には無理だから、どーも普通に話しかけようと思っても違和感があるってか、僕、今まで殆ど彼女と日常会話をしたことないんだった。全校集会が行われていた体育館での会話が殆ど僕の記憶では初会話なんだったつけ。

彼女は何かするでもなく、さっきの続きをするでもなく、いや、こんなクラスメイトが30人以上いる教室で続きをするなんてことは絶対に無理なただけ。そんな羞恥プレイをクラスメイトに周知（駄洒落です）するくらいなら僕は躊躇なく窓から身を投げるね。まあ、とにかく、彼女は何をするでもなく、僕の机の斜め前に佇んでいて、すと机上のプリントを指差した。

「それ」

「うん。宿題」

「私にも出た」

そりゃそうだ。授業をサボった事実が彼女も同じだからね。これで僕にしか宿題が出てなかったら僕は職員室に火炎瓶を投げ込んで少年事件の歴史に新たな一ページを刻むよ。

で、その宿題がどうしたっていうんだらうかね？

「だから、その宿題を一緒にやるうか？」

「ん、うー」

彼女の申し出はありがたいこと極まりなかった。こんなにも早く宿題の写し元が見つかるとはね。だから「うん」と答えようと思っただけ。

「私の家で」

「んー、ありがたい申し出だけど、結構です」

彼女の言葉の続きを聞いて、断ることにした。彼女の家になんかのこのこ行ったら何されるか分かったもんじゃない。いや、まあ、ナニされるんでしょうけども。わざわざ、肉食獣がいると分かっている巣穴にのこのこ歩いていく草食獣がいるものか。

拒否られてむくれている彼女を放置して僕は宿題の写し元を探す。そうだなあ、まずは、やつぱり、第一の親友たる鈴木君かな。

「おい、鈴木くん」

「はインフルエンザで休みだ」

僕の呼びかけに彼女が即座に答え、僕らは顔を見合す。

そうだったね。鈴木君は休みだったね。だから、僕は君にお姫様抱っこされて保健室に連れ込まれてなんやかんやされたんだったね。

まあ、でも、大丈夫。僕の友達に鈴木君だけではないのだ。まあ、友達は少ない方だけれども、男友達が一人だけだなんていうよくいるラブコメの主人公とは違うのさ。きちんと鈴木君以外にも何人が友人だっているのだよ。まあ、そんなに自慢することじゃあないけれどもね。

「おい、古川くん。ちょっと申し訳ないけど、さっきの自習の時間にやってた数学のプリントの答えを写させてくれないかなー？」

僕の友人の古川君は教室の前方で友人数人と集まって雑談と洒落込んでいらしゃったけれども、僕の要請を聞いて、快く応じてくれるはずだ。

「アホ。んなもん、やってるわけねーだろ。自習の時間に行儀よくプリントやってる奴を友人に持った覚えがあるか？」

「そーいえないね」

古川君の言葉に妙に納得してから、彼の側にいる他の友人たちに

顔を向けたけれど、皆が皆、首を横に振る。なんて勉強心のない連中だ。君たちは学校に何しに来ているんだよ？ まあ、僕に言えた台詞じゃないってのは今更なんだけれども。

自習用プリントにしては妙に大量な問題数が印刷された紙切れを見つめていると、ポンと肩に手が置かれた。

「私の家で一緒にやろう」

彼女の顔に浮かぶ微笑は、本当に微かな笑みではあったけれども、僕には何だか天使の笑みに見えてしまった。

気がつくと、僕は彼女の家の前にいたっていうんだから、まあ、僕の思考回路は単純極まりないなと呆れるばかりだよ。うん。

私ハ君ノモノニナル

天使の笑み（後書き）

次回も、もしかするとエロい？かもしれませぬ。

答(前書き)

前話くらいで「次はエロくする」って言ったような気がしますけど、
ど、すみません。エロくなりませんでした。

答

「こじ」

彼女は相変わらずの無表情で素っ気無く一軒の家を指差した。

その家は、まあ、何のこともない普通の家だった。

下校時に気まずさから何とはなしに交わした会話によれば彼女のお父上は公務員であるらしい。とはいえ、霞ヶ関で政治を司っているようなキャリア官僚とかじゃあなくて、中央省庁ですらなく、地方出先機関の課長補佐クラス程度の平公務員であり、今は単身赴任しているそうだ。

彼女の自宅は、まあ、確かに地方出先機関の課長補佐クラスの家くらいのレベルのお家だった。一般的な住宅地に立ち並ぶ一般的な家だ。

「いいお宅だね」

何の感想も思いつかなかったので、これだけ言ってみた。

「借家だ」

「あっそう」

次の宰相候補のことじゃないよ。

まあ、彼女の家が香川県くらいの敷地を持つ大理石製の豪邸だろうが親子3人寝転ぶことしか出来ない程度のちよつと立派な犬小屋みたいなダンボール製の家だろうが、僕としては特段問題はないわけだけれども。ちよつと立派なダンボール犬小屋と一緒に勉強する場所に困るか。

「で。いつまで君の家を眺めていればいいのかな？」

僕は10分くらい一般平凡住宅を見つめてから、彼女に尋ねた。早く家に入れろって暗に要求してるみたいだから言いたくはなかったんだけど、あんまりにも長時間（ってほど長い時間なわけじゃないけど、建築家でも住宅業者でも家を買いたい人でもない僕にとつては十分長い）に渡って、普通の家を見続けるのは、さすがに飽

きてしまうから、ついついそんな過分な要求をしてしまったよ。

「む。そうだった」

僕の隣に並んで一緒に家を見つめていた彼女がふと思い出したように呟いた。彼女は家を見ている間、終始、無表情かつ無言で、不気味といえば不気味だった。

「君、大丈夫？ 体の調子とか悪いんじゃない？」

ちよつと心配になって、彼女の顔色を見ながら聞いてみた。だってねえ。自宅の前で10分も無表情・無言で佇んでるなんて、普通の状態の人はしない行動じゃないか。

「大丈夫。心配かけてごめん」

彼女はいつものクールフェイスでそう謝罪してから、つらつらと言葉少なに、ただ何もせず呆然と立っていた理由を説明した。

「君が本当に私の家に来たと思うと、感動してしまって、ちよつと安心してしまっていた」

「あー……、そう。それはー、あー、良かったね」

「うん。良かった」

何とも反応し難い理由を聞いて僕が苦し紛れに答えると、彼女は険しい顔でしっかりと頷いた。

まあ、とりあえず、彼女のよく分からない思考回路はスルーしておいて、僕はさりげなく尋ねてみる。

「ところで、君には兄弟姉妹っているのかな？」

「いや、いない。私は一人っ子だ」

「じゃあ、今は母子二人暮らしなんだね。ところで、お母様は本日も在宅かな？」

「……何でそんなことを聞く？」

彼女のお母さんの在宅を確認すると、彼女は無感情かつクールな瞳で僕をじつと見下ろす。下ろされているのは大変遺憾だ。ええ、どーせ僕はチビですよ。けっ。

「聞いちゃダメなことなの？」

「ダメじゃあないが……」

逆に聞き返すと彼女は渋い顔（やつぱり無表情基調の中に若干渋さが見えるくらい）をした。何だか釈然としない気分らしい。

「それであるの？ いないの？」

確認すべく再度尋ねると彼女は暫く沈黙した後、小さな声でぼそつと答えた。

「……………いない」

「あ。今日は夕方からやるドラマ「帰ってきたあんちくしょう」の再放送を見ないといけないんだ。おお、そうだ。下校途中に豆腐を買ってこいってお母さんに命令されているんだ。大変残念極まりないけど、一緒に宿題をやるのはまた今度つてことにしようじゃないか。数学のプリントは明日の朝、写させておくれよ。そんなじゃまた明日ー」

僕としては可及的速やかに明後日の方向に走り出す。違う。明後日やない。僕の自宅の方向へダツシュしようとした。しようとしたっていう記述はつまりまだしてなくて思っただけつてことか或いはできなかったつてことなんだけれども、この場合は後者。

くるつと右向けー右して2歩くらい踏み出したところで、物凄い勢いで首根っこを掴まれた。一瞬、呼吸が止まってしまつてしまうくらいの勢いと強さだった。

「逃がさない」

そう呟いた彼女の目は、まさしく獲物に噛み付いた狩猟者の目だったと後世には伝わる。そんなこと伝えてどーする。

「君は私と来るんだ。そして、続……………宿題をやるつ」

「ねえ、さつき、続つて言つたよね？ 言つてたよね。言いかけてたよね。それつて何の続き？ ねえ」

「……………宿題の続きだ」

彼女は苦し紛れにそんなことを呟く。

「僕、宿題なんてまだ全く全然手を付けていないから続きも何もないんだけどー」

「細かいことを言つな」

僕がぶーたらと揚げ足を取っていると、彼女にばつさり切られた。「そもそも、ここまで来ておいて、何で、今更、帰ろうとする？」

そうもにもよると呟いた時の彼女は、いつも表情が薄い彼女にしてはかなり表情豊かな顔をしていた。これくらいの表情ならば鈍感なラブコメ主人公でも感情を読み取ることができるだろう。ずばり、彼女は悲しそうな顔をしていた。涙までぽろつといくつか零れたんだからこれは疑う余地はない。

「あー、泣かないで欲しいなー」

「誰のせいで泣きそうになってると思ってる？」

彼女の質問に僕は無言で両手を高々と挙げてみる。彼女に睨まれてすくすく手を下ろす。ちよつとおどけてみただけなのにそんな恐い顔しなくてもいいじゃないか。

「えーつと、何で泣きそうになってるんだろつかねー？」

なんて惚けたことをほざいてみたら更に鋭い目で睨まれた。視線で体に穴を開けられそうだよ。彼女は達磨に師事した経験があるのかも知れない。

「君が、私のことを、遠ざけようとするから、私が好きと言葉でも行動でも示しているのに、君が応えてくれないから。だから、私は悲しくなる……」

そう言つて彼女はしょんぼりした。彼女の足元のアスファルトに黒い点がいくつかできた。はて？ 雨かな。と空を見上げても、今日は快晴。誤魔化せないじゃーん。

「何で君は私の好意に応えてくれないんだ？ 嫌なら嫌つてはつきり言つてくれればいい。そうしたら……私は諦めるから。君がどっちつかずな態度で、今だって、簡単に私の家の前まで付いて来たから。だから、私は期待してしまうんだ。君が私の愛に応えてくれるんじゃないかって」

期待させておいて釣れない態度を取るなんて僕つたらどんな小悪魔。

まあ、僕としては、本音を言うと、まだどーするか決めていなか

ったりするんだ。彼女と男女交際するか。しないか。僕にとっては殆ど知らない相手だからね。付き合っても問題ない相手がどうかを判断する必要がある（残念なことに、世の中には頭の中身に問題のある人つてのが少なからず存在するからね）し、彼女はちょっとヤンデレな気質があるように見える上に、ストーリーカー暦まであるから、迂闊に交際を拒んだりしたら「グサツ」とやられちゃうんじゃないかと思ったりもして、ついつい流されるままにここまで来ちゃったんだけど、考えてみれば、確かに、僕の態度は恋する乙女にとってしてみれば酷いものだったかもしれないね。僕ったらなんて小悪魔ーってさっき言ったか。

「だから、今すぐ、ここで、答えてくれ」

「何を？ あいたたたたっ！」

性懲りもなくまた惚けてみると、掴まれたままだった首根っこをぎゅっと締められて、大変痛い思いをした。

「真面目に答えて」

「僕に真面目さを求められてもなー」

「君がいつも不真面目なのは知っている。けど、今くらいはもうちょっと真面目に考えてくれ」

仰るとおり。

「うーん。じゃあ、いいよ」

「は？」

彼女はぼかーんとした。

「え？」

なんでぼかーんとされたのか分からなくて僕もぼかーんとした。

「？」

通りすがりの小学生が路上で立ち尽くす二人の男女高校生を見てぼかーんとした。

「今何て言った？」

「え」

「違う。それより前だ！」

「僕に真面目さを求いたたたたた！ 首の骨が折れるよ！？」

「君、わざとやっているだろう？」

ぎりぎり僕と僕の首を押し折らんばかりに力強く絞めながら彼女が大真面目な顔で言った。

だつてねえ。「今何て言った？」なんて言われたらその求められている言葉以外の言葉を巧妙に言っていくのがお決まりつてもんだよねえ。

「もう一回。もう一回、きちんと答えてくれ」

「しょうがないな」

別に僕は生姜が欲しいわけじゃあなく、あ、そんなどーでもいいことは言わんでいい？ 全く、その通りですね。

「僕も君のことが好きになったから、男女交際してくれませんか？」
ちよつとかつこつけて言ってみた。いえーい。僕ってばかっこいい。恥ずかしさで死にそうだぜー。はあ。

彼女は無表情かつ無言で僕をじっと見つめる。ここで「ごめんなさい」とか言われたら僕は一生引き籠もるね。もう人間なんて、女なんて信じられるもんかって思いながら、薄暗い部屋の中で某ネット掲示板に「 駅前で幸せそうなカップルを包丁で刺し殺す」とか書きこして警察に捕まるんだ。

彼女は今までずうつと掴んでいたままだった僕の首根っこを更に強く締め上げ、僕に「ぐえ」と潰されたカエルみたいな鳴き声を出させてから、そのまま僕を引つ張つて歩き出した。体力がない上に呼吸する器官まで握られた僕は彼女にされるまま引つ張られる。

「家の中に入ろう。いつまでも外に出ているは始まらない」

僕を自宅の中に引つ張り込みながら彼女は呟いた。一体、彼女は何を始めるつもりなんだろうね？ 宿題かな？ そのつもりで僕は来たんだけど、どーかなー？

まあ、そんなことを考えながら、僕は彼女によつて家の中に引きずり込まれていった。まるで肉食獣に捕らえられて巣穴に持ち帰られる獲物（イメージとしては首を噛まれてぐつたりしてるトムソン

私ハ君ノモノニナル

ガゼル()の気分だよ。これから僕、食べられちゃうのかなー。性的な意味で。

答（後書き）

次こそ、次こそは皆の息子が喜ぶようなエロい話を！書きたいな
！。
伏線としては十分なんですけど、なんか書いてるうちに恥ずかしくな
ってへタレるかもしれません。

巢穴の中

「ぎゃあ」

ドアを開けた途端、僕は玄関に放り込まれて段差に足を取られて転んでしまった。

僕の運動能力はクラスでも最低ランクと評判なんだよ。うちのクラスの男子は19人なんだけど、サッカーをするとき2チームに分割する際、僕は必ず10人の方に入るものだ。友人曰く「そうすりゃ、9対9だろ？」とのこと。遺憾ながらご尤もだ。

そんな僕が機敏な動きで転ばずに済んだり、上手に受身を取れたりするはずがない。なんとも格好悪く玄関と廊下の境目辺りに這い蹲ることになってしまった。しかも、体のあちこちを打ってしまって痛い。涙が出ちゃう。だって、男の子だもん。あれ？ なんか違う。

本当に痛みで出てしまっていた涙をさり気無く袖で拭きながら、僕はとりあえず玄関の段差に腰掛ける。靴を脱ぐ場所だね。この段差にも何か名前があるのかもしれないけど、僕は知らない。

視線を上げると、彼女はドアにへばり付いていた。体の正面をドアの方に向けているから何を考えているのか表情を読むこともできない。まあ、顔を見れたとて、いつもの無表情ではなんとなくしか分からないと思うんだけどね。

「何やってるの？」

当然の帰結として、僕は意味不明な行動に出ている彼女に尋ねる。ドアの匂いでも嗅いでいるんだろうか？ まあ、木のドアだからなんとなく木の匂いがしそうではあるけど。

「……」

「」？」

「これで……」

彼女の言葉は微かに震えているようだった。彼女の右手も微かに

震えていて、その手がゆつくりとドアノブへ伸びて行って、

「これで……2人つきりだ……」

鍵をかけた。

それから壊れかけのロボットみたいにぎぎぎって擬音がつきそう
な動作で首をこつちに向けた。

「ねえ、なんか怖いんだけど」

「大丈夫。痛いのは私だけだ。それも一瞬だけ」

この子は何の話をしているんだろうね？

「誰だつて初めては怖いものだ。しかし、誰もがその恐さを乗り越
えてきたのだ。だから、我々はこの世に生を受けている」

まあ、確かにやることやらんと生まれなからね。しかし、親が
やることやっていることに思いを馳せることほどぐんにやりするこ
ともないね。

「だから、大丈夫だ」

そんなことを言いながら彼女は僕に詰め寄ってくる。さつきから
彼女は何度も「大丈夫」という語を繰り返しているけど、日本人の
「大丈夫」とアメリカ人の「ノープロブレム」ほど信用できないも
のではないって何かで聞いたことがあるようなないような。

「何が大丈夫なのか僕にはさっぱりなんだけどって、君、ちよつと
近過ぎ！」

彼女はひたすら「大丈夫」を怪しげな呪文のように唱えながらじ
りじりと迫ってきた。

一般普通住宅たる彼女の自宅の玄関などさしたる広さなどあるは
ずがない。彼女は数秒で僕の両肩に手を置き、顔を近づけてきた。
彼女の顔は真っ赤で、目は爛々ときらめき（誤字じゃない。これは
きらめきじゃない。きらめきだ）、そのくせ、表情はいつつもどお
りの無表情クールフェイスだった。真顔で迫られると凄く恐いんだ
けど。

僕は彼女の顔から離れようと体を仰け反らせ、彼女はそのまま迫
つてきて、結果、僕は彼女によって廊下に押し倒される形になった。

フローリングの床が背中に冷たい。

「キスしよう」

「何でさ。いや、ちょっと、だから、近過ぎるってば！」

「近づかないとキスできない」

彼女はちよつと眉を八の字にして言った。ちよつと困ったみいたな顔だ。困つてんのは僕の方だよ。

「いやね。何で、今、こんなところでキスをするのさ？」

「……君がその質問をする意味が分からない」

僕は君が何故その質問を理解できないのか理解できないよ。でも、そんなことを言い合っていては話が進まないから、僕はその言葉を飲み込んで、代わりに溜息を吐いてから、先の質問の意図を説明した。

「いいかい？　そもそもね？　僕は宿題をやりに来たんだよ？　そして、ここは玄関と廊下の境目だ。そして、いきなり、押し倒されてキスされそうになる理由が分からない」

僕の説明を聞いた彼女は暫し黙ってから、

「でも、私はキスをしたい」

欲情に塗れた衝動的な答えをしなすった。

それに対して、僕は常識ある大人な発言を試してみる。

「したいからするっていう単純な思考による行動はどうかと思うよ。それじゃあ、殺したかったから殺したみたいなの異常な精神の殺人鬼と同じだよん」

さっきの大人発言は嘘。ガキみたいな発言になっちゃった。てへ。

「それは話が飛躍しすぎだと思う」

そう言われると僕は黙るしかない。

「直情的な言動は良い結果を生まないよ？」

「例えば？」

「そうだね。例えば、情愛に身を任せてやってしまつて子供ができたとかよく聞く話じゃないかい？」

例を求められて僕は少し考えてから、こーいう場面で、ずるずる

やってしまった末の結末の一つを挙げてみた。

「私は別に君の子を生んでもいいが」

「いいわけないでしょ」

「それに、きちんと、これも用意してる」

そう言つて彼女が上着の胸ポケットから取り出したのは、何処かの何かで見たことがあるゴム製品。わーお。明るい家族計画。彼女つてばどんなに計画的なのさ。

「これできちんと避妊も性病防止もできる。問題ない」

「まあ、そりゃあ、その意味では問題ないけどさあ」

この言葉が失敗だったのかもしれない。僕の言つた「問題ない」という言葉尻を掴んで、彼女は僕が了解したと判断したらしい。

「じゃあ、キスする」

とかなんとか言いながら彼女は更に迫ってきた。何が「じゃあ」なのか分からなかつたけど、そのことを指摘する前に、僕の唇は彼女の唇と密着してしまつていて、指摘しようにも言葉を発することができなくて、

「むー」

と、不満と抗議の気持ちを含めた声というより音を出してみたけど、彼女に通じているかどうかは疑わしい。彼女は僕の唇に、ついはむように何度も唇を重ねたり、舐め上げたり、はむはむと甘噛みしたりするのに忙しいらしいからね。

「ちゅ、ん、ちゅ、ん、ねえ、口開けて、ね」

おっと、この言葉は聞いたことがあるよ？ 保健室ではこの求めに対してうっかり「何で？」なんて聞こうとしたところ、開けた口の隙間に舌を突っ込まれてしまい、ついつい流れで貪り合うようなキスへと発展してしまつたわけだけれども、僕とて学習能力はあるものさ。同じ轍は踏まないのだ。

「どうし、んむう」

て？つて最後まで言う前に舌を入れられた。僕のことを馬鹿だと思つた君。今頃、気付いたの？

彼女の舌は僕の口の中で、それはもう触れていない場所が細胞一つ分もない様になっているかのごとく、隅々まで隈なく、動き回った後、口の中で大人しく這い蹲っていた僕の舌に絡み付いて巻き付いて舐め回して互いの舌のざらざらした感じを感じ合って味わい合って唾液でどろどろになるまで舐り合った。

この間、僕と彼女は殆ど瞬きもしないくらいにずっと目を開いていて、互いの瞳をじいっと見詰め合っていた。

感じるのは彼女の舌のざらつきと唾液の滑りだけ。見えるのは彼女の喜色に満ちた瞳だけ。聞こえるのは唾液が混ざり合う淫らかな水音だけ。匂うのはいやらしい唾液と汗の香りだけ。

体の芯というか背筋がぞくぞくする感覚を味わっていると、いきなり、彼女が舌をぐいっと僕の口の奥に捻じ込んできて、僕は少し喉を詰まらせて苦痛と息苦しさを覚え涙が浮かんだ。それさえも何か快感に感じていると、彼女の舌先は舌根の方から舌先の方へ表面をつつうーっと伝って行って舌先同士を浅く絡ませ、そのまま舌を引いていく。その時の彼女の瞳が淫らに誘うように笑ったように見えて、気付けば、僕の舌は貪るように彼女の口の中で蠢いていた。彼女の瞳は更なる喜色に溢れ、僕の舌は彼女の口の中で熱烈な歓迎を受けた。

存分に彼女の口の中を味わってから舌を引き抜くと、唾液の糸ができて、すぐ消えた。

唇と舌は離れたけれども、互いの顔はまだ鼻と鼻が触れ合うほどの近さで、彼女の暑い吐息を顔に感じた。

「ん、ああ、ぞくぞくした」

彼女はうつとりと呟いた。

その感想には同意だけでも、僕は黙っていた。口を開けば余計なことを言いそうだったからね。僕はよく喋るけど、ろくなことを言ったことがないのさ。これ不自信。

「キスだけで、ほらあ」

そう言っただけで彼女は僕の手を取ってスカートの中に入れさせた。

スカートの中で僕の指は彼女の手がさせられるがままに薄い布の上をなぞった。

「あん、んん、ああ」

指が触れた途端に悩ましげな声を出す彼女。君が触らせてるんでしようが。で、その感触はというと、まあ、確かにちよつと湿ってたね。詳細を述べてると本気で危ない気がするので自重。え？今更？ いやいや、まだ大丈夫なはず。

ふと、カリカリカリという音がすると思ったら、股間に軽いけれども重大なる刺激を感じた。今まで触れてはいなかったけれども（話的にも物理的にも）話が愚息は、そりやもうあれだけ大人なキスをした上に、女の子な部分に指を這わせているともなれば起立していることが必然であり、自然であり、当然であつて、それを抑制することなど不可能であることは男ならば誰でも分かるだろう？ こんな場面で息子が立たないような男性がいたら速やかに然るべき病院に行き治療することを薦めよう。

して、そのカリカリ音は何かと思えば、彼女が僕の社会の窓の金属箇所を爪で引っ搔いている音だった。下から上へと撫で上げながら、喜悅な瞳で僕を見つめる。

「君の、硬いね」

「そりやあねえ」

当たり前でしょうよ。お嬢さん。

「君のは柔らかいねえ」

「あうん、ん、こつちも」

軽く指を動かすと彼女は喘ぎ、それから、僕の空いている手を胸元に入れさせた。こつちも、やっぱりふやふやと柔らかいのだった。熱くてしつとりとしていて手に吸い付く。

「んん、あ、うあ」

彼女は喘ぎながらも、手は中々大胆に動いて、僕の愚息を、まあ、何だ。大変刺激しなすった。これも細かい描写は自重。これ以上、書いたら、さすがに危ない、ような気がする。てか、今の段階で危

ないかもしれない。でも、まあ、これくらいの描写なら普通に書店に並んでいる本にあるような気もするからOKと僕は判断する。

互いの敏感な箇所を刺激し合いながら、僕は熱に浮かされたような顔で、また唇を合わせて、存分に舌による交流と唾液の交換をし、更なる高みへ昇らんとしているところで、

ガチャリ。

と、開錠される音が聞こえたもんですから、僕と彼女は確実に心臓を一瞬止まらせた。

巢穴の中（後書き）

大変ヤバいような気がするよーなーしないよーなー！。

でも、これくらいの描写がある小説とかもあるとは思ってから、大丈

夫な気もします。

怒られたら修正します。

親子丼

「ただいまーって、あら？ 何やってるの？」

ドアを開けて玄関に入ってきたのは眼鏡をかけスーツを着込んだ眼鏡で妙齡の女性だった。手にはベージュの洒落た鞆とエコバックを持っていた。

すばり、誰かって聞かなくても分かる。赤の他人が人んちに平然と入ってくるはずがない。親戚なら第一声が「ただいま」なはずがない。姉にしては年上すぎる。ともすれば、お母様以外にいようはずがないじゃあないか。

お母様は廊下に並んで正座している僕と彼女を見て目を丸くした。

「……おかえり」

「お邪魔してます」

彼女は無表情にむっつりと、僕はできるだけプラスな印象を与えられるように笑顔で言ってみた。もう本当に普通に友達のお家にお邪魔している好少年の見本ともいえるような感じで。

服装の乱れは数秒で整えているし、正座までしているんだから、友達のお家に行ってきた純真無垢な好青年に見えるはず。

「えーっと、お友達？」

眼鏡をくいつと上げてまじまじと僕を観察しながらお母様が言いなすった。そんなにまじまじと見つめないで頂きたいな。美人に見つめられちゃアドキドキしちゃうからね。まあ、でもさすがに十代も半ば過ぎたばかりの僕にとっては妙齡の大人の女性はストライク圏内から大きく離れているね。僕が交際できる女性の年齢の上限はそーだなー。25歳ってところかなーってこれは全く知らない情報だね。

と、ここで僕はハッと気付く。お母様のこの質問の答えを彼女に任せてしまっただけじゃないような気がする。

「彼は、私の彼氏」

とかなんとか言いそうな予感抜群だ。そんなことをお母様に言われてしまつては大変困つてしまう。一応、交際しようしようという合意は僕と彼女の間で為されたわけではあるけども、告白されたのは今日のことであり、それを僕が正式に受諾したのはついさつき、この家の前でだからね。いきなり、そんな、今さっき交際を始めたばかりにも関わらず、もうはや彼女の母親とご挨拶なんてそんな高いハードルを飛び越えるのは貧弱な体とノミの心臓の僕には不可能というものさ。

そんなふうになつたら困るので、僕は先手を打つことにする。臆病者は、臆病者ゆえに、危ない橋を渡るような状況になる前に、渡らなくてもいいような状況に持つていくようにすることが肝要なのさ。

「僕は彼女のクラスメイトで友人なのですけれども、今日は彼女に勉強を教わりに参りました。お茶菓子の類は大いに大歓迎です」

と、僕が言う一瞬前に彼女が口を開いた。

「彼は私の婚約者」

「なにーっ!？」

彼女の言葉に僕と彼女のお母様は仰天して奇しくも全く同じ言葉を叫んだのだつた。

「なるほど。理解したわ。つまりは、彼氏さんね。今日から」

僕の真正面のソファに座つて腕組みした彼女のお母様は、彼女の余計な妨害を防ぎながら何とか行うことができた僕の説明によく納得してくれたようだった。30分も話し続けたかいがあつたというものだよ。途中途中で彼女が余計な言葉を差し挟んでこなければ5分で説明できただろうけどね。僕の話の殆どは肝心の僕らの清く正しく美しい交際に至る経緯の説明よりも、彼女が言った余計な言葉の撤回と訂正、そして、彼女に頼むから余計なことを言わずに黙っていて欲しいという説得に費やされたものだよ。

「でも、安心したわー」

一体、何に安心したのかと首を傾げていると、お母様は娘が出した緑茶をずそぞそと飲み干してから爽やかな笑顔でほほほと笑いながら言った。

「うちの娘がストーカー容疑で逮捕されなくて済んで良かったわー」
あんだ、自分の娘がストーカー行為してるの知ってたんかい。止めなよ。とは思ったけど、口にはしないことにした。いきなり初対面の奥様にそんなことを平気で言えるほど僕の神経は凶太くないのさ。

「君、自分の娘がストーカーしてたら、止めるよって言いたそうな顔してるよ？」

表情を隠すのに神経凶太いもか細いも関係ないわな。

とりあえず、僕は誤魔化すことにした。

「いやいや、この表情は説教されているときに先生の社会の窓が全開なのを発見してしまったときの顔ですよ」

「あー。それは気まずい」

お母様は何か思い当たる節があるのか額をぱしぱし叩きながら力強く何度も何度も頷きなすった。僕もうんうんと頷き、同調する。

「でしょー？」

「で」

「で？」

「ストーカー止めるよって思ったでしょ？」

誤魔化せなかった。

「うん、まあ、そう思うのが普通の人間でしょうねえ」

「そーよねえ」

普通の人間じゃない自覚あるらしい。

お母様は僕の言葉に頷いてから、頬に手を当てて微かに首を傾げて微笑みながら仰った。

「でもね。娘がストーカーするほど愛しているんなら、その恋を応援してあげたくなくなるのが普通の母親ってもんじゃあないからしら？」

「まあ、そ……」

お母様のいい感じの台詞に咄嗟に同意の言葉を発しそうになつてから、僕は口の動きを止める。馬鹿みたいに口をポカンと開けて暫し考えてから首を傾げる。

「そーですかー？」

「そーよー。母の愛は偉大なのよー」

それは責任放棄なのではないのかなと思つたり思わなかったり。

「ところで、娘さんのストーカー行為にはいつ頃から気付いていらつしやつたんですか？」

なんとなく好奇心に駆られて聞いてみた。

「そーねー。高校に入学した日の次の週くらいかしら」

「うええっ!？」

彼女のストーカー行為が予想外に昔から続いていることだったことに驚いた僕は変な悲鳴を上げてしまった。入学式なんてのは当然4月であり、もう半年近く前のことだよ。てことは、僕は半年近くの間、ストーキングされててもトンと気付いていなかった大間抜けつてことが判明してしまったよ。こりゃあビックリだ。

「てか、どーして、娘さんのそんな行動をご存知なんですか？」

「自分の子供のやつてることなんて親は大抵分かつているものよ」
それもそうかと僕は納得。どんなに子供が隠しているつもりでも、親は殆どお見通しなんだよねえ。でも、最近子供が何やっているのかどころか子供の部屋がどーなってるかも分かつていない親が増えていくみたいだけど。まあ、このお話はそんな社会問題的なことを述べるような真面目話じゃないからね。スルーするー。

「お待たせ」

お母様と優雅にお話をしていると、自室で着替えていた彼女が戻ってきた。

戻ってきた彼女は水色のシンプルなシャツにスマートなジーンズという簡単な格好だった。そして、いつもどおりクールな無表情ながらどこか不機嫌そうだった。

「なんか怒ってる？」

尋ねると彼女はこっくり頷いた。

「なんで覗きに来ない」

「え。そんなことで僕、君に睨まれてるの？」

普通、女の子ってのは着替えているところを覗かれると怒るもんじゃあないの？ だって、ほら、ラブコメとかでよく女の子が着替えている所にうっかり入ってしまった男の子がボコボコにされたり悲鳴を上げられたり警察に突き出されたりはしないけど、まあ、ともかく怒られている描写はよくあるじゃあないか。

その旨、述べると、彼女は無言で更に僕を睨んできた。

「じゃあ、僕はあれかな。君のお母様に、ちよつと娘さんの着替えシーンを鑑賞しに行きますので中座させて頂きますね。とか言っていそそ君の着替えを見に行けば満足だったわけかい？」

「うむ」

「なんでそんな嬉しそうに頷くかなー。皮肉っぽく言った僕が馬鹿みたいじゃない」

僕はちよつぱり疲れた気分で溜息を吐いた。

そんな僕らを見てお母様は「ほほほほー」とか奥様風に笑った。

「じゃあ、私たちは勉強してくる」

彼女は僕の手を握り締め、お母様をきつと睨みつけながら宣言した。君は何で自分のお母様をそんな睨みつけるのかな。母子仲悪いの？ だとしたらなんと居心地の悪いご家庭にお邪魔してしまつたものだなあ。

「なーに、あなた、なんでそんなお母さんのこと睨むのさ」

お母様も何故睨まれるのか分からないらしい。その質問の答えたるは、つまり、

「彼と仲良さそうに話してた」

ということだった。自分の母親にまで嫉妬するって君ごんだけ独占欲強いのだ。

お母様は慣れていることらしく、軽く笑っているだけだった。どんな娘よ。

「心配しなくても邪魔なんてしないから。私は夕飯の用意しないといけないし。あ、そうだ。君も夕飯一緒に食べていく？」

「あ、いえいえ、そんなそんな」

そんなお誘いを受けて「喜んでー」なんていうふうにつちやうのは日本人じゃないね。日本人はお誘いを2回は断らないと気が済まない人種なのさ。

「いいからいいから遠慮しないでいいから」

「そんなご迷惑を」

「食べていって。私も君と一緒に食事をしたい」

お母様からは更に勧められ、彼女からもお願いするように見つめられては断りようがない。

「じゃあ、お言葉に甘えまして」

「そう。あ、でも、もう買い物に行って来ちゃったからメニューは変えられないけど」

「今日の夕食のメニューは何なんでしょうかね？」

なんとなくお手軽気軽に尋ねると、お母様は悪戯っぽく笑いながら仰った。

「親子丼」

わあ、上手いんだか下手なんだか。

とにかく、そんなエロシチュエーションは、僕勘弁だな。って思いながら、僕は彼女に手を引かれ、彼女の部屋へと向かった。

親子丼（後書き）

久しぶりの更新です。更新遅れてしまい申し訳ありません。
ところで、オチの親子丼の意味が分からない人がいらっしゃるかも
しれませんが、知らない方が良いと思います。

パンツ

彼女の部屋は二階にいくつかある部屋の一つで、僕はその部屋に通された。通されたつーよりかは腕を引っ張られて、ここまで連行され、部屋の中に放り込まれたような感じだったけどね。まあ、僕はお部屋に招かれてる身だからね。客人に対する待遇にとやかく文句を言い募る主義ではないのだよ。

「うるさい」

と、そんな僕の寛大さをアピールしてみたら彼女に4文字で怒られて僕は沈黙した。

口を動かす必要がなくなつて急に暇になつてしまつた僕は彼女の部屋の中を観察することにした。

彼女の部屋はとても簡素だつた。入つて向かいに窓があつて、その前に学習机が置かれ、付属の本棚には教科書や辞書、図鑑、アルバムっぽいものが並んでいた。他にあるのは筆筒とベッドくらいだつた。

「大変シンプルなお部屋ですね」

「……それは褒め言葉なのか？」

「いや、褒めてはいない。あ、でも、貶してもいないよ？」

そんなふうな普通会話を繰り返しながら、僕は部屋を見回す。

「ところで、僕らは何処で勉強すればいいのかな？」

普通、勉強しようと思つたら、机とかテーブルにノート広げてお勉強するもんだと思うけど、この部屋には学習机が一つしかない。

二人がけ用の学習机なんてものを僕は知らないし、現に、彼女の部屋の学習机も一人がけで椅子は一つだつた。一人で勉強するにやあ不自由しないけど、僕ら二人でやるのは難しい。床に這い蹲つて、プリント広げても勉強はできるけど、それはどーかと思うんだ。だつて、床に寝そべつてたら字書き難いじゃないか。

「何処つて……」

彼女は僕を見て眉間に皺を寄せた。

「そこしかないだろう」

なんか「何言ってんだこいつ」的な調子で言われた。

そんな反応された僕も負けずに「何言ってんだこいつ」的な顔をして彼女を見る。

黙って彼女を見てみると、根負けした彼女は学習机を指差した。

彼女の言う「そこ」とはあの学習机のことらしい。

「中々素敵な学習机だね」

「小学校に入学したとき、祖父が買ってくれた七つ道具のうちの一つだ」

他の六つは何だろうと思いを馳せたけど、ランドセルが入っているのは間違いない。

「で」

「で？」

「なんだか先のお母様との会話を髣髴ほっふつとさせる会話だなあ。

「君はともかく、僕は何処で勉強しようかねえ？ あ、いやいや、別に、僕は床に正座でも立ったままでも構やしないんだけどね？」

ただ、これは僕の我俣わががかもしれないんだけど、できれば椅子があってそこに座って落ち着いて勉強したいなあなんて思うんだ。椅子がなければ床に座っていても不自由のない高さのテーブルなり机をお借りしたいんだけど」

客で来ている分際で大変差し出がましい要求をしているってことは理解してるし、大変申し訳ないんだけど、これくらいのこととは言ってもいいと思うんだ。だって、僕は彼女に誘われて、彼女に連れられて、彼女の家の彼女の部屋に勉強しに来ているんだから、彼女の部屋において僕と彼女が効率的に勉強できるように整備することは彼女の責務なんじゃないかな？ いや、本当に申し訳ないと思ってるし、無礼千万なことを言っているとも自覚しているよ？ 本当だよ？ 嘘じゃないよ？ と言葉を重ねるほど嘘臭く聞こえてくる不思議。

「問題ない」

僕が散々うだうだ言つと、彼女はきつぱりと一言で返答してくれた。まず、結論から言つ。うん、それはいいことだと思うよ。でもその後、僕が促さなくてもその理由を言ってくれるとなおいいと思うな。

「大丈夫。君はそこに座つて準備をしていてくれ。私は飲み物を持つてくる」

彼女は「問題ない」の理由も根拠も答えず、それだけ言つと、部屋を出て行つてしまった。

彼女の悪いところは、考えを言葉にしないことだと思つな。あと、言葉にする前に行動しちゃうこと。告白しないでストーリーしちゃうとかね。

さて、一人残された僕はどうすべきなのかな？ ちょーつと何か行動を試してみたいもんだねえ。何故かつて、そりゃあ、僕だつて年頃の男の子だからね。女の子の部屋に一人残されちゃったらそりゃあ色々と好奇心がむくむく溢れ返つてしまふのは必然じゃあないか。好奇心猫を殺すという諺は一時的に忘却の彼方に放り投げることにしよう。ポイツとな。

さて、何から手を付けようかな？ 筆笥か？ 押入れか？ 下着か？ 布団か？ パンツか？ パンツか？ パンツか？ よし。パンツだ。パンツを探そう。

筆笥の引き出しを一つ引き出すと、ドンピシャリ。パンツの宝箱やー。ピンク、水色、白、と色とりどりな上に、水玉、縞しま、ワンポイントと模様も様々。

「ふむふむ。ほーほー。へむへむ」
などと、呟きつつ、パンツを観察し、手に取り、ぽんぽん宙に投げ、指に引つ掛けるくる回しつつ、思う。

そーいえば、僕、女の子のパンツつて家で見慣れているんだつた。というか、結構触つてもいる。お母さんに「洗濯物畳め。終わるまで飯はなしだ！」とか命令されて、唯々諾々とお母さんや姉さんや

妹のパンツとかブラとか畳んで箆笥にしまってるんだ。別に、女の子のパンツに興味があるわけでも、性的に興奮するわけでも、面白みがあるわけでもなかった。

時間の無駄だったな。と溜息混じりに思いつつ、パンツを畳んで箆笥にしまっていると、

「私のパンツがどうかしたのか？」

と、背後で彼女が言った。

君、ドアを開閉させる音くらいさせてよ。吃驚する暇もありやしない。

その彼女は僕の背後に立って、僕が畳んでいる最中だったピンクパンツ（アメリカにこんな名前のキャラいなかったっけ？）を見つめている。欲しいのかね。って彼女のだっつーの。表情はいつでもどおりの無表情で、特段怒ってはいないらしい。

「いや、何。君が普段どんなパンツを履いているのか興味があるわけじゃないから、ジーンズを脱ぐのは止めなさい」

彼女は渋々と外しかけたベルトのバックルをはめ直した。そうそう。きちんとその細っこい金具の棒を穴に突っ込むんだよ。

「ところで、君は何故、私のパンツを手をしているんだ？」

「箆笥にしまおうと思って」

「最初から箆笥に入っていたはずだが」

「パンツと飛び出てきたんだよ」

彼女は白けた冷たい目で僕を睨んだ。君、ギャグには凄い厳しいよね。特に駄洒落には容赦なく攻撃を加えるよね。

「まあ、ちよつと溢れ返る好奇心を抑えられなくてね」

「気になるなら、一つ土産に持って帰って自由に使ってもらってもいいや、結構です」

彼女のアルバム

「あれ？」

そこで僕は気付いた。

「君、飲み物持つてくるんじゃない？」

彼女は飲み物らしきものを手にはなく、学習机の上にも飲み物らしきものはなかった。空気中の水蒸気が飲み物だとか言う気じゃないよね？ 或いはこれから君が出す液体を飲めとかそーいうプレイ？ その液体つてのは、まあ、比喩的に言えば黄金水……止めよう。これは下ネタとか何とか言う前に趣味が悪い。そもそも、僕はスルト口に興味がない。というか無理。

「む。そうだった」

彼女は渋い顔で頷いた。とりあえず、小便を飲めと命令するような調子ではなかったので、僕は心底安心した。

「飲めないものはないか聞こうと思ったんだ」

「おし……飲めないものは特にないな。普通の飲み物であれば」

一瞬、危ない答えをしそうになっちゃたよ。危ない危ない。

「そうか。いや、世には牛乳アレルギーとかあるから」

彼女はそんなことを言いながら、今度こそ飲み物を取りに部屋の外へ出て行った。

僕はとりあえず彼女に言われた通り、一つしかない学習機の椅子に腰をかけた。

学習机は中々の年季を誇るはずだが、中々綺麗で、傷や落書きなんかは殆どなく、大事に使われているのが分かった。

と、こんなふうにも机を観察してもしようがない。僕は机鑑定人じゃないし、リサイクルショップの買い取り担当でもないのだからね。机から視線を外すとちょうど本棚が視界に入った。本棚には教科書だとか辞書、図鑑、アルバムっぽいものが並んでいる。なんと彼女は毎度毎度きちんと教科書や資料集の類を本棚にしまっているら

しい。僕なんか学校に置きっぱなしなのに。お陰で鞆が軽い軽い。そーいえば、僕、何で毎登下校ごとに殆ど空の鞆を持って歩いていくんだらう？

そんなことを考えながら、何気なくアルバムっぽいものを手に取った。教科書や辞書や図鑑なんてもんをわざわざ人ん家で読む意味が分からないからね。対して他人のアルバムというものは読むと中々楽しい気分になれるものさ。

アルバムの一冊をぺらぺらめくって見ると中々良いものが見れた。アルバムに収められた写真はどうやら彼女のように、今よりも結構表情豊かで、笑ったり怒ったり泣いたりしていた。髪は今より随分と短いな。眼鏡はまだない。着ている服はピンクや黄色や緑や水色といった派手な色合いものが多い。今の彼女は結構地味というかクールな服が似合いそうだけれども、この当時の彼女は明るい色の方が合いそうだな。まあ、ふあっしょんのことなんか毛ほども分からないんだけどー。とか考えながらページをめくると、
「うおうっ！」

なんと彼女があられもない姿で写真に写っていて、思わず僕は驚きの声を上げてしまった。

「裸や。全裸や」

こんな写真をアルバムに収めておくなんて、いけないんじゃないかな？ これは不味いよー。ペドフィリアとロリコンが見たら泣いて喜んじゃうよ。

しかし、ペドフィリアでもロリコンでもハンバートでもナボコフでもないし、興味もない僕は溜息を吐きながらアルバムを閉じた。誰かが「ロリコンかっ！」ってツツコミを言ってくれないと、普通に変態みたいな行動をしてしまった自分に嫌気が差したもんでね。代わりに別のアルバムを手にとってぱらぱらめくった。こっちは中学の卒業アルバムみたいだった。僕と彼女は高校で初めて出会ったので、中々興味深かった。あ。鈴木君がいる。彼も同じ中学だったんだー。

彼女は卒業アルバムの中にあつたクラス内ランキングみたいなので「カッコイイ人」と「強そうな人」のランキングで1位だった。激しく同意。個々人の作文のお題は「将来の夢」だったけれども、彼女の夢はどーやら「未定」であるらしく、何故に「未定」であり、そして、将来の夢を見つける為に自分はどうのように夢を捜し求め、かつ、その夢を見つけれられたときどのように努力し、夢を手にするかをきつちり綺麗な文字で書いていらつしやつた。真面目だなー。

ちなみに、僕が中学の卒業アルバムで書いた作文のお題は「中学を卒業して」という曖昧極まりないので、僕はしようがないから「まあ、中学を卒業したといつても、実家から通学することには変わりはなく、また、高校も現在においては殆ど義務教育化されているから、今の生活とはさして変わらないんじゃないかなー」というような内容を書いて、お母さんに「卒業アルバムでまでふざけんじゃねえ！」つて拳骨を食らつた。

「このときは、将来の夢なんか思いつかなかつたんだ」
いつの間にか背後に来ていた彼女が言った。まーた気配がなかったよ。君の将来の夢は忍者になつたのかな？

「違つ」

僕の皮肉に彼女は生真面目に答えた。眼鏡をくいくい動かして、視線を明後日の方向に向けながら呟く。

「君と一緒にいることだ」

なんか凄い恥ずかしいことを言い出したよ。この人。

「さーて、他のアルバムはどんなもんかなー？」

こーいふ恥ずい台詞はスルーするに限る。

僕は中学の卒業アルバムを本棚にしまい、代わりに一番手前にあつたアルバムを手を取つた。

その僕の腕を、彼女がぐわしつと掴んだ。

「それはダメだ」

彼女の鋭い視線に殺されそうになりつつ、ついでに腕を押し折られそうになりながらも、僕はアルバムを手放そうとはしなかった。

何故ならば、なんだか面白そうな気がしたからさ。

僕は個人的楽しみのためならば、どんな苦勞も努力も厭わないとまでは言わないけど、多少の苦勞と努力はしてもいいかなーってくらいには、個人的楽しみを追い求める主義だ。

例えば、黒板消しを教諭からいかにバレないように、かつ、ベストポジション（頭頂部）に落ちるかを検討・検証し、タコ糸と画鋲を駆使して、扉を開けて、一步を踏み出したくらいにちょうど頭頂部に命中するような仕組みを作り出して、実行するくらいにはね。ちなみに、その後、僕は生徒指導室で頭部にチョークの白い粉が微かに残っている担任教諭と一時間くらいみっちり話し合ったものさ。

その意欲とやる気を勉強なり部活なりに注げ。というのは、お母さんとお父さんと姉さんと妹と小中高の教諭方と幾人かの友人から僕への忠告。ご尤も。しかし、スルー。

「どーしてもダメなの？」

「どーしてもダメだ」

僕が頼み込むような目で訴えかけても彼女は頑として僕の腕を離そうとはせず、ぎりぎり握り締めてきた。あといくらか力を込められると、僕の腕はぽつきりいつてしまふに違いない。

「どーしてダメなの？」

「どーしてもダメだ」

いや、それ、答えになってないから。

彼女がアルバムを見せようとしない理由を問うと、彼女は渋い顔をして、僕に視線をぐっさぐっさ突き刺してきた。それでもしつこく理由を尋ねると、彼女はむっつりと呟いた。

「たぶん、怒るから」

「怒る？ 誰が？」

更に質問を重ねると、彼女は無言で僕を指差した。

この答えは僕にとって全く予想外だった。僕としては彼女が頬赤く染めながら「恥ずかしいから……」とか云々言うものとはかり思

つていたのだ。そーいう恥らう彼女をにやにやと見れば、アルバムの中身を見なくても僕は満足できただろう。

しかし、彼女の部屋にあったアルバムの中を僕が見たら僕が怒るといふのは、それこそどーしてだ？と大変疑問に思ふのは当然のことだろう。そんなことを言われると、尚更気になってしまい、これはもう引くに引けなくなつてしまった。

「僕が見たら僕が怒るアルバムつて一体どんなものなのさ？　ねえ。ちよつと。かなーり、気になるんだけどー？　悪い意味で」

「ダメだ。きつと、君は怒るか呆れるかするから、君には見せられない」

アルバムを取る手に力を入れると、彼女も負けじと力を入れ、僕の腕はみしりと音を立てた。

この勝負。負けることはできない。負けることの許されない勝負では、勝つための手段を選んでいられない。多少の卑怯臭さも必要さ。不意打ち、奇襲、騙まし討ち、裏切り、何でもありさ。それを卑怯だ何だと言ふのは負け犬の遠吠えというものだ。正義だろうが不義だろうが、勝利は勝利なのだから。

さて、そんなわけで、僕は勝利を掴むために、ちよつぱり卑怯臭い手を使った。いや、手じゃないな。唇を使つてみた。

彼女が腕の力とアルバムに力を注いでいる隙に、素早く顔を寄せ、彼女の唇に軽くキッスをした。

「ふあやうっ！」

不意打ちのキスに彼女は大変驚いたようで、聞いたことのない変な悲鳴を上げながら、飛び退いた。これこそ、我が必殺技「乙女心を弄ぶ不意打ちキッス」さ。ろくでもないな。

当然、アルバムを手に取る僕の腕から手を放してしまった。まあ、彼女が吃驚したのと同時に彼女の腕を払ったから、手を放してしまったというよりはアルバムを奪い去つたという方が正しいのかもしれないね。

さーで、障害がなくなつたところで、彼女に再び妨害される前に、

アルバムの中身を見ることしよう。

しかし、僕は中身を見なくても、中の様子がなんとなく分かってしまった。突如として透視能力に目覚めてしまったわけでも。トリックに出てくる胡散臭い異能力者紛いみたいに奇術みたいなことをしたわけでもない。

なんとアルバムのタイトルは僕の名前だったのさ。こーなれば、中身の予想など容易にできようというものさ。

念のためっていうか、確認のため、アルバムを開くと、ほーら、予想通り。

そりゃあ、僕が見たら、僕が怒るか呆れるかするだろうさ。だって、僕の写真だもん。登下校中のもの、教室での授業中のもの、学校で昼寝しているときのもの、体育のときのもの、食事中、私服で買い物中、果ては、春の球技大会や強歩遠足（ただダラダラと30kmも歩き続ける疲れる割に暇臭い行事だ）で、学校が雇ったカメラマンが撮った写真まである。自分の分だけでなく、僕の方も一緒に注文しといてくれたんだ！。とか思う馬鹿はいまい。

呆れ顔で彼女を見ると、彼女はちょっと顔を赤らめて自分の唇をふにふに触りながら呆れているところだった。

「彼が、キス、キスしてくれた」

ぼーっとした顔で呟く彼女は何だか幸せそうで、僕は怒る気なんかは全然起きなくなつて、溜息吐きながらアルバムを本棚に戻した。

並んでしよう

「おーい。生きてるー？ ライフしてるー？」

「生きてる。幸せだ」

ちよつとルー語を意識しながら問いかけると、彼女は僕をズバつと睨んで答えた。余計な答えもくつついてきたけどスルーするー。

「さて、そろそろ、課題をやるうか？」

僕は何事もなかったかのように、課題である数学プリントを学習机の上に広げた。紙一杯に広がる数式どもを見ているだけで目眩がしてくるね。

「そつだ。飲み物を持ってきた」

彼女はぼそりと呟くと、床に置いていた盆を持ち上げた。君ね。いくら置き場所がないからつて床に置くのはどーかと思うよ？

彼女が学習机の上に2つ並べたカップの中に入っていたのは赤茶色というか紅茶色の液体。香りを嗅いですぐに分かった。紅茶だ。これ。イギリス人が毎日飲んでるやつね。今はアイルランドの方が飲んでるらしいけど。

お客様の礼儀として、飲み物を出された際には、すぐに手を付けるようなことはせず、

「どうぞ」

そつそつ。出した側から「どうぞ」と言われてから「いただきませう」と頂くのが礼儀というものさ。

「どうした？ 飲まないのか？」

「ん。いや、あー。頂くよ。うん。そのうち。喉が渴いたらね」

「……………紅茶ダメなのか？」

「う。うーん」

残念ながら僕は紅茶が苦手なのだ。お茶は飲めるんだけどね。日本茶とか烏龍茶とかケチャとか。あ、一つ、飲み物じゃない。チャ

ただ、紅茶だけは苦手なんだよねえ。何で苦手なのか分からないけど、とにかく苦手。小学校の給食でいつも牛乳が占めている席に何故だか紅茶の紙パックが居座った日から苦手なんだ。紙パックの紅茶を初めて飲んで、初めて吹き出して、前の席の矢部さんに泣かれちゃったっけかな。

「取り替えてくる」

過去の穏やかな記憶を思い出してほのぼのしていると彼女がカップを持って立ち上がった。

「いや、いいよ。飲めないことはないし」

「いや、取り替える。君の好き嫌いを完全に把握できていなかった。私はまだまだ未熟だった。すまん」

彼女はかなりしょんぼりして部屋を出て行った。気にしなくてもいいのにな。てか、僕なんか彼女のこと殆ど知らないんだから気にしなくてもいいと思うんだけど。あ。そーいえば、僕、彼女の苗字は知ってるけど、下の名前知らないや。

「コーヒーは飲めるか？」

「シュガーをうんと入れてくれればね」

「……シュガースティック5本じゃ足りないか？」

「え。あ、それだけあれば十分だよ。てか、1本入れれば十分甘くなるから。ミルクはある？」

「抜かりない」

こうして僕らの飲み物をめぐる話は一段落した。勉強すんのに飲み物なんか何でもいいっちゃあいんだけどね。

「ところで、僕、普通に椅子に座っちゃってるんだけど、君はどうするの？ 立ってるの？」

僕は彼女から施されたコーヒーにシュガーをスティック1本分とミルクを入れて掻き混ぜながら尋ねた。ここは彼女の部屋だし、彼女は女の子で僕は野郎だから、普通に考えれば、僕が席を立つべきなんだろうーなーと思いつつも、もう座ってしまっている僕の腰は重

いの何のって立とうという気概なんて全く湧き出てこない。

「私も座る。ああ、君は立たなくてもいいから」

僕には立つつもりなんて殆どなかったけど、何処に座るんだろう？ と、僕は周囲を見回した。彼女が何処か別の部屋から椅子でも持ってきたのかと思っただけで、そーいった類のものは見当たらなかった。

「ちよつとそこずれてくれ」

そんなことを言いながら彼女は僕が座っている椅子に彼女自身もお尻を乗せなすった。

「君、何する気？ 椅子取りゲーム？ 音楽は？」

音楽省略の椅子取りゲームなんて前代未聞だよ。その上、人が座った椅子を奪うという最終局面をいきなり始めるなんて、そんな行為は椅子取りゲームとは呼べないよ！

「椅子取りゲームじゃない」

椅子取りゲームじゃなかった。

「この椅子は大きいから」

確かに、彼女の部屋にずんと置いてある学習机は結構な大きさと重量感があり、それと比例して椅子も中々大きかった。何とかすれば2人座れなくもないわけはないんじゃないかなー？

「いや、無理だつてば」

「無理じゃない。やる前から無理だつて決め付けるもんじゃない」
彼女はなんかちよつと道徳の授業で先生が言うような台詞を吐きながらお尻でぐいぐいと僕を椅子の端へと押しつけていく。

「大丈夫だ。幸い、君は小柄」

「ああー。はいはい。チビですいませんでしたねー。チビで。えーえー。僕はちっこいですよ。ミニですよ。スモールですよ。軽いですよ。女の子にふわつとお姫様抱っこされちゃうくらいチビで軽いですよー。へーへー。悪ーございましたねー」

「悪い。口が滑った」

「別に謝らなくてもいいよ！ 気にしてないからねっ！」

さて、そんなわけで、僕らは無事椅子に座ることができた。仲良く並んでね。

中々大きな椅子とはいえ、そんな幅が何mもあるもんじゃない。どんなに、まあ、その、僕、が、まあ、ちよつとばつかし、普通の男子高校生より、こ、小柄？ であり、彼女のお尻も決して大きいわけではなく、スリムな体つきに比例してお尻の小さな女の子なんだけど、それでも、どーしたつてどーやったつて余裕のよつちゃんで2人悠々と座れる程広いわけがない。当然、僕と彼女は狭い椅子の上で密着してしまふ。

「君君、当たつてる当たつてるよ」

「何が？」

「けつが」

彼女のぴつちりしたジーンズに包まれて輪郭がくつきりと見えるお尻は僕の真横0cmの場所にあつて、僕のお尻と密着している状態なんだ。

「けつつて言うな」

彼女はちよつと眉根を寄せて呷くと、自分の分のコーヒーカップに口を付けた。この子、完全ブラックで飲んでる。恐ろしい子ッ！

「苦くない？」

「ん？ コーヒーのことか？ いや、苦いは苦いが。それがコーヒーだろう」

僕が不思議な心持で尋ねると彼女も不思議そうな顔（例の如く表情の変化は僅かながらね）で答えた。うちの家族はミルク必須。砂糖スプーン一杯以上ないとコーヒーが飲めない一家だから、完全ブラックでコーヒーを飲む人を見るのはこれがはじめてかも。実在するとは思つてなかつたよ。嘘つて言う必要があるー？

まあ、いいや。とりあえず、勉強だ。このプリントにある（ ）の中身を埋めないと明日先生に怒られちゃうからね。でも、まあ、僕は人から怒られても説教の言葉が右耳から左耳へすーっと、或いは左耳から右耳へすーっと通り抜けて、説教後、数分で忘却の彼

方へと飛ばしてしまふ能力があるし、幼い頃からもう何十回も何百回も先生やらお母さんやらから怒られてるから、もう慣れちゃって、怒られたって全く平気だから、問題ないっちゃあないんだけどね。てか、宿題やらないことの不利益は怒られることじゃなくて、成績に響くことの方が重大なんだよね。

「さ、とにもかくにも勉強しようじゃあないか。怒られ慣れてるとはいえ、怒られるのが好きなわけじゃあないからね」

僕らはそれぞれプリントを広げ、問題を考え、回答を書き込んでいく。ちよつと狭いけど、作業にはさして支障はない。

ただね。うん。分かんないや。半分くらい分らない。数学の間寝てばかりだからな。高一の半ばでこの状況じゃあ将来が危ぶまれるよね。そろそろ、真面目に勉強しないとヤバイ気がする。でも、できないのが学生つてもんよ。

ちらつと彼女の方を見ると、おーおー。すいすい進んでいらつしやる。もう八割方回答が埋まっている。あと10分もしないうちに全問やり終えてしまふかもしれぬ。

これはいかん。負けてられん。俺も頑張つてやらにや。なーんて僕が考えるわけがない。僕にそんな負けず嫌い精神というか気概がありやあ、もっと前から勉強してるよ。徹夜でテトリスして学校で熟睡して先生に呼び出されて説教されてそこでも寝て堪忍袋の緒が切れた先生に殴られたりしないよ。

僕は勉強を放棄した。

しかし、明日、怒られる覚悟を決めたわけじゃない。もうちよつと、僕は賢いのだ。彼女が宿題をやり終えたところで、全部丸写しさせてもらえばいいわけさ。ふーふーふー。

「ん。ペンが進んでいないようだが？」

「ん。気にしないで。先を進めておくれ」

隣の奴が勉強放棄したことに気付いた彼女に僕は鷹揚に応じる。彼女はじと目で僕を睨んだ。

「私のを丸写しする気か？」

「そ。あ。だーいじよぶだーよ。ちゃーんと、何問かあえて間違えておくからねー。やつぱ、何問かは間違えてないと怪しいもんねー」
彼女は更にじとーっとした目で僕を睨む。

「それは、いかん」

「いかんざき？ 古い。」

「ちゃんと勉強しないと身に付かない」

「んー。いーよー。身に付ける気ないしねー」

「ダメだ。私が教えてやるからちゃんとやるんだ」

彼女は眼鏡をきらりと輝かせながら僕に迫ってくる。ねー。僕の腕に乳当たってるんだけどー。そこで、僕は大変なことに気付いてしまいました。宿題云々なんて全くどーでもいい瑣末な問題だよ。こっちの方が重大事だ。この、この、感触はっ！ ふやふやと柔らかく温かい感触はっ！ ずばり、ノーブラに違いない！

「君さ。ブラしてる？」

尋ねると、彼女は暫し無表情で黙り込んで、僕の目をじーっと覗き込んできた。そして、更に乳を僕の腕に当ててくる。かなり意識的に。

「君は、どう思う？」

「ど、どうって……」

「確かめて、みる？」

並んでしよう(後書き)

「しよう」という単語を見て、エロいことを考えた人は脳味噌がピクンクンになってますよ！

エロいことするのは次話です！

確認作業

「いや、結構です」

「だす?」

「……君ね。人の言葉尻のミスを掴んだりするもんじゃないよ?」

僕は説教するような気分で言った。日々、説教されてばかりだから、たまには説教じみたことを言ってみたくもなるもんさ。

「あ、すまん」

彼女は申し訳なさそうな顔で謝罪した。素直で宜しい。これでノブラ疑惑問題には触れないで済んだ。

「さーて、そーいうわけで、プリント見ーせてっ!」

「ダメだ」

拒否られた。ぶー。ケチ臭いなあ。

彼女は引き続きプリントの回答埋めに努め、僕はそれをどーにか覗き込もうと努力したけど、彼女のガードは中々堅く、突破は無理だった。努力は必ず報われるって言った幼稚園の先生はやっぱり嘘吐きだったか。あの先生の言うことはなーんか奇麗事ばかりだと思ってたんだ。

「終わった」

「じゃあ、それ、コピらせて?」

「ダメだ」

「じゃあ、なんで、僕はここまで勉強しに来たのさっ!?!? 僕がここで勉強することに何の意味があるっていつのさあっ!?!?」

「な、何でそんな怒るんだ」

彼女はいくらか引き気味に言った。精神的にも距離的にも引いている。精神的に引かれるのはちょっとキツイけど、距離的に引いてくれたのは助かった。こら、息子よ。残念がるな。

「君がうちで勉強する意味はある」

コホンと咳払いを一つして、眼鏡の位置をくいつと直してから、

彼女が言った。

「私が君に勉強を教えることができる。何でそんな嫌そうな顔をする？」

僕も嫌そうな顔を見て、彼女は見るからに不機嫌そうな顔をした。彼女が不機嫌になる理由もわからないではない。しかし、僕だって嫌いな顔をする真つ当な理由があるのさ。何だって、目の前に答えが転がっているのに、わざわざ学校の授業の二番煎じをここで受けなきゃいけないのか。学校の授業で習ったことを更にもう一度学習することで、知識は身に付くっていう考えも理解はできるけど、自慢じゃないけど僕は勉強が大嫌いなんだ。そんな僕がどうして学校で勉強して、今度は彼女の部屋でも勉強なんて状況を喜ぶものか。

それに、勉強教えてもらうなら姉さんに頼めばいいし。僕の姉さんは秀才であられるのだ。あー。でもうちの引きこもり姉さんは頭はいいけど凄い面倒くさがりだから教えてくれないかも。

「この問題の殆どは公式に当てはめればすぐに解けるものばかりだ。どうということはない」

「君にとってどうということがなくても僕にとってはどうということあるんだよ。まず、その公式が思い出せないし」

まあ、覚えてないから思い出すも何もないんだけどね。

「大丈夫だ。私がついている」

君がいるだけで努力しなくても勉強がはかどるなら、僕はもう君と結婚してもいい。とか思ったけど、言葉にはしない。言ったら彼女調子乗るからね。すぐにでも市役所に飛んでいきそうだよ。まあ、僕はまだ18歳じゃないから結婚できないんだけどね。

渋々と仕方なしに僕は彼女に勉強を教わることにした。

「それ、これが、あっち、違う。この2があっちって、これは消える。で、そっちのやつはこれと一緒にあって、あれが向こうにく」

「んー」

彼女はせつせと僕に色々と高校レベル数学的知識を教えてください

けれども、僕の脳味噌に入ってきている感覚があんまりない。教えることをお仕事にしている先生方が仰ったことさえも耳に入らないのだから、一生徒に過ぎない彼女くらいが教えてくれたところで、僕の脳味噌に知識が刻み付けられるわけがないのさ。

「全然わかんにゃい」

「それは君が分かるうとしていないからではないか？」
仰るとおり。

「もっと真面目に勉強しなさい」

彼女はめつと母親が子供を軽く叱るときのように僕の頭を軽く小突いた。軽い調子なのに結構痛い。

「しかしねえ。君。僕に真面目さを添加したら、そりゃ僕じゃないよ。別人だよ」

「まあ、確かに」

僕の言葉に彼女は即答した。自分で言っておいてなんだけど、それはそれで中々悲しいものがあるね。

「しかし、君は勉強をしにここに来たのだろう？ もそう言ったじゃあないか。君自身が」

その通りなんだよねえ。しょうがない。真面目に勉強にとりかかろう。そうしないといつまで経つてもこの部屋でぼんにやりしてないといけないからね。彼女も困るし、宿題が提出できない僕も困るし、話が進まなくて作者も困る。

するとどうだろう。渋々ながらもちよつと脳味噌に鞭くれて、彼女の言葉を理解しようとする努力すれば、全く分からないことはないのだ。ただ、脳味噌が酷く疲れる感じがする。

（ ）をとりあえず全部埋めた頃には僕の頭は何だか熱を持っているに違いない。

「ねえ。君君、ちよつと僕の頭見てくれない？ 米神辺りから煙出てない？」

「大丈夫だ。そんなことにはならん」

彼女は微かに呆れた顔で言った。馬鹿なことを言い出した子供をいなす母親みたいな調子だ。これは結構見慣れた顔だぞー。僕が「トンボの羽を綺麗に塗り取る方法」を発見したのを自慢げに披露したとき「あー。はいはい。良かったね」って応じてくれた姉さんの顔にそっくりだ。或いは「今、時計見たらちょうど11時11分11秒だ！」ってことを教えてあげたときの妹の顔。若しくは以下略「いや。なる。額に凄い熱を持っている感じがあるもの」「んー。どれ」

僕が反抗すると彼女はちょっと考えてから自分の額を僕の額に当ててきた。元から一つの椅子に並んで座っていたんだから、2人の距離は狭く、僕が反応のはの字もできないうちに僕らの額はびったんこしていた。

彼女の額は心なしかひんやりしていて、熱を持っている僕の額に当てられて中々気持ちよい。そのせいで僕は彼女の額を退けることができなくて密着状態を甘んじることになった。

「確かに熱いな」

僕の真正面大間近で、彼女は少し目を細めて呟く。しかし、近いなー。彼女の眼鏡が僕の顔にこっこっ当たるくらい近い。

まあ、それは置いといて、僕が真実を訴えていたことが証明されて、大変満足だな。

「でそー？ 僕嘔吐かな」

「ダウト」

「お、おおう」

僕の十八番の嘘が言い終わる間もなく、いきなり彼女に見破られて、思わず僕はたじろいでしまった。こんなに早くツツコミがきたのは初めてだよ。まあ、今までも例外なく嘘だつてバレてはいるんだけど。やっぱ、嘔吐きはこれを言わないと嘔吐きじゃないよね。

「熱があるのかもしれない」

彼女は渋い顔で仰った。そーいえば、今、巷ではインフルエンザが流行してるんだっただね。大丈夫。僕、流行に疎いから。

その旨、伝えると彼女は「疎いとか関係ない」って言いつつも、「君は貧弱だから、インフルエンザになったら顔が熱いところではすまないだろう。よって、たぶん、病気ではない」

と、推理して下さった。なるほどね。いい回答だ。

「ところで、君も顔が少し赤いけど？」

「当たり前だ」

顔がいくらか赤く染まっていることを指摘すると彼女は呟いた。

そして、もごもご何事か続けた。

「す、好きな人とこんな間近で密着していたら顔も赤くなる」

「ふーん。そーいうもん？」

「そーいうもん」

「そー言いながら、顔がもつと近づいてくるのは何で？」

「恋人同士は引かれ合う磁石のようなものだ」

彼女はなんかかつこいい感じのことを仰った。こんな臭い言葉には何か茶々を入りたいね。SとMだから引かれ合うんだね？ とか。そりゃあ、両方がSだったら上手くいかないもんねー。ちなみに、磁石がSとMではないことを僕は知っているからツツコミは無用だよ。

まあ、とにもかくにも、恋人同士は引かれ合う磁石のようだという比喻には同意だね。こっちが望むと望まぬと関わらずやたらと密着しちゃう羽目になるし、一度くつつくと中々離れ難いからね。

そんなわけで、僕らはいつの間にか対極の磁石のように密着していた。密着している部位は主に僕と彼女の唇と、僕の腕と彼女の乳だ。まーた、くつつけてきている。彼女のノーブラ疑惑が僕の頭の中で再登板。おあい、君、序盤で退場したくせになんか戻ってきてるのさー。とはいえ、腕にふにふにやわやわと服越しなのに妙に生々しい感触が疑惑を再熱させるのは致し方ないことさ。

とまあ、そんなことを彼女の舌を口の中で味わいながら考えた。

「ん、ちゅ、ちゅぱ、んん、あ、ん、気になる？」

存分に僕の口中を舐め回していくらか満足したらしい彼女は僕の

口から舌を抜き出して、2人の唾液でねちゃねちゃになった口の周りをペロりと舐めてから尋ねた。

「何が？」

「これ」

言いながら更に乳を僕の腕に当ててくる。気になるか気にならないかで言うならば、そりゃあ、当然、断固として気になるに決まっている。これが気にならない男がいたとしたらそいつは腕の神経がやられているに違いない。神経科に担ぎ込むことを勧めよう。

「別に」

でも、僕は気にならない風を装う。だって、気なったら確かめなといけないじゃーん。

「何で？」

「何でもかんでもねー。僕はここに勉強しに来たわけであって、君がブラしてるかしてないかを確認するために来たわけじゃないんだな。あと、下に君のお母様がいるっていう状況で君は何をする気なのさ？」

「大丈夫」

「君ね。君、よくその言葉を使うけど、毎度毎度、何が大丈夫なのか全く僕には分からないんだけどー」

そんなふうには反抗している間に、おや、不思議、僕の手は彼女のシャツに下から潜り込んでるじゃあーりませんか。おおう、腕よ。いつから君は僕の脳味噌の指示なしで勝手に動くようになったんかね？

と、思ったら、彼女の手が僕の腕を勝手に引っ張ってた。

「こらこら、君ね。勝手に、ふやあ」

「んん、あん」

2人はほぼ同時に思わず喘ぎ声を出してしまう。

僕の右手の平には熱くてしっとりとしてふやふやでやわやわでちよつと手の平にすっぽりと入るものがぎゅっつと密着していて、何で条件反射的にむぎゅっつと握ってみたりしてしまった。

「あ！ んん」

「痛かった？」

彼女は首を横に振る。

「んん。大丈夫」

そして、真っ赤に染まった顔を近付け、ぼーっとして霞がかった瞳で僕をじいっと見つめて、耳元で囁く。

「もっと強くして」

確認作業（後書き）

本年最初の更新でございます。

初っ端からちとエロくなりました。しかし、私はこれくらいのエロでは満足いたしません！

次話をもっとエロくしたいと考えております。

まあ、そんな話であり作者ではございますが、本年もお付き合い頂けましたら幸いです。

ラブる

今、僕の手の中には大変なものがある。核ミサイルの発射スイッチとか宝くじの一等当選くじとかオーパーツとか、それほど大変なものじゃあないけど、僕にとつちやあ凄く大変なものだ。まあ、殆どの人間にとつちやあ大変なものだと思ふな。

ずばり、それは何かっていうと、僕の右手にあるのは、彼女の右乳だ。何でか知らないけれどもいつの間にもやら僕の手は彼女の着ているティーシャツの下つかわからティーシャツの中に潜り込んでいて、僕の手は彼女の右乳をすっぽりと包んでいた。

彼女の、乳、うーん、まあ、つまり、おっぱいは、それほど大きいわけでも、小さいわけでもなく、勿論、豊かとも言い難く、貧しいわけでも、哀れなわけでもなくらいのボリュームで、揉むには中々ちょうどよいサイズだった。人間は元から温かいもんだから、当然、おっぱいも熱を持っていて、しかし、その温度は温かいを通り超して、かなり熱かった。手触りはしっとりしていてすべすべで、そして、何かやったらとふやふやほわっほわつと柔らかかった。他の部分と同じお肉でできているっていうのに、何だつてこんなに柔らかいものなんだろうねえ。不思議なもんだよ。

「あ、んん、んあ、ああ」

殆ど初めて女性のお乳を揉むという稀有な体験をしていると（赤ちゃんの頃は揉むどころかむしゃぶりついて吸っていたのだから）ど、そのときの記憶はない。あつても嫌だけどね。お母さんのお乳だし）、揉まれている側の彼女、体をびくびく動かしながら、切れ切りに喘ぎ声を漏らしていた。

この喘ぎ声はまだ僕の性的好奇心を高め、興奮させ、息子をほ、起立させるのだ。これじゃあ、もう止まれないー止まらないー。僕だって、正常な性機能を持ち、性的感心の強い、思春期男子高校生（まだ未経験）だからね。

とはいえ、止まらないのは僕だけじゃあない。というか、僕より彼女の方が圧倒的に積極的だ。

僕が彼女の乳を弄くっている間に、彼女は僕の太ももをズボン越しに摩ったり、頭を撫でたり、耳に息を吹きかけたり、耳たぶをくわえて甘噛みしたり、首筋を舐めたりして、僕をぞくぞくさせていた。

「あ、んー、んんー、あうー」

ここで読者諸兄には残念なお知らせ。この喘ぎ声は彼女のじゃない。僕の口から思わず出ちゃった声だ。がつくりするんじゃない。怒るんじゃない。だって、しょうがないじゃない。男だって、敏感なところを刺激されちゃうとそりゃあ喘ぎ声の一つもぼろっと出ちゃうことだってあるさ。

「君の喘ぎ声かわいい」

僕の耳元で彼女は囁き、にんまりと嬉しそうに微笑んだ。何だ。

可愛く笑えるじゃん。何で、いつもむっつり無表情なんかねー？

まあ、クールに無表情な彼女も素敵なんだけどね。と、彼氏一日目は惚気てみたり。

彼女はおもむろに椅子から立ち上がると、なおも椅子に座り続けている僕の上に腰を下ろした。この姿勢は経験がある。昼に保健室でこんな格好をやっていたような気がする。しかし、保健室でいやいやべたべたしていたときから、まだ半日しか経ってないのに、なんか物凄い時間が経過しているような気がするな。時間の進む早さがすげー遅いよね。何故だろう？ 何故かしら？

さて、そんなことはさておく。原因を追究していくと、次元の壁を超えないといけないから、これは原因解明不可能といっても過言ではないからね。

「ふふふ」

僕の上に跨った彼女が密やかな笑い声を漏らした。彼女が声を出して笑うとは珍しい。まあ、殆ど半日くらいしか彼女との交流経験はないんだけども。

「ん？ どれしたの？」

「嬉しいんだ。幸せなんだ」

彼女は眼鏡の奥の瞳を微かに潤ませながら、囁くように言った。

「何でさね」

「そんなこと、言わなくても分かるだろう？」

理由を問うと彼女は微かに顔を赤らめてぼそぼそと呟いた。こんなふうに照れられると、ますますその理由を言って欲しくなるねえ。僕って微Sなんだと思う。たまに微M気質も出るような気がするけども。

「態度で分かっていうのは男で、言葉にして欲しいのは女じゃなかったっけ？」

巷でよく言われることを言葉にしてみる。男はあれだよ。背中で語るもんなんだよ。ちよつと古いかな。最近の若い野郎連中はぺらぺらぺら軽い言葉をデロデロ垂れ流す輩が多いからねえ。なんて頑固なおっさんみたいないなことを考えてみたり。

「言葉にして欲しいけど、言葉にするのは恥ずかしい」

確かに、その通りだねえ。仰るとおり。

でも、それで勘弁してあげるのはモツタイナイ。もっと意地悪したくなっちゃうなあ。

「思ったことをはっきり言ってくれる子が僕は好きだなー」

独り言気味に呟くと、彼女は微かに赤いながらもいつもどおりの無表情顔で僕を見つめる。そして、口を開く。

「君と一緒にいるから。愛している君とこんなふうに一緒にいられることが嬉しくて、幸せで、しょうがないんだ」

おー。言わせといてなんだけど、なんつーか、にやにやしちゃうと同時に言われた方もものすごく恥ずかしいなー。

「君は？」

「へ？」

「君は、どうだ？ 私と一緒にいる今は、幸せか？」

彼女は僕の顔を両手で優しく包み、顔を近づけながら問いかけて

きた。なんだって、そんなに顔が近いのかなー？ 吐息が熱い。

「ん、んー。どうかなー？」

「ずるいぞ。私に言わせておいて」

彼女の鋭い眼光が僕の眼球にぐっさぐっさ刺さりまくる。彼女っ
てば真面目な顔するとやつたらと目が恐いんだよねえ。視線という
非物理的なものが刺さっているはずなのに何故か眼球表面が痛みを
感じているような気がしてきたよ。

「えーっと、まあ、そーねー。まあ、うん」

曖昧なことを言ってみるも、彼女はじとーっとした目で僕を睨み
続ける。しょうがないので、彼女の求めに応えてあげることにする。

「まあ、僕も君と一緒にいるのは心地よいよ」

「なんか軽い」

「僕の言葉は全部軽いのだー」

そりゃあもうヘリウム並みさ。もつと頑張れば水素になれるね。

ただ、水素は爆発しちゃうから危ない。うん、これ、全然関係ねー。

「でも、それでも、嬉しい」

彼女は微笑みながら顔を寄せ、再び、僕らは唇を重ねた。勿論、

その後、舌を入れ合い、唾液を混ぜ合い、といったディーブなキッ
スになってしまう。今日初めてキスをしたっていうにこんなエロい
キス覚えちゃうなんて、僕ってば全く駄目人間だなー。

キッスをしていると、まあ、なんだか、不思議不思議。未だもっ
てしつこく彼女の乳に当てていた僕の手が、指がわきわきと動き出
す。いや、これは僕の意味ではないんだよ？ でもね。なんか、脳
味噌の奥底の本能みたいのが勝手に指に動けって指令を出している
んだよ。うん。たぶんね。

というわけでキスしながら彼女のお胸を弄もよほることにする。

暫く弄っていると、指先にいくらか固いものが触れた。これ、何
だろなーなんて惚けたことを言う奴なんているわけがない。女体に
触れたことがない奴でも、お胸の真ん中にあつて、弄っていると固
くなっているものの答えなんて分かるに決まってるでしょう。でも、

それを言葉にしまうと、またぞろ宜しくないことになるかもしれないので、固有名詞は避けてみる。

まあ、ともかく、それを指先で引つ搔いたり摘んだり弄くったりしてみると、彼女は面白いくらいに反応して、唇を離して、明後日の方を向いた。

ところで、明後日の方向ってどっち？ てか、この言い得て妙なこの表現は誰が考えたのかしら？ しかし、こんな話題はどーでもいいどころか邪魔なだけだ。読者諸兄は「んなこと考えてねーで、彼女の描写をしる！」とか「もつとやれ！」などと考えていらつしやることだろう。若しくは「大変けしからん駄文だ。公序良俗に反する。通報しよう」とか。前者の考えは大変歓迎的であり「同志よ！」と抱き合いたい気分だけれども、後者だけは勘弁して下さい。本当にマジでお願いします。

さて、そんなわけで、彼女は恥ずかしさからか何かからか知らないけど、顔を背けていた。するつてーと、なんとも白く綺麗な喉が僕の目の前に曝け出されているじゃありませんか。

その白さたるや夜のうちに平原に降り積もった処女雪の如く、或いはクリーニングしたてで糊のきいたパリツとしたワイシャツの如く。後者の比喻が変？ でも、現実的でイメージし易いでしょう？ まあ、本当にそんなに白かったら健康な人間の肌じゃあないから、僕はこんなふうでれでれしている場合じゃなくて、急いで救急車を呼ばないといけないから、実際の彼女の喉の色はもつと肌色してる。

そんな蛇足は置いといて、またぞろ僕の脳味噌の奥底にある本能みたいなやつは指を勝手にわきわきさせるだけでは飽き足らず、僕の口までをも支配下に置いた。具体的に描写すると、舌でべろつと彼女の喉を舐め上げてみた。

「ひゃうつ！？ あ、な、何して！？」

彼女は珍しく可愛らしい嬌声を上げて、僕は、違う違う、僕の脳味噌の奥底の本能みたいなのはそれにだいたいぶ気をよくして、なおも彼

女の首筋を舐め舐めする。

「く、んん、こちよばしい」

「いいからいいから」

おー。脳味噌の奥底の本能みたいなのは、ついに僕を喋らせるほどに支配領域を広げているねえ。と、あくまで、脳味噌の奥底にある本能みたいなやつのをせいにしてみるけど、そんなことしても何の意味もないことは僕が一番よく理解してる。

ともかくにも、彼女の喉は基本的にしょっぱくて、舌触りは大変滑らかですすべで、とても舌に心地よく、なんとなく舐め始めてしまった僕の変態的行為は止めるに止められなくなってしまった。顎まで舐める範囲を広げたり、軽く喉を甘噛みしたり、舌を耳にまで伸ばして、耳たぶを口に含んだり、顔の下半分を満遍なく舐めていく。ちなみに、指は休まず動いているさ。当然。勿論。

「く、う、んん、んあ、ね、ねえ」

「んー？」

僕の頭を抱え込むように抱き締めながら、堪えた喘ぎ声を上げていた彼女が何か言いたげだったので、僕は彼女の耳たぶをはむはむする作業を少し和らげる。

「し、して」

「仕手？」

仕手っていうのは「行う人」っていう意味で、相談の仕手とか仕手相場とかいうふうにいるんだって。よう分からんけど。

まあ、当然、こんな場面で彼女が仕手とか言うわけがない。

耳たぶから口を離して、一旦、顔と顔の間の距離を開く。

彼女はいつの間にか驚くほど真っ赤に染まっていた顔で、涙で潤んだ、ぼんやりと霞がかかった瞳で、僕を見つめながら、熱い吐息と共に囁いた。

「君に、して欲しい」

さあー、どーする僕。

ラブる（後書き）

さあ、どーする私。

先の展開はまだ思案中です。

どーにかこーにか危ないラインを超えないように終いにさせます。
あと少しで完結する予定です。

自然が僕を呼んでいる

彼女の要望に僕は暫し思い悩んだ。

僕も彼女の彼氏ともなれば（とはいえ、まだなつてから数時間しか経ってないけど）、恋人の望みは大抵叶えてあげたいし、叶えるつもりではある。ただ、それが実際、できるかどうかは要相談だ。例えば、仏の御石の鉢だの蓬萊の玉の枝だの火鼠の皮衣、竜の首の珠、燕の子安貝を持って来いとか言われたらば、代わりに普通の鉢とお正月のお飾りのピンクと白の玉がついている枝となんかの動物の毛皮、数珠、シジミの貝殻で我慢してもらわないといけない。或いは死んだら世界の中心で遺灰をばら撒いてと言われても、僕はきちんと墓地、埋葬等に関する法律どおりに遺灰を処理すると思うな。若しくは、甲子園に連れて行ってと言われたら、一緒にテレビで甲子園野球を見ることで我慢してもらわないといけない。

つまり、僕は彼女の求めをはなつから無碍に、全く意に介しないというつもりではないのだ。そのお願いが僕にとって実現可能であるかどうかとかその他諸々の要件を吟味して、その実現が可能であるか否か返答しているのさ。実に真つ当で生真面目じゃあないか。僕はできもしない約束をほいほいするような軽い輩じゃないのさ。

で、今回の先方の要求は「して」であり、言い換えるに「君にして欲しい」とのことだった。

この言葉だけじゃあ、一体全体、彼女は何をして欲しいのか全く分からない。僕は、まあまあ国語の成績は悪いほうじゃあないけど、こんな主語の欠落した要望じゃあ、叶えることはできないなあ。などと言つて誤魔化してみる。

そう言つと、僕の膝つつか腰の上に座っている彼女は嫌そうな顔をした。

「言わなくても分かるだろう?」

「うーん。僕は生憎と頭が良くないからねえ」

彼女は渋い顔で暫くの間、黙り込む。

それから、顔を上げ、きつと僕を睨みつけた。いつものことながら、彼女の視線には殺人光線が含まれているような気がしてならない。心臓がびくびくするもの。

「ん、わ、私と、して欲しいんだ。セックスを」

「何で？」

「な、何でて……」

僕の即問に彼女はちよつと驚いた顔をしたけど、すぐに渋めの無表情になった。

「愛する者同士が愛の営みとしてセックスを為すのは、当たり前のことじゃあないか」

まあ、確かにセックスは愛し合うカップルが通常することが当然の行為ではあるね。

「でも、それを、今、ここで、しなくても」

「でも、私は、それを、今、ここで、したい」

彼女は相変わらずの殺人的視線で僕の眼球を攻撃しながら、腰をぐいぐいと動かして、僕の股間を刺激し、未だに彼女のおっぱいの上にある僕の手をその上から押し付けた。

「それに、もう、こーいうことをしているんだから、次は、セックスをするのが当然の順序だろう」

彼女の解釈では、今のこの行為は、股間を擦り付けあったり、デーパーキスしたり、胸を揉んだりするのは、前戯であるという見解であるらしい。

しかし、僕は、あえて、それを否定してみる。

「いや、これはスキンシップですよ」

ただ、ちよつとだけしつかりと肌を撫で合っただけだから、こんなはスキンシップとして処理しても構わない範囲じゃあないかと、僕は主張。

よって、僕はまとめとしてこのように返答した。

「というわけで、無理だね」

彼女はかなり不満そうな顔で僕を睨む。腰をもぞもぞさせて呟く。

「我慢できない」

「我慢しなさい」

「我慢できなくなるまで感じさせたのは君だ」

うーん、先にしかけてきたのは、彼女のような気がするんだけど。それに胸を揉んだのは僕だけど、シャツの中に僕の手を突っ込んだのは彼女だし、僕の上に乗ったのも彼女だし、僕の耳とか首を舐めてたのも彼女だし。

でも、まあ、思い返してみれば、僕も色々したような気もしないでもないな。キスに応えたし、胸揉んだし、首筋とか舐めたり噛んだりむはむしたり……。こりゃ、スキンシップじゃねえな。こんなスキンシップ、友達とか家族にしてたら、そいつぁー、確実に危ない人だよ。

そんなわけで、僕は己の行動が前戯であったことを認識し、僕は愕然とした。いや、嘘。ちょっと困っただけ。逃げ道がなくなっちゃったからね。じゃあ、僕は、これから彼女としないといけないの？ いや、それはダメでしょう。まだ早い。まだ早いから。僕は世間で云われるような十代の乱れた性とかいうような社会的問題の範疇の中に入るわけにはいかないからね。今までの行為が乱れた性のうちに入っているかどうかという疑問は放置しよう。

と、ここまで思考を巡らせている間に、彼女は僕の制服の上着を脱がせ、ワイシャツのボタンを開き、ベルトを外し、スラックスのチャックまで下ろしている。やばい。このままじゃマジで犯される。「ちょ、ちょっと待って」

「やだ」

僕の待機要請に彼女は即NO。参った僕は何とかこの場を逃れる理由を考えて、出任せのままに口を動かした。

「え、えーっと、うーんっと、あ、うん、トイレに行きたい」

「……は？」

僕の出任せの理由に彼女は呆れ顔＋呆れ言葉。

トイレに行きたいだなんて、仮病と並ぶほどに使い古された逃げ口上だ。今、この状況で、トイレに行きたいだなんて言って「はい、そうですか」などと納得するほど彼女は間抜けではないらしい。渋い顔をして僕を睨む。もつとマシな嘘を吐けよでも言いたげだ。彼女の意見に僕も同意。でも、一旦、言ってしまった台詞を口の中に戻すことはできない。やっぱ、さっきのなし。とは言えないのだ。ここは「トイレ」をこり押しするしかない。

「トイレに行かせて下さい」

「何で？」

「何でって、そりゃあ、トイレしたいからだよ。排泄行為をしたいの。生理現象を我慢できないの。膀胱の中身を空にしたいの。便座を使用したいの。体内の不要な水分を外に出したいの。お漏らしを避けたいの。便所に用を足しに行きたいの。厠に行きたいの。化粧室に行きたいの。お手洗いにいきたいの。ご不浄に行きたいの。はばかりに行かないといけないの。ウォシュレットに入りたいの。自然が僕を呼んでいるの。お花畑でお花を摘みにいきたいの。雉を撃ちに……」

「分かった。もういい」

彼女が溜息混じりに呟き、僕は沈黙する。勝った。死んだオウム作戦成功。死んだオウムの意味が分からない人は1970年あたりでBBCを見ていた人に聞こう。或いはネットで調べよう。

「じゃあ、行こうか」

彼女は僕の上から立ち上がった。彼女が離れると同時に僕の股間に与えられていた心地よい刺激と重み、右手が味わっていた胸の柔らかさが離れてしまった。凄い後悔の念が心の奥底から湧き出てきて、一瞬、悲しい顔をしそうになったけど、我慢だ。我慢。平静を装うんだ。

「行くって何処へ？」

「何処って、君、さっき、散々言ってたじゃあないか」

そーだ。そーだった。僕はトイレに行きたいって散々主張したんだ。ただの口から出任せだったから、もうはや忘れかけてたよ。しかし、あれだけ言っていた手前、今更、それほど出るもんはないなんてことは言えないね。それに、出すものだったら、排泄物以外のものなら出そうない気がする。というか出しておかないと、収まりが……。ずばり、それが何かなんてことはここで単語として出すことは大変憚られる。比喻にもし難い。大変曖昧な表現になってしまったけれども、それが何かなんてこたあ男なら言わんでもわかるかと僕は信じている。というわけで察して頂きたい。

「うん、じゃあ、行こうかな。トイレは下だよな？」

「案内する」

そう言っただけ彼女は先に立って歩き出し、僕はいくらか前屈みになりながら、そろそろと彼女の後を追う。

「……その歩き方は何？」

「いや、何でもない。気にしないで」

トイレは階段を降りてすぐの場所にあった。

「ん。ここね。ありがと」

僕はトイレまで案内してくれた彼女に礼を言って、トイレのドアを開けて、中に入った。うーん、フローラルな香り。

さて、トイレで軽く抜いて、すっきりしてから、何事もなかったかのように彼女の部屋に戻って、彼女と少し会話を楽しんでから、夕飯（親子丼）をご馳走になって、帰ろうじゃないか。

僕は頭の中で軽くこれからの予定を組み立てながら、ドアを閉めかけたところ、いきなり彼女が僕を押し退けてトイレに入ってきて、僕は大変吃驚した。

「な、何？ 君もしたいの？ なら、お先にどうぞ。僕、待ってるから」

僕がこんな間抜けたことを言っている間に、彼女は後ろでトイレのドアを閉め、施錠した。これで密室空間のいっちょあがりだ。

狭いトイレに僕と彼女の2人きりさ。こりゃ謀られた。

彼女は僕の顔を寄せ、体を押し付け僕の股間をその細長い指先で撫で上げながら、艶美に微笑んで、僕の耳元で囁いた。

「君も我慢できないんだろっ？　ここが」

やばい。犯される。

事後

じゃー。

水音を背に僕と彼女は揃ってトイレから出た。

僕の頭の中は真つ白で、ほとんど呆然としていた。何故、そのような茫然自失状態に陥ったかという理由というか、トイレ内であった出来事に関しては黙秘権を行使する。この黙秘権の行使には多くの読者諸兄が激昂及び落胆なさるであろうことは勿論理解できる。

しかしながら、よくよく冷静に、理性に立ち返って、よくよく考えてもみて欲しい。はつきり言って、現状、前話までの描写で殆どぎりぎりじゃあないか。ぎりぎりセーフだと個人的には信じているが、もうこれ以上は無理に違いない。これ以上いくならば18歳未満の読者を制限しなければならぬ事態になりかねない。よって、自粛
「はあ……ああ……なんてことだ……」

「君は何だつてそんなふうになんなんだ」

僕がトイレの前で溜息吐き吐き、項垂れていると、彼女は大変不満そうな様子で仰った。

まあ、普通はね。そりゃあ、思春期の青少年にとってエロいことつてのは素敵な幸運でしかなく、大歓迎して然るべきイベントだろうね。思春期青少年の一員たる僕だつて、そりゃあ、エロは基本的に歓迎すべきことだ。だけどね。だけどさあ。

「トイレに押し込めて、こう、なんつーか、男のアレを、あー、まあ、そーいうことをするのは、なんていうか、若い娘さんのすることじゃあないと思うよ。うん。しかも、お母さんがいる家の中のトイレで」

「私は自室のベッドの上でしたかつたんだが、君が嫌がるから……」
彼女は不満げに呟く。え、何、僕が悪いの？ いや、まあ、確かに、エロいことするんなら便所でよいかはベッドの上の方が数段良いに決まっている。厠で秘め事をするのは、倦怠期になったときと

か、普通のエッチじゃ満足できなくなつたときとかさ。

それは分かっているものの、ベッドの上とか彼女の部屋だったらば、きつと、最後の最後までいってしまふだろうから離れて正解だつたとは思ふな。付き合つた初日からそんなこととしてしまふのは典型的なる「それ、なんてエロゲ？」展開であり、それは避けるべきだと僕は思ふんだよ。だからといって、会つて初日でキスして、彼女の部屋に行つて、彼女の家のトイレであーうー、まあ、エロいこととしてる時点で「これ、なんてエロゲ？」展開なんだけどね。

「そもそも、なんだつて、そんな性急にエロいことをしようとするかなあ」

「愛する者同士であれば当然の行為だ」

「もうちよつと恥じらいつていうか躊躇のようなものを見せてよ。君つてば、いきなり全力疾走なんだもの。あのね？ いいかい？

男つてのは迫られると醒めて、逃げられると燃える生物なんだよ？」

僕は軽く説教する気分彼女に、男とは如何なる生物か。ということについて講義する。トイレ前で。

「しかし」

講義の後、彼女は渋い顔で反論した。

「世の男が一般的にそうであつても。君は、たぶん、違う」

「何でさ。僕だつて、普通に男だよ」

「君は、怠惰だから」

僕は彼女にエロを求めることも面倒くさいくらい怠け者だと思われているらしい。いくらなんでも、そこまで僕は怠け者じゃあないよ。一人前にエロを追い求める程度には男やつてますよ。

「そもそも、君は逃げる者追わず、来る者拒まずな感じがする」

「そう？」

「そう」

そーなのかなー？僕は首を傾げる。自分の性格なんてよくよく考えたことないし、考えたところで意味なんかないじゃないかな。自分を見るつてのは中々難しいことだからね。自分を客観的に考察

するなんて芸当が僕にできるとは思えないな。僕、自分に甘いし。

と、こんなふうにしようもないことを延々と考えるのは嫌いじゃないけど、そろそろ、次の行動に移ろうかな。人間、時と場所と場合を考えるべきだからね。つまり、何が言いたいかっていうと、僕、さつき、トイレから出てきて、まだ手洗ってないんだわ。排泄行動をしたわけじゃあないけど、やっぱ、トイレに入ったら、手を洗わないと気分的にね。それに、今、僕の指先は少々濡れている。ぬめぬめしてる。ねちよねちよしてる。何の液体が何でついてているかは黙秘。

「とりあえず、手を洗おうか。君は口をすすぐといいよ」

「何故だ？ 全部飲ん」

「それ以上、言わないの。何故も何もないから、さっさとうがいしなさいよ」

僕らはトイレを出た場所にある洗面所の洗面台で仲良く手を洗って、彼女は口をゆすいだ。

「普通、水場つてのは一箇所に集まってるもんだけど、この家はお風呂は離れているんだねえ」

ふと思つたことを呟いてみる。すこぶるドーでも宜しい話だ。水つて何で透明なんだろーねー？つて電波なことを言ってもよかつたし、ここで手を洗うだけの水で、アフリカでは何人の貧しい子供が一日を過ごせるだろうか。なんていう政治的或いは偽善的なことでもよかつただけ。なんとなく家庭的或いは主婦的なことを言ってみたい気分だったんだ。

果たして、この話題が彼女の家に行つてする話題かどうかは不明だ。よつて、良い子は真似しないように。誰もしねえつつの。

「洗面所の横に風呂はある」

僕は横を見る。壁だ。

「ないよ？」

「その壁の向こうだ」

「ああ、そうか。なるほどね。じゃ、台所は？」

「風呂の隣だ」

「へえ、ちよつと変則的だね」

「古い家を増改築した家だから」

「ああ、なるへそね」

と、ここで僕はちと困ったことに気付く。

よく考えよう。トイレ出たら洗面所。その隣が風呂場。じゃあ、

トイレの隣は？

「トイレの隣って台所？」

「違う。脱衣場だ。洗濯機もそこにある」

「あ、そう」

僕は密かに安堵の息を漏らす。

台所では今頃、彼女のお母様が親子丼を作っていていらっしやるはずなのだ。親子丼を作るのに、大層な音が発生するはずはないから、壁の向こうで、なんていうか、こつ、あー、色々と言がしたら、聞こえてしまうんじゃないかと僕は危惧したのだ。外壁じゃあなくて部屋と部屋を仕切るだけの壁がそれほど防音性に優れているとは思えないからね。

しかしながら、トイレの壁の向こうは脱衣場であるらしいから、これならば安心だ。いくらなんでも脱衣場で料理をする人はいないだろうからね。

「まあ、そりゃそうだよな。いくらなんでもトイレと台所を隣り合わせにや作らないよね」

僕の言葉に彼女は黙ってこくと頷いた。

「トイレで水流す音が台所で思いつきり聞こえるのもアレだし」
微かにとか、遠くに、とかで聞こえるんならまだしも、飯食つてるときに背後から、どばじゃーっとうんこ流す音聞こえたら微妙な気分になるもんね。アレ、さっきの単語って伏字した方が良かったかな？

彼女は今度は軽く眉根を寄せて言った。

「脱衣場と台所の壁は薄いし、ドアがないから、音は結構聞こえる」

「へえ、そりゃアレだねえ」

僕はのんびりと言ってから、危惧が全く回避されていないことに気がついた。

「アレ？　じゃあ、トイレから台所に話しかけたりすることって可能？」

僕の問いに彼女は暫し考え込んでから答えた。

「……大きな声ならできると思う」

あらまあ。

「あら、勉強は終わり？」

ダイニングキッチンに入ると、エプロン姿のお母様がお玉片手に声をかけてきた。

「終わった」

彼女は無愛想に答え、僕は愛想笑い。

「ちようどよかったわー。ちようど、ご飯ができたところだったから」

お母様はにこにこ微笑みながら、僕に席を勧めた。そうだったね。僕は彼女の家で夕飯の親子丼をご馳走になるんだった。

僕は言われるがままに席に着いたけど、彼女は黙って食器棚から井と味噌汁茶碗を取り出し始めた。君、もうちつと、愛想つてもんはないのかい？　「お母さん、食事の用意手伝うね」とか言えば、もつと台詞量が増えるだろうに。何も言わずに黙って思ったとおりに行動しちゃうし、その上、その行動が突飛というか行き過ぎるのが彼女の欠点だと思いつつ、僕は彼女の動きを眺めながら、ぼんやりしていた。なんとなく、僕も手伝った方がいいよなーとか思いながらも面倒くさいので不動。行動した方がいいと分かっているながら、面倒くさがって行動しないのが僕の短所だね。

「うちの娘はどうだった？」

彼女が井にご飯を突っ込んでいる間に、いつの間にやらお母様が僕の背後に立っていて、そんなことを聞いてきた。どうだったって

何だ？

「ええ、お陰様で、僕は明日怒られないで済みそうです」

彼女のお陰で僕は宿題を完成させて提出できそうだからね。僕が宿題を自分の頭で解いて自分の手で書いて提出するなんてことは小学校の漢字書き取りテスト以来だよ。中高では誰かのを写すか宿題提出を諦めるかが僕にとっての宿題処理二大選択肢だったからね。改めて思うけど、僕って奴はろくでもない奴だな。

「違う違う」

お母様はにこにこ笑いながら手を振った。

そして、目を細め、顔を寄せてくる。物凄く嫌な予感がする。

「うちの娘この体はどうだったって聞いているの」

「……………」

耳元で囁かれたその問いかけに答える術を僕は持たない。ただ変な顔をして黙りこくってることしかできない。

「ほほほほ。冗談よ」

僕の顔が余程面白かったのかお母様は高らかに笑うと僕の肩をばしばし叩いてきた。なんか、この人、言動がおっさんみたいだなあ。

「それで？」

「それで、とは？」

それで何を聞かれるのか僕にはとんと分からないよ。

「そっちの脱衣場の壁の向こうから色々と聞こえてきたけどー」

やっぱ聞こえてたらしい。超恥ずかしいわ。

「で？ どこまでいったの？ てか、やったの？」

すいませーん。セクハラ相談の受付窓口は何処ですかー？

鬼が大爆笑

僕はさほど親子丼が好きじゃあない。

この親子丼というのは、母と娘と同時に、あー、なんつーか、エロいことをするという反道徳的にして非社会的で、中世ならば絞首刑若しくはお慈悲をもって斬首刑に処せられかねない行為のことじやあなくて、普通に鶏肉と卵を出し汁で煮詰めてご飯の上のにせた丼料理のことだ。まあ、普通、日常会話で親子丼といって前者の意味と取る人は殆どいないと思うけど。平素から普通の日常会話から前者の意味を連想してしまう人はちょっと常識について学ぶべきか己の言動に気をつけることを助言しておこうか。

さて、料理の親子丼についてだけど、僕は好き嫌いが多い性質で、嫌いな食材がたつくさんある。青魚とか豚肉とか脂身とか生野菜とか豆腐とかマヨネーズとかね。そーいった嫌い食材の中の一つが卵だ。親子丼には当然卵がふんだんに使われている。卵がなけりゃ親子丼になっちまうからね。なんか薩摩藩士みたいで嫌だ。僕、佐幕派なんだよ。小栗さん万歳。言っていることが意味不明？ いつものことでしょう。

とはいえ、これだけ親子丼が好きじゃないとか散々言っておきながら、じゃあ、食えないのか。と言えば、それは否なのだ。というのも、うちのお母さんはとても躰に厳しいお方なので、病気でもないのでにご飯を残そうものならばフライパンで頭を殴打されかねないというか現に何度かぶたれた覚えがある。そーいった教育の成果として、僕は嫌いな食べ物でも全て我慢して食べることができるのさ。揚げ物でも青魚でも卵でもマヨネーズでも黙々と傍目からは普通に食べれるのさ。これこそが躰つてもんだね。ただ、鞭オンリー教育だったのは辛かったな。たまには飴が欲しかったもんだよ。

と、そんなことをつらつら考えていると隣に座った彼女がじいつと僕を見つめているのに気付いた。

「どうした？ 食べないのか？」

「ん。いや、ちょっとぼーっとしてただけさ。食べるとも。食べるともさ。いただきマンモス」

「……………」

だから、そーいう醒めた目で僕を睨まないで欲しいな。この挨拶は我が家に代々伝わる由緒ある挨拶なんだからね。僕しか使ってるの聞いたことないけど。

まあ、何はともあれさておいて、こんなどーでもいいことを考えている暇があったらさっさと飯を食えってな話だよ。食事ってのは大抵冷めると美味しさが減少するものさ。

もぐもぐ食っていると、彼女とお母様がじつと僕を見つめていることに気付く。何事においてもそうだけど、人に見つめられながら飯を食うのってのは何かこう落ち着かないものだね。今度、誰かにしようつと。

「で、何ですかね？ そんなに人が食事をする姿が珍しいかな？」

「君は食事をする姿もいい」

彼女は真顔で変態的なことを言い出した。引いてもいいですか？で、お母様の方は何で僕を見つめているのかな？ あなたまで僕の食べる姿を見ていたいとか寝言ほざくわけじゃあないですよ。私は純粹に、私の作った親子丼が君のお口に合うかしらと心配してるだけよん」

アラフォー女性が語尾に「よん」とか本気でやめて欲しいという僕の切実な思いは置いといて。

まあ、確かに自分が作って出した料理が客人の口に合うかどうかってのは料理した人間からすればいくらか気になることではあるだろうね。

この言葉に対して僕は少し返答に窮した。先にも述べたとおり、僕は卵が苦手であるから卵がふんだんに含まれる親子丼を食すことは少しばかり苦だ。とはいえ、出汁の味とか鶏肉は美味しいので結構卵の味は相殺されているから「嫌い」に分類するほど苦手な料理

ではなくなっている。ともなれば「美味しい」と答えても構いやしないような気もするけど、やっぱり卵は邪魔だなあ。でも、ここはやっぱり社交辞令を考えてなるたけ印象よくなるように答えるべきだろうね。

「大変美味しゅうございます」

この回答は百点満点なはずだ。僕は社会を生きることができません。

「お世辞ありがとう」

何故、バレた。

「君、何でそんなバツの悪そうな顔してんの？」

しまった。お母様が言った「お世辞」っていうのは謙遜という意味のフェイクだったか。

僕はその後、なんだかんだと言い繕いながらやたらと元気に苦手の卵料理を平らげた。

「ご馳走様でした。大変美味しゅうございました。お食事ありがとうございました。じゃ、帰ります。どーもお邪魔しました」

「待て」

食事が終わったのでさっさと帰ろうと席を立ち、たってけ歩き出すと、彼女に首根っこを掴まれた。首が絞まって息が詰まる。君さ。どーしてこうちよくちよく暴力的なの？ 普通、まず、口頭で「待って」って言うてから、それでも待たなかったら手を出すんでしょ？ 言いながら首掴むって「撃つぞ！」って言いながら撃つようなもんだよ。と、色々文句を言いたかったけど、口には出せない僕はダメな奴だなあ。

「もうちよつとゆっくりしていくといい」

「いや、もう十分にゆっくりしたよ」

「お茶を出す」

彼女は僕の首根っこを掴んだまま台所兼食堂の隣にある茶の間へ連行し、ソファに置いて「動くな」と目で釘を刺して、台所へ戻っ

て行つた。ここで、こつそり帰つたりしたら、今度は目じゃなくて手で、釘じゃなくて何か刺されそうな気がしたので大人しくしていることにした。彼女つてなんかたまに猟奇的な気がするんだよなあ。浮気なんてしようものならノコギリで首を斬られかねない。あ、斬られるのは浮気相手の女の子の方が。

「ねーねー」

みょうちきりんなことを考えていると、同じ茶の間にいたお母様が声をかけてきた。四十路のおばさんが「ねーねー」とかちよつとあり得ない気もするけどスルー。

「何ですか？」

「君さ。本当にうちの娘と付き合う気なんだよね？」

改めて、こんなことを言われると何だかとても気恥ずかしい気分になるもんだ。しかも、そう問いかけてくるのは彼女のお母様なんだから恥ずかしさ倍増さ。

まあ、それはさておき。何だつてお母様はそんなことをいきなり聞いてくるのかといぶかしむとお母様は真顔で言いなすつた。

「いや、将来、うちのお婿さんになるかもしれない相手なんだから、本当にその気があるのか確認とかしないと」

「いやいや、ちよつと待つてくださいよ。奥さん」

「お義母さんつて呼んでちよつと待いな」

「いやいやいや、ちよつとちよつと待つてください」

この人、何言ってるの？

「だつてね？ 母親の私が言うのもなんだけど、うちの娘は一途なのよ」

本当に親が言うこつちゃないね。

「だから、たぶん、あの子は初めて付き合つた相手と結婚するんじゃないかなあーって思うのよ」

「いやいや、一途な性格だからつてそんな極端なことはないでしょう」

彼女はたまーにやつたらと恐いくらいに重い愛を垣間見せるし、

執着心というかそーいうのがだいぶ強いようにも思えるけど、だからってねえ。そこまで極端なことを言い出したり、実行したりするわけないと思う、んだけど、どうだろう？

「うーん」

僕の反証にお母様は暫し考えてから答えた。

「でも、私もそうだったしねえ」

「は？」

「いや、私も旦那が初めて付き合った相手なのよー。それに、なんていうか、娘の行動も今思えば、私が旦那に片思いしてた時の行動によく似てるしねえ」

彼女の重い愛と強い執着心は遺伝であるらしい。重い愛染染色体とあるのかな？ 何にせよ厄介な遺伝だなあ。

その厄介な遺伝子の後継者はお盆の上に湯飲みを三つ持ってやって来た。

とりあえず、出されるままにお茶を啜る。

「彼と結婚する予定？」

「勿論だ」

のんびり夕食後のお茶をご馳走になっている僕の前で、僕の将来に重大な影響を与えるであろうことが話し合われている。

「じゃあ、お父さんとか親戚とかにいつ頃連絡するか決めないとねえ」

「私としては彼が18歳になったら直ちにしたい」

「いや、それは無理でしょー。大学生夫婦？」

「それも悪くない」

しかも、更に将来の予定が話し合われてるよ。鬼に大爆笑されればいい。とか思いながら僕はお茶を飲み干した。

ゆつくり歩いて帰ろう

お茶を飲み終えてから、僕は彼女宅を後にすることにした。

人んちのトイレでいかがわしいことをしたり、それを彼女のお母様に聞かれたり、僕の将来の予定がなんか垣間見えたりと、中々未知な体験を味わえたものだ。あと親子丼を久しぶりに食べたね。

まあ、そんなこんなを経験した後、お茶を飲んでから、帰宅することにした。いい加減、夜遅いしね。あんまり夜遅くまで滞在していると彼女に「泊まっていくといい」とか言われて同衾したりそれ以上の何かをやらかしたりしかねない。同衾状態で彼女に迫られたとしたら正直拒み続ける自信がない。と、そーなると、この駄文は置き場所を変えなければならぬからな。

お母様が車で送って行くこうかっつていうありがたい申し出をしてくださったけれども、肝心のお母様は野球中継を見ながら缶ビールを飲むという中年サラリーマンじみた行動をしていたので辞退することにした。酒気帯び運転で彼女のお母様が交通刑務所にぶちこまれることを望むほど僕は愚かじゃないのさ。

玄関で靴を履いていると、隣に彼女が座っていた。別に僕は足フエチじゃないけど、彼女の足元を見ると、そのノンソック素足（駄洒落）が靴の中に収納されるところだった。

「何してんの？」

「靴履いている」

「そりゃ見りゃ分かりやう。」

「何で？」

「君は外に出るとき、裸足で歩くのか？」

「いや、靴履くけど、そーゆうこと聞いているわけじゃないのさ。あ、そか。コンビニでも行く気？ コンビニでアイス買って風呂上りに食べようっつていうのかい？ 中々オツだねー」

「違っ」

彼女はスニーカーを履いて立ち上がりながら言った。

「君を送っていく」

だと思った。

「いや、いいよ」

「よくない。そもそも、君は、うちに来るの初めてだろう？」

「うん、まあね」

「迷子になるかもしれない」

僕あ、小学生かと。高校生にもなつて迷子を心配されるなんて。

まあ、確かに、僕は日頃、あんまり外出する主義じゃないから、この辺りに来たことは初めてで、地理に疎いのは否定できない。だけど、学校からこつちまで自分の足で歩いてきたわけだから、なんとなくの位置は分かるし、なんとなく自宅があるはずの方向へ、なんとなく歩いていけば、なんとなく帰宅できるんじゃないかなあーっと思うわけだよ。その旨、説明すると、彼女は眉間に皺を寄せて苦い顔をした。

「心配だ」

彼女は中々心配性らしい。

大丈夫なのになあー。作者だつて東京に出張で出かけた時、なんとなくホテルがあるはずの方向へなんとなく歩いて行って無事ホテルに着けたつていうのに。ただ、駅から10分かからないところを、2時間かけたただけさ。東京つてば道が複雑なのねー。

「それに、こんな遅い時間だ。危ない」

「いや、それは君に言われる台詞じゃない」

どつちかつていうと華の女子高生たる君の方が危ないんじゃないかな。

「変質者に襲われるかもしれない」

「いや、大丈夫だから。男子高校生を襲う変質者つてのは一般的じゃないよ」

「分からない。ホモの変質者とか痴女とかが君を待ち受けているかもしれない」

そんな奇特な変質者がぞろぞろいるような街だったならば、僕は直ちに引越しを検討するね。

「んな心配する必要はないから」

僕は溜息吐きつつ、外に出た。

「じゃ、お邪魔しましたって、何で、君も出てきてるのさ？」

「君を送っていく」

「まだ、そんなこと言ってるのー？」

そんなふうには不満げに言うてはみるものの、僕には彼女を押し留める権利も力もないし、いつまでも何だかんだやってたらいつまで経っても帰れなさそうなので放っておくことにした。つまり、一緒に歩いて行くことにした。

時刻は既に夕方過ぎで、夜空は藍色っぽく、所々にきらきらと控えめに輝く星が浮かんでいる。一等、明るいのは宵の明星かな。いくらか穏やかな風が吹いていて、涼しげで大変宜しい。

「そっち違う」

と、ぼんにやり空を見ながら、そよ風に涼んでいると彼女に声をかけられた。

「え？ 違う？」

「そっちを真っ直ぐ行くと、君の家の方には行けない。戻ってくる羽目になる」

「ふーん、そなんだ」

実際、歩いてみると、やっぱり、地理に疎い上に、方向感覚もイマイチな僕は結構間違ったルートを歩きそうになってしまい、その度に、彼女が僕を制止して、正しい道を示してくれた。こりゃあ、中々ありがたい。

「こつちに曲がると近い」

彼女は僕の家の方どころか場所を正確に把握しているようで、的確に僕を導いてくれる。そりゃそうだよな。彼女、僕の家は何度も来てたらしいからね。ストーリーカーに自宅まで案内されてるって考

えると妙な気分だなあ。

歩いている間、彼女はほぼ無言で、僕の右斜め前をすたすた歩いている。彼女が歩くのは僕の歩く速さよりも少し速くて、少しぼけつとしたり、気を抜いたり、何か他のものに気を取られたりしていると、うっかり遅れてしまうので、僕は何度か歩みを速めないといけなかった。まあ、そりゃあね。足の長さが違いますからね。歩く速度も違いますよ。短足で悪うございましたねえ！

再び離れてしまい、小走りで彼女との間の距離を詰めたとき、彼女は初めて2人の距離が何度か開いたりしていることに気付いたらしく、申し訳なさそうな顔をした。例の如く、ほとんど微かな表情の変化だったけれども。

「すまん。早く歩きすぎた」

「いいよ。別に。気にしてないから。僕がぼんやりしてるのが悪いのさ」

「ぼんやり？」

「ん、だって、ほら、こーやって、何もすることなく、歩いてると脳が暇を感じちゃうじゃない？ そーいうとき、僕は、色々ぼんやりものを考えたり、そこら辺にある何でもないものが気になってちよつと観察しちゃったりするわけさ」

「ふむ。例えば？」

「例えばねー。ほら、空見て星を観察してみたりね？ とはいっても、金星と北極星しか分かんないし、オリオン座と北斗七星とカシオペア座しか分かんないけどねー。あとはー、その家の庭にある小人の置物とか眺めてみたりね。あれって、白雪姫の映画の小人っぽいけど、たぶん、それに似せてるパチモンなんだろうねー」

僕が話す間、彼女はふむふむと興味深そうに頷いたりして、大真面目に僕の話に聞き入ってくれているようだった。ろくなこと話してないから、そんな真面目に聞き入られると恥ずかしいなあー。

「ま、要するに、どーでもいいこと考えたりして時間を無駄にするのさ。遅れてごめんね」

「君が謝る必要はない。それより、君のことを考えずに、早く歩き過ぎてしまつてすまない」

そう言つて彼女は頭を下げた。何だつて、そんな謝るのさ？ そんなに気にすることかなー？

そんなことをぼんやり考えていると、彼女は僕の手を握った。

「だから、手を繋ごう」

「え？ その接続詞おかしくない？」

「おかしくない」

彼女は僕の手を引き、ずんずん歩き出しながら言った。

「手を繋いでいれば、相手がどのくらいの速さで歩いているか分かるから、2人が離れることもなくなるはずだ」

それつきり彼女は黙つてしまった。斜め後ろから見える彼女の顔はいつもどおりのクールな無表情だつたけれど、微かに赤く染まっているような気がしたから、僕は「恥ずかしい」とか「子供じやないんだから」つていうような文句を口にするのは止めにした。

手を繋いだことで、彼女は僕の歩く速さに合わせてくれるようになった。確かに彼女の言つた通り、手を繋いだ意味はあつたね。

しかし、手を繋ぐなんてのは久しぶりだなあ。小学生低学年だつた頃の妹と、買い物に行くときとか、一緒に小学校に行くときに、手を繋いであげていたような覚えがあるなあ。妹が小学校高学年くらいになってからは、お互い、お手手繋いで学校行きましよう。なんて恥ずかしくてできなくなつたから、僕のお手手は結構長いこと他人の掌とは無縁の生活を送つてきた。

久しぶりにぎゅつと握られた彼女の掌はひんやりと冷たくて、でも、何だか心地よくて、僕は気恥ずかしさを感じたけれども、何も言わずに、手を握られたまま、彼女に引かれていくことにした。

僕らはお互い何も喋らなかつたけれども、どーしてか、その沈黙は気まづくも苦痛でもなく、なんとなく恥ずかしいと同時に幸せで心地よくて、僕はそれを長いこと味わいたくて、わざとゆつくり歩くことにした。彼女もそれに歩みを合わせてくれて、気が付くと僕

私ハ君ノモノニナル

らはいつの間にか並んで歩いてた。

いきなり婚約宣言

「ただいまー」

「お邪魔します」

僕は途中ホモの変質者や痴女に襲撃されることもなく、無事、我が家に辿り着き、家上がりこむ。何故だか何でもないような顔で手を繋いだままの彼女も付いてくるけれど、君がうちに入り込む理由は何かな？ 僕を送るんならもう用事は済んだんじゃない？ とは中々言い難い。何せ、僕は彼女に送ってもらった身であるし、もう完全に夜だし、そもそも、彼女は女の子なんだから、巷にありふれる普通の変質者に襲われかねない。普通の変質者って意味不明だけど、前出のホモ変質者とか痴女ではない、普通に女の子を襲うような変質者ってことね。女の子を襲う時点で普通じゃないけど、変質者という枠で見れば普通って、何か考えてて意味が分からなくなってきたので思考を停止する。

まあ、とりあえずは、彼女を家に入れておいて、後でお父さんかお母さんに彼女を車で送ってもらうことにしよう。そうしよう。うん。

その旨を彼女に伝えると、彼女はいつもどおり無表情でこくりと頷いた。

しかし、この家は誰かが家に入ってきてても、迎えに来るとか様子を見るとか以前に、反応すら見せないんだね。これがもし、空き巣だったらどーすんのさ。

我が家は玄関入って真っ直ぐ行くと茶の間直通。右手にある階段上ると子供部屋のある二階へ行ける構造になっている。僕の部屋は二階にあつて、僕は帰宅すると、すぐ二階の自室で読書なりゲームなりに没頭することを日課としていて、夕飯頃にお母さんに呼び出される日々を送っている。ただ、今日ばかりは帰りが遅かったし、彼女もいるので、家族に顔を見せないわけにはいかないね。一応、

今夜は友達の家で勉強しに行つて、ついでに夕飯もご馳走になる旨を連絡はしているけれども、無事帰宅したことを表明する必要は大いに有りだと思つな。

そんなわけで、茶の間のドアを開けた。

「おう、おかえりーいーっ!?」

「ん? あ、兄さんじゃない、おかえりーっ!?」

2人は僕らに気付いて、迎えの言葉を述べる途中で絶叫した。何かな。僕の背後に幽霊でも立ってたかな?

「幽霊だ! 女の幽霊がお前の後ろに!」

「いや、違つから」

お母さんは結構マジで叫び、僕は即座に否定した。生人をどう見たら幽霊だと思えるんだか。

「じゃあ、何? 妄想が作り出した脳内彼女が具現化したもの?

常々、変なことばっかり考えてる変な兄貴だとは思つてたけど、まさか、脳内彼女まで想像してたなんて予想外だわっ! 普段、あんまり色恋に興味なさそうっていうか面倒くさいみたいな態度だったけど、やっぱり、思春期男子の例に漏れずそーいうことに興味津々だったのねっ! そして、脳内彼女まで妄想した拳句、それを具現化させてしまうほどに思念を込めていたとは恐ろしいことだわっ!

こんな能力がこんなダメ兄貴に備わっていたとなると、世界は崩壊してしまうわっ! きつと、面倒くさいって理由だけで何でもかんでも放つたらかしにしてしまうから世界は無気力とだらけが蔓延してしまつて、全ての経済活動は元より生命活動すら面倒くさいって理由で停止しかねないものっ!」

「意味分からんよ」

妹は何だかわけのわからないことを口走り出す。

「彼女は、えーつと、まあ、クラスメ」

「婚約者です」

イト、と言う前に彼女が口を挟んできて、僕の言葉は押し退けられてしまった。声でも負けてたら、僕は何で勝てばいいのさ?

「でえーっ!?!」

彼女の言葉にお母さんと妹は「シェー」によく似たポーズで絶叫した。

「おい! ちょっと待てや! 何、勝手に婚約してんだっ!?!」

親が勝手に決めた婚約に反発する子供ってのは、ドラマとか漫画とかでよくあるシチュエーションだけど、息子が決めた婚約に反発する親ってのは、まあ、いるか。てか、こっちの方が実際、よくいるね。なんか、息子が子持ちの東南アジア人の嫁さん連れてきたとか、娘が親父と同じくらいの年のおっさんと結婚するとか言い出すとかね。うーん、ぞっとしないなあ。

しかし、今回はそーいう事情じゃあないんだ。

「いや、僕も婚約まではした覚えがないんだけどねえ」

つまり、僕当人も勝手に婚約されてた一人なのさ。我が家全員が勝手なことされた被害者なわけだね。仲間仲間。

とりあえず、僕は彼女に茶の間のソファにでも座っているように言い、台所でお茶の用意をして戻った。普通の家庭ではお家に息子の友達なり何なりが来たら、お母さんが「お茶でもどうぞ」とお茶と茶菓子でも出すところだけでも、うちのお母さんはそんな気のきく人じゃあないし「てめーの客のもてなしはてめーでしろや」という思想の持ち主なので、お茶出しを期待するのは間違いなのさ。

「はい、お茶、どうぞ」

「ありがとう。頂く」

お茶を渡すと彼女は丁寧に頭を下げて礼を言ってくれた。うちの家族なんかお茶とかコーヒー入れてあげても無反応なのに。良くて「ん」とか一言だけ。なんて冷たい家族なんだ! まあ、僕もそうだから家族を非難できる立場にないんだけどね。

一応、弁解しとくけど、なんか家族仲が悪そうだけど、別にそうじゃないからね? そもそも、家族仲の酷い家では家族にお茶とかコーヒー入れてあげないだろうし。うちの家族はただお礼を言うのが面倒くさいので言わないだけなんです。口を開けて4文字呟くの

もかつたるいなんで、怠惰な連中だなあ。人のこと言えねってね。
「あんだ、私の分は？」

自分の湯呑みを持って彼女の隣に座ると、斜め向かいにあるソファに座っていたお母さんが僕を睨みながら言った。

「だって、いるって言わなかったじゃん」

「ちつ。相変わらず気のきかねー奴だな」

お母さんは舌打ちしてから、僕の湯呑みを奪って、お茶を飲み干して空っぽにしてから、僕の前に置いた。

「……………」

僕と彼女は二人で黙って空の湯呑みを見つめる。

しかし、やっぱりお母さんは凄いなあ。入れたてのあつついお茶を一气飲みできるなんて。尊敬しちゃうや。

「で？」

「で？」

なんか僕の周辺の人は一文字で意思を伝えようとする人が多いよ
うな気がするな。一文字では意思伝達不可能なんだってことをいい
加減分かって欲しいな。まあ、僕も人のこと言えないんだけどさ。

「それで、お前ら、その、本気で結婚すんのか？」

お母さんにしては珍しくしどろもどろといった様子で聞いてきた。
結構、真面目な質問らしい。

その問いに対して僕は小首傾げ、両手を軽く挙げて答える。

「さあ？」

「さあ？つじやねーだろうがっ！ おめーが勝手に言い出してるこ
つたるーがあっ！」

お母さんは激昂した。こんな些細なことで怒鳴り出さなくてももい
いと思うけど、うちのお母さんは、キレやすいことには定評のある
平成っ子も吃驚なくらいキレやすく、手が出やすく、常に怒ってい
るような人だから気にはいけない。

「いや、僕が結婚するとか婚約したとか言ってるわけじゃないから」
「は？ だって」

「それは、彼女が言ってるだけなのさ。僕も今さっき、いきなりそんなことを言われて吃驚してるとい」

「表情変わってないべ」

「まあ、そーいうこと言いそうな人だって知ってるからね」

彼女の「いきなり婚約宣言」は確かに僕にとって予想外なできごとだったけれども、事前になんともなくでも彼女に関する情報を備えていれば、予想の範疇とまでは言わないけど、予想の周縁くらいではある言動だったからね。彼女について何も知らないお母さんたちと吃驚度に差が出てしまうのも当然のことだね。

「そーいうこと言いそうな人？」

「うん」

「うん、だけじゃ分からんべや。もっと詳しく話せや」

「まあ、そーだろーねー」

「分かってんなら、さっさと説明しろっ！」

お母さんに怒鳴られ、頭をばかりとぶたれるも慣れたことなのでさして気にしない。頭にできたたんこぶを摩りながら彼女について軽く説明する。勿論、彼女としたエロいことしたってことは言わないでおいた。そんなことを堂々と母親に説明できる人がいたら僕はその人を、なんていうか、凄い変わった目で見てしまうと思っなあ。

私八君ノモノニナル

いきなり婚約宣言(後書き)

次回最終回です。

私八君ノモノ

僕と彼女が付き合うことになった経緯を軽く説明した後、のっそりと彼女が立ち上がった。トイレかな？　うちのトイレはやたらと寒いから気をつけてね。まあ、今の季節はまだ大丈夫だけどさ。

彼女は黙ったまま、おもむろに床に正座して三つ指ついて、お母さんと妹に向かって深々と頭を下げた。何をする気？　いや、まあ、なんとなく予想はできるんだけどさ。彼女が彼氏の家に行つてその家族に対して改まって言う言葉にそれほど種類があるとは思えないからね。

彼女は頭を上げ、お母さんをきつと睨みつけて、言った。

「息子さんを私にください」
それ違う。

「僕はモノじゃないよーってか、それはどっちかっていうと僕の台詞だと思つよ？」

「む。そーいえばそうだな。確かに。じゃあ、言い直そう」

僕が忠告すると彼女は無表情で頷くと少し考えてから、再び口上を述べた。

「私を息子さんのものにしてください」

だから、人は誰かのモノ扱いするのはどーかと思うよ。とかそーいうふうなことを考えるよりも先に、なんかちよつとおかしい口上なんじゃないかなあ。もしも、彼女を僕のものとするのに、僕の家族の許可がいるのかなあ？

「そーいうときの台詞は、これから世話になるから、宜しう的な言葉でいいと思つよ？」

「そうか？」

「うん。そー思つ」

「君がそう思つなら、そうする」

彼女はそう言つと再び姿勢を正して、頭を床に擦り付けんばかり

深々と礼をして言った。

「これから末永く、永遠の別れがやって来るまで、私は彼と共にあろうと固く決意しております。その為、彼のご母堂様と妹御様には、お世話になりますので、何卒宜しくお取り計らい願います」

重い。挨拶が重いよ。彼女が彼氏の家族に初対面で言う台詞ちゃうよ。いや、まあ、こーいう場面でこーいう台詞を吐けばいいのかなんて知らないけどさー。

このやたらと重たい言葉を受けて、

「んー。まあ、好きにしたらいいんでないかい」

お母さんは頭をぼりぼり搔きながらいい加減に了承した。おおい、それでええんかね？ 我が家の長男坊の将来がかかっているんだよー？

僕がその辺りのことを踏まえて反応して欲しいなと要請したところ、お母さんは舌打ちしてから面倒くさそうに僕を睨んで言いなすった。

「んなもんどーでもええがな」

ええー。その答えは予想外だったなー。

「結婚するもしないもてめーの人生だろーが。んなもんでめーで好きにしたらいいじゃねーか」

そんなんでいいのか。なんという放任主義。というよりも無責任主義。っていうか無関心主義？ まあ、とにかく、何にせよ。ダメな親だつていうことだけは確かだね。

「ということらしい。明日、市役所に行こう。婚姻届をもらってこなければ」

いつの間にか床から僕の隣に位置を変えていた彼女が目をきらきらさせながら僕の手を取って熱っぽく言った。ただし、やっぱり、無表情。

「何が、ということなのか分かんないんだけど。とりあえず、君、民法731条を読むといいよ」

「民法731条？」

「僕が何歳か知っているかい？」

僕の問いに彼女はすらすらと答える。

「勿論知っている。9月1日生まれ、16歳。乙女座。A型」

「いらん情報までありがとう」

お陰で情報が漏洩してしまったよ。ちなみに全部合っている。血液型を聞かれて答えると「えー。嘘ー」と言われるのが最近の悩みな男子高校生たあ僕のことさ。

「そうか。君は再来年まで結婚できないのか」

彼女は残念そうに呟き、お母さんはテレビのバラエティ番組を見て、げらげらと豪快に笑った。もうこっちに興味なしってとんだけ無関心主義なの？

「何考えてんのこの糞兄貴っ！ 大体ね！ 今、何時だか分かってんのっ！？ もうこんな夜だっつーのっ！ 外見れば分かるでしょうがっ！ 真っ暗でしょっ！？ 兄ちゃんの目がいくら節穴だっつっても明るい暗いか暗いかくらいは分かるでしょうがっ！ それもわかんないくらい役立たずの目だったら今すぐ抉り出して捨ててカラスの餌にしちまえっ！」

「あ、あー、分かつ」

「夜だつてことが分かってんなら、何で、そんなことをほざいてんのさっ！？ あんたの口はっ！ いつつも余計なことしか言わない口だと思つてたけど、本当に全く余計なことを言わないわねえっ！ その舌、脳と繋がってるのっ！？」

「んー、ま、まあ」

「なら、本当におかしいのはあんたの頭だつてことでしょうがっ！？ 普段から、馬鹿なことばっか考えてると思つてたけど、実際、馬鹿な上に有害かつ無神経なことしか考えてなかったみたいねっ！ 脳味噌腐ってるんじゃないのっ！？ こんな夜に、一人でとぼとぼ歩いて帰つて、あんた、常識つてもんが分かつてるのっ！？ てか、そもそも、あんたが送られてきて、あの人、送っていかない

って意味わかんないじゃないのさっ！ あんた、それでも玉ついてんのかっ！？」

「女の子がそーい言葉遣いをするのは」

「うっさいわねえっ！ くだんねーことぐだぐだぐだ言ってんじやないわよっ！？ 今は、あたしが喋ってんのっ！？ 兄ちゃんは無黙って耳の穴かっぽじってよく聞いてなさいよねっ！ 今日という今日は、あんたに常識つてもんを教えてあげるからっ！」

妹から説教という名の罵倒を受けている間、僕は冷え冷えとしたフローリングの床に正座させられていた。彼女はお母さんと一緒にテレビを見ている。時折、僕に向けて嘆かわしそうな視線を向け、僕の側に行きたそうに腰をもそもぞさせているけれども、ビールで酔っ払ったお母さんに肩を組まれ、動くに動けない状況だ。

ところで、何故、僕がこんなにも中学三年生の妹に罵倒されているかというと、まあ、その責は僕によるものなだけだね。大抵のことにおいては、僕よりも妹の方が正しいのさ。

妹のお怒りの原因は僕の不用意な発言によるものだ。というのも、まあ、用事も済んだことだし、夜も遅いことだから、彼女に「じゃあ、帰ったら？ また、明日」と言ったことに平素から非常に堪忍袋の緒が脆い妹はぶち切れた。曰く、「てめーは彼女さんに送ってもらっっておきながら、こんな夜遅い時間に彼女に向かつて一人で帰れば。とはどーい言う草だあっ！」ということらしい。ごもつとでもです。

いや、僕だつて、こんな夜遅い時間に彼女一人で帰そうとは思っていなかったよ。勿論。ただ、ちよーつと「夜も遅いし、危ないから送っていくよ」ってな言葉を付け忘れただけなのさ。本当本当。さて、そんなわけで彼女を送っていかなければならないわけだけれども。ここで一つ問題が生じる。というのも、僕が徒歩で彼女をエスコートしてあげることも吝かではないのだけれども、しかし、自慢じゃあないが、僕は人を守り導くことに関して、特に「守る」という行為に関しては著しく不適格な人間であると言わざるを得な

い。要するに、もし、変質者が彼女の目の前に現れたとしても彼女を守る力なんぞこれっぽっちもない弱っちい奴なのさ。

できれば車で送ってあげたいところだけでも、お母さんはアルコールを多量に摂取していらっしやるので車の運転は無理だ。そもそも、車はお父さんが会社への通勤に使っていて今この家にはない。っていう理由だから、お父さんが帰ってくるまで待つてくれる？」

妹の罵倒を半時くらい受け続けた末に、身体は健全、精神はずたずたという見かけにはダメージが分かりにくい状態の僕はぐったりとした気分で彼女に提案した。妹もさすがに半時間ぶっ続けで罵倒するのは堪えたらしく、台所でペットボトルのスポーツ飲料をラッパ飲みしていた。

彼女は文句も言わず黙って頷いてくれた。

「小うるさいどころか超うるさいうちの妹とは大違いだなあ」

「誰が超うるさいですってえっ!？」

「あ。心の中で呟くはずだったのに、つい、本音が口からポロリと……」

「にーいさーんっ!!!」

台所で妹が鬼の形相で僕を睨んでくるものだから、僕は咄嗟に彼女の手を取って、茶の間を出た。

「とりあえず、僕の部屋に避難、じゃないや、待機していようか。」

「ここじゃあ、お母さんに絡まれるといけないからね。妹の罵倒から逃げ出したいからじゃあないよ。本当だよ」

僕の自室は二階にある。我が家の二階には部屋が二つあって、片方が僕の部屋。もう片方は引きこもり姉さんの部屋だ。

「やれやれ、うちの妹は暴力的でいけないなあ。言葉の暴力が酷すぎるよね!。あれじゃあ、幸せになれんよ」

無事、部屋の中に避難してから、僕は呟いた。妹は追ってこなかったようだ。中学生だってそこまで暇じゃあないのさ。宿題とか明

日の予習とかテレビによる情報収集とかあるだろうしね。

「あ。そこら辺、てきとーに腰掛けててって言っても椅子は一つしかないからねー。ベッドの上にも座っててー」

彼女は僕の部屋に入った後、部屋の入り口辺りにぽつんと立って、きよろきよろと部屋の中を見回していた。床の灰色の絨毯を見て、僕が小学生のときから使っている学習机を見て、ヘンテコな本ばかり詰まっている本棚を見て、ヘンテコなガラクタが詰まっている棚を見て、小型の液晶テレビを見て、ゲームとDVDの積まれた山を見て、僕が夜な夜な横になったりならなかったりしているベッドを見て、何故か顔を赤らめた。え。何、その反応。

「こんな統計を聞いたことがある」

「ほう」

「女性が初めてセックスをした場所で最も多いのは彼氏の部屋だそうだ」

それなんて統計？ 世界保健機関とか厚生労働省とかが実施した確実に信用の置ける統計なの？ そして、その統計結果のごく一部の情報を今僕に開示することに何の意味があるの？ なーんて、聞かんでも分かるがな。

突然、彼女は僕にタックルを食らわせてきて、僕は息を詰まらせながらベッドに仰向けに倒れ込んだ。その上に彼女が落ちてきて、僕は危うく親子丼の成れの果てを口から放出するところだった。

「いきなり何す」

そこまで言ったところで、彼女の唇が僕のそれに吸い付き、同時に舌が捻じ込まれてきた。前歯が当たって少し痛かったけれども、彼女はそんなことなど気にしない。僕の口の中を舌で縦横無尽に蠢かせ、歯と歯茎を舐め上げ、舌を絡み合わせ、唾液を流し込んで、じゅるじゅると音を立てて嚙り上げ、二人の交じり合った唾液をうつとりとした顔で嚥下する。

「あらら、僕の彼女は発情してしまったのかな？」

「うん」

僕が冗談めかして呟くと、彼女はあっさりと頷いた。潤んだ瞳で僕の眼球を覗き込みながら、啄ばむようなキスをちゅっちゅちゅっちゅと僕の顔に浴びせてくる。

「ちゅ、もう我慢できない。ん、ちゅ、ちゅ」

彼女がいつ、どこで、どれくらい我慢してたっというんだらうか？　なんか出会ってからずっと欲望のままに行動していたように僕には思えたんだけど。

彼女に唇を何度も啄ばまれ、顔中を舐められながら、なんとかその旨を伝えると、彼女は遺憾そうに眉根を寄せた。

「我慢していた。ずっと、ずっとだ。もう、ずっとずっと、永遠かと思うほど、君とこんなふうになれる日なんて来ないかもしれないと思っていた。ずっとずっと我慢してきたんだ。こんなふう君に触れることを。ちゅ、こんなふう君と口付けすることを。こんなふう君に私の気持ちを伝えることを。こんなふう君と愛し合うことを」

そう言っ、彼女は嬉しそうに、満足そうに微笑んで、僕に口付けた。

そんなことを言われたら、まあ、その、なんていうかね。そこまです、僕のことを想ってくれるんなら、ちょっと彼女になら身を任せてもいいかなって気持ちになる。あれ、僕の思考回路ってなんか処女な生娘みたい？　普通、逆じゃね？

僕が首を傾げている間にも、彼女は僕の顔やら首やら耳やらに舌を這わせ、唾液を舐めつけ、肌に吸い付き、甘く噛んでくる。彼女の左手は僕のシャツの中に潜り込んで、僕のお腹とか胸を優しく撫で回し、右手はベルトを緩め、ズボンのチャックを下げ、その中に潜り込んでくる。彼女のひんやりとした指が、既に、僕の股間で硬く起立しきっている息子を撫で擦り、ぎゅっとなぐ握ってくる。

そんなことされりゃあ声が漏れてしまうのも当たり前さ。

「ん、んー、んあ、ん」

「気持ちいい？」

「ん、んーっと、えーっと、んあん！」

「気持ち良さそうな声が出るぞ？ 顔もかわいい」

彼女は何処となくうつとりとした目で僕を見つめながら、己の股間を僕の足に擦りつけ、胸を僕に押し当ててくる。

「ねえ、私も。私にも、して」

そんなふうには耳元で甘えるように囁かれたら、そりゃあ彼氏としては彼女の甘えに応えてあげないといけないうねえ。

「あれ？ 君、ブラは？」

シャツの上から彼女の乳を揉むと、なんとブラの感触なく、いきなり、乳の感触が掌に感じられて吃驚した。

「してない」

「え。何だよ？」

「君とこーいうことになるかもしれないから」

「いつからさ？」

「家で着替えてから」

あー、そーいえば、彼女の部屋でごちゃごちゃやってるときもブラなかったなー。ということは飯食ってるときも、帰るときも、お母さんと妹に挨拶してるときも、ずっとノーブラだったと。君、恥ずかしくないのか？

「外す手間が省けていいだろう？」

彼女は特別そのことに羞恥など感じていないのか。そんなことを言い出す始末だ。まあね。確かに、手間が省ける。

乳を弄くりながらも、もう片手を彼女のジーンズの中に滑り込ませる。

「まさか、こつちもノーとかいわないよね？」

「そんなことはしない。まあ、君が望めばしてもいいけど」

いや、ノーブラだって僕が望んだわけじゃないし。勿論、ノーパンだって望みやしないさ。でもでも、まあ、二人っきりで部屋の中でならば、いいかもしれない。

「ん。濡れてる。エッチだなあ」

「ああん、だつて、君とこんなふうになつてゐるんだ。濡れない方がおかしい」

彼女のパンツの中に指を入れて、意地悪なことを囁くと、彼女は頬を桃色に染めながら答える。

二人の行為は止まることなく、遂に本番、終点、行き着くところまで行つてしまふのか？ 僕らは目的地直行の最終特急列車のように走り抜けてしまふのか？ 彼女はそれを望んでいた。ただ、一つ屋根の下には家族がいることを僕の理性が告げる。止めておくべきだ。もうこのくらいにしておかないと。何せ、今日は、いっつも、いいところで邪魔が入る運命みたいだからね。

彼女から手を、体を、唇を、離しかける。

離れかける僕を抱き寄せて彼女は僕の耳元で甘く淫らに可愛く美しく、囁く。

「んん、あん、んあ、きて、して、私を、君のものにして」

そんなことを言われてしまつては、それを拒絶する力も意思もあつという間に木っ端微塵に砕け散る。同じ屋根の下に家族がいるという事実も僕を抑止するには足りない。ただ、愛欲に身を任せかけていた。

「が、そうは問屋が卸さない。何故ならば、これはラブコメディであり、官能小説ではないからさ。」

「兄ちゃん。お父さんが、あと少しで帰つて、く、る……」

妹よ。前々から言つてゐるはずだよ？ 僕の部屋に入るときはノックをしなさい。と。そのせいで三回も僕は妹に自慰を見られていて、妹はその度に絶叫して、何故だか僕を散々攻撃するのだ。

そして、今回の悲劇だ。いや、喜劇？

「ぎゃーっ！！！！ 破廉恥っ！！ スケベっ！！ 変態っ！！ エロっ！！ 最っ低っ！！ 最っ悪っ！！ 死ねっ！！ ボケエツッ！！」

妹はそう僕を罵倒して、階段を駆け下りて行つた。

ああ、凄く悲しく虚しい気分だ。

頂垂れる僕の顔を覗き込んで彼女が呟く。

「続き、する？」

「しないよ」

僕は溜息を吐き、彼女も不満そうに吐息を漏らす。

しかし、すぐに気を取り直したのか、僕を睨んで、にっこり微笑んで、囁く。

「まあ、でも、私は君のものだ。いつでも、どこでも、どんなときでも、私を愛してくれ」

まったく、彼女には敵いそうもないなあ。

もう！ かわいいんだから！

終

私八君ノモノ（後書き）

「私八」最終話です。

長々とお付き合ひ頂き、ありがとございました。

ちよつとエロが、ギャグが、蛇足が、行き過ぎた点が多々あったかと思われませんが、無事、叱責や注意を受けることなく完結させることができました。もしかすると、温情で見逃してくださっていたのかも知れません。

さて、これにて僕と彼女の出会いの馴れ初めは一旦終了ではございますが、現在、僕と彼女のその後の日々を描く長期連載を計画中でございます。いつの日か、連載されました暁には、宜しくお付き合ひ頂けましたならば幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4766e/>

私八君ノモノニナル

2009年5月29日01時03分発行